

裏切りの代紋（前編 1 淫謀編）

裏切りの夜

深夜の国道バイパスを2台の黒塗りのベンツと3台のマイクロバスが車列を組んで疾走して行く。

午前1時をまわり行き交う車はほとんど無く、たまに行過ぎる対向車のライトがベンツに乗る数人の黒スーツを着込み、黒眼鏡を掛けた男たちを照らしていく。

「今日こそ決着をつけてやる。」

目高組の若頭の青沼が心の中でキッパリとつぶやいた。

目高組はこのS市で古くから縄張りを持つ暴力団であった。

この地方の中心都市に隣接するS市は、バブル景気に後押しされた住宅需要の急増も伴い、近年急速にベッドタウン化が進み驚く程人口が増加していた。

人口の増加、すなわち収入に余裕のある勤労世帯の増加と、おりからのバブル景気に浮かれた金余り現象による遊興への金の流れは、S市の歓楽街を潤し、目高組の収益に結びついてきた。

この発展を続けるS市に目を付け、目高組の縄張りにちょっかいを出して来たのが、大亜門戸（ダイヤモンド）会と云う、ふざけた名前を持つ新興の愚連隊だった。

最初は大組織の余裕で目高組の方から相手にすることは無かったが、歓楽街での縄張りをめぐる組間の争いが頻発し、怪我を負わされる組員が増加すると無視を続ける訳にはいかなくなってきた。

更にその後のバブル景気の崩壊による収入減は、互いにどちらかの組を食い潰して、相手の縄張りを奪ってしまわないと組が存続出来ないとの危機感を募らせ、露骨に縄張りをめぐって抗争を繰り広げ始めたのだった。

「今夜、憎い大亜門戸会の剛沢会長の首を取ってやる。」

もう一度心の中でつぶやいた。

相手の暴力団の本部への奇襲攻撃に参加する目高組の組員達は、まるで忠臣蔵の討ち入りの様に士気が昂ぶり、相手の不意を衝いてのこちら側からの一方的な蹂躪による血腥い殺戮の予感に野獣の様な闘争本能を掻き立てられ、誰もが興奮していた。

しかし、青沼の心には、不思議と闘争心が湧き上がることは無く平静であった。

今回の殴り込みの際は、事前に十分準備を積み、敵方の内通者からも情報を得ていた。殴り込みをかける敵の建物の敷地や間取りは全て知悉しており、現在どこに何人の敵が居て、目指す剛沢が今どこに居るかも内通者から情報を掴んでいた。

広大な敷地内には外部からの侵入者に備え無数のセンサーや監視装置が仕掛けられており、外部からの攻撃を見張るシステムが在ることは、内通者から知らされていたが、事前に無力化しておく事が約束されていた。

また内通者も大亜門戸会の中では、部下を預かる一角の地位に在る男であり、今回はそれら組員も大亜門戸会を裏切って、こちら側に付く手筈となっている。

今も内通者から携帯に電話があり、こちらの手筈は全て整ったから、早く来てくれーと、連絡があり、10分以内に到着するーと、応えたところだった。

十分に情報を掴み、敵の屋敷の間取りに基づいて何度も訓練を重ね、今回の殴り込みのため周到に準備を進め、更に内通者の組員も併せれば、敵の三倍近い人数となり、それが敵の不意を衝いて殴りこむのだから万に一つも失敗する筈が無いと信じていた。

後10分後には全ての決着が着く筈だ。

従って、青沼の気懸かりは、この殴り込みの成否では無く、自分の隣に座る今夜が初陣となる組長の息子の方であった。

目高組は、超武闘派の暴力団であり、その組織の支配理論は言葉では無く暴力であった。現在の組長である奈和は、ステゴロでは一度も負けたことが無いとの伝説を持つ男であった。子分もそんな強い親分を慕い、奈和親分の持つ不敗伝説に基づくカリスマ性により、組織の強い規律が守られていた。

組長は、将来の組の跡目を若い息子に継がせたいと思っていることは青沼にも判っていた。青沼の公平な目から見ても、決してこの若者に能力が無い訳では無い事は理解していたが、実戦経験も無く、今の組長と比べると、どうしてもひ弱に見える息子が組長に就任しては、力の掟が支配する組織の中で、この若者を侮る者が出ることは当然予想され、現在のような組の統制が取れるかどうかとも怪しい。

従って、今回の殴り込みでは、若親分を中心に据えて、初陣を成功させ、誰もが認めるような手柄を立てさせなければならない。

今回の殴り込みは、暴力行為に慣れていない若者の初陣には、荷が重過ぎるとの懸念が在った。

しかし、ここで自分や他の組員が先頭に立って、大亜門戸会を叩き潰してしまったら、この若者が組長を襲名するまでの間に大きな出入りの機会は無くなってしまいうだろう。

今回の自分の最も重大な役割は、この若者を補佐して、将来の組長として相応しい手柄を上げさせることであると認識していた。

そんなことをあれこれ考えながら、青沼は車窓からぼんやりと外を眺めていた。

バイパスの両脇に連なる雑木林が漆黒の闇の中に茫洋とした姿を見せていた。

自分が^{ガキ}子供だった頃は、この辺も自然に溢れていて、人の手が入っていない山林の中を近所の子を集めてガキ大将となって遊び回った事が思わず知らず回想された。

既にバブル景気は崩壊してしまったとは言え、バブル景気真っ盛りで住宅需要が旺盛だった頃に、この雑木林の向こう側の山地も削り取られて整地され大きな団地が造成されていた。人口も急速に増え、S市も発展したものだーと、車に揺られながら一人感慨に耽った。

その時突然、雑木林の中から赤く輝る懐中電灯を手にした警官が現れ、進路を遮った。

「げ！検問だ！」

運転していた組員が叫んだ。

「こんな所で検問を張っていると情報は入ってなかったぞ！」

「糞！先行したサブの野郎はどこを見てやがったんでえー！」

助手席の組員が忌々しげに叫んだ。

突然の警察官の出現に同乗していたチンピラ達がオロオロした声を上げていた。

今回の殴り込みでは、慎重の上にも慎重を期すため、カミソリのサブという威名を持つ機転の利く若いチンピラに、目立たない様に原付バイクで先行させ、殴り込み部隊の先導をさせていたのだった。

従ってサブから何も連絡が無い以上、進路に何も問題が無い物と信じて、油断し切って居たのだった。

「まずいな、何とか適当にごまかせ。」

自分が動揺したら組員の士気に拘わると、努めて冷静さを取り繕って、運転手に指示した。雑木林の中に姿を隠していた幾人もの機動隊員がワラワラと一斉に路肩から飛び出し、たちまち、道路は鉄柵により封鎖された。

停止した車の窓から運転手の組員が顔を出して、取り囲む警察官に話しかけた。

「警察の皆さん、ご苦労さんです。いやね、俺たち社員旅行で、これから夜っぴいて車を走

らせて、有馬温泉に向かうところだったんです。」

と、にやけた顔で、とぼけた説明をしようとした。

「うるさい、つべこべ言わず車から降りるんだ！」

警官隊は免許証を見せるとも言わず、全員を車から降りるように命じた。

県警も総動員を掛けたのか、取り囲む機動隊員の数は百数十名以上いるようで、こちらの数よりはるかに多いことがうかがえた。

全員ヘルメットに強化プラスチックの面体を付け、防弾チョッキを着込んだ物々しい防護服姿であり、異様な緊張感が漂っていた。

有無を言わせず、マイクロバスから降りるように警官から命じられた特攻服に身を包んだ組員が、「何だ！何だ！警官横暴だぞ！」とブツブツと文句を言いながらマイクロバスから降りされると、入れ替わるように、武装した警官がバスの中に突入した。

一方では、ベンツのトランクやボンネットを開き、車内の検査を始めていた。

「糞、まずいな・・・」

予め何かの目的を持って捜索するような、警官隊の無駄の無い動きを見ながら、青沼が忌々しげに小さく呟いた。

「在った、在ったぞ！」

ベンツのトランク内を探していた警官が、トランクの敷物の下からライフル銃を発見して、手に持って叫んだ。

「こちらにも、在りました！」

マイクロバスの窓を開けて、警官が日本刀を手に身をのり出して叫んだ。

「拳銃と実弾を発見！」

別の車を捜索していた警官が興奮したように叫び声を上げた。

現場の状況を写真に記録して残すために焚かれた幾つものフラッシュの光が、あちこちの車の中からまるで稲光の様にまばゆく輝いた。

全ての車の中から武器を発見した後、警官隊の現場指揮官とおぼしき男が、その様子を確認すると、青沼に向かって勝ち誇ったように、

「刑法第 208 条兇器準備集合の容疑、並びに銃刀法不法所持の現行犯で全員逮捕する！」

と、宣言した。

夢にも予想していなかった突然の事態に、「くそー！」と歯軋りしたが、今の状況ではどうすることも出来なかった。

この様子を道路の反対側の雑木林の暗闇の中からじっと眺めている男が居た。

鬱蒼と茂る木立の暗闇に身を隠すようにして、その狐のような細い目で一部始終を見届けると、薄い唇の端にニヤッと狡猾な笑みを浮かべた。

そして、懐から携帯電話を取り出すと何処かに小声で電話を始めた。

「もしもし、大亜門戸会の親分さんですか？目高組のサブっていう者^{モン}です。まさに一網打尽と言うやつでさ。目高組の奴等は、計画通り全員警察に逮捕^{キツ}られやしなせ。・・今、全員手錠^{ワッパ}をはめられて、これから護送車に連れ込まれる所でさ・・」

携帯電話から話し相手の声が返って来た。

「そうか、ご苦労だったな、こちらもこれから殴り込みをかけるところだ。直ぐにこちらに来てくれ。」

へい、分かりやしたーと、一声応えると、ヘルメットを被り、木々の間に隠しておいた自分の乗って来たバイクの所まで戻り、エンジンを起動して、静かに林の中から走り去った。

逆襲

深夜のS市の繁華街には、ほとんど人通りも無く、街灯だけが明るく街路を照らしていた。その繁華街の立ち並ぶビルとビルの中の狭い隙間の物陰から、道路を隔てた向かい側のビルの様子を油断無く窺っていた大男が、満足げに肯くと、手にしていた携帯電話をパタンと閉じた。

そして、自分の背後に控える屈強な数人の男達に目配せした。

その時、自分の監視する向かい側のビルから、一人の男が出て来てこちらに歩みよって来るのが分かった。

男は左右に気遣い慎重な面持ちで足を運びながら、物陰に隠れていた大亜門戸会の剛沢の方に真っ直ぐに歩み寄ると、「これが5階の非常口の鍵です。」とシリンダー錠の鍵を渡した。

「ご苦労だったな、黄原。今サブから連絡が在った。計画通り旨く運んだようだ。」

大亜門戸会のボスである剛沢が男から鍵を受け取りながら言った。

「こちらも計画通り、目高組の奴等は全員1階に張り付いてやすから、今5階に居るのは姐さんとお嬢だけです。外の非常階段を見張っているのは、全員俺の部下ですから話は通して

ありやす。目高組の奴等も万一殴り込みが失敗した時の為に、返り討ちの備えとして、組事務所を守っていますが、まさか頭の上から奇襲されるとは、夢にも思ってませんぜ。」と、ニヤニヤしながら説明した。

黄原という男は、目高組のナンバー3の幹部であったが、組内で冷遇される自分の立場が嫌になって、大亜門戸会に密かに寝返っていたのだ。

今回の警察に内通して、殴り込みに向かう組員を全員逮捕させると云う筋書きを描いたのも黄原であった。

目高組はS市中心部の繁華街の外れに鉄筋コンクリート造りのビルを持ち組事務所にして
いた。

ビルの1階は怪しげな不動産屋で、2階では悪徳貸金業を営んでいた。3階が若い衆が雑魚寝する部屋で4階が幹部の居室、5階から上が親分の住居になっていた。

黄原が描いた計画は、ビルの裏手の狭い路地に通じる屋外の非常階段から、直接5階の住居を襲い、そこにいる組長の女房と娘を人質に取り、目高組に降伏を迫ると云うものだった。黄原は5階の合鍵を渡すと、左右に注意を払い、元の建物に戻って行った。

「まだ何の連絡も無いとは、どうしたことでー！青沼の野郎、ドジでも踏みやがったんじゃないか？・・・大体、親分も青沼の野郎に出入りの指揮を執らせるなんてどうかしているぜ！」目高組ナンバー1の地位にある古参幹部の赤石が、組長が席を外した隙に周囲の組員に忌々しげに不満を漏らした。

超武闘派の目高組にあつて、まだ組が小さい頃に杯を受け、これまで数々の出入りに参加して組長を補佐し、組の発展に貢献して来た目高組の赤鬼と異名を持つ自分が留守番部隊の指揮官という今回の人選が気に入らなかったのだ。

しかし、不測の事態に備えて1階で守備する他の組員は、今回の人選は妥当だと思っていた。赤石と青沼のことを世間では、目高組の赤鬼、青鬼と言うが、赤石はただ粗暴なだけで、組の中でも威張り散し、気に入らないことがあると直ぐに部下を殴ったりするところがあり、三下組員から嫌われていた。

もし今回の殴り込みの指揮を執っていたら、自分だけが先走り、指揮にならないだろうと思った。

その点、ナンバー2幹部の青沼は赤石より遙かに年は若い、腕っ節は強くても粗暴なところは無く、面倒見も良く子分から慕われていた。

あいつなら冷静に殴り込み部隊の指揮を取り、必ず今回の出入りを成功させるだろうと皆が信じていた。

「おい！黄原、テメーどこに行ってた？」

赤石が、表から帰って来た黄原を見咎めて尋ねた。

一応黄原も目高組ナンバー3の幹部で、直属の部下を何人も抱えている地位にあるが、赤石にかかっては、三下組員の扱いと換わる場所が無い。

「ちょっと、表に変な様子が無いか確かめに・・・」

と、何食わぬ表情でとぼけて答えた。

1階に詰める組員たちの中に、さっきまで居た組長の姿が見えないことに、不安を感じた黄原が、手近の組員に尋ねた。

「ところで、組長はどこへ？」

「何か、用事が有るとかで上に上がっていかれました。」

若い三下組員が答えた。

「くそ！面白くもネェー！」

と、赤石は一言口走ると、一階に詰める組員達から離れて一人地下に向かった。

地下室の重い鉄扉を開くと、何も無いコンクリートの床には両手と両脚を縛られた少女が転がされていた。

少女の口には手ぬぐいで硬く猿轡されており言葉を発することを封じられていた。

少女は本名かどうか分からないが、麗夜と名乗る家出娘で、歓楽街で遊んでいるところを目高組の若いチンピラにナンパされて、騙されてここに連れ込まれたのであった。

今回の殴り込みの決着が着いた後で、組の男達で輪姦してから組の売春婦にするつもりで地下室に閉じ込めてあったのだった。

赤石は自分が殴り込み部隊の指揮官から外されたイライラをこの少女の身体を弄んで晴らすつもりで一人地下に降りて来たのだった。

段ボール箱が転がるだけの殺風景な薄暗い部屋の中で、手足を縛られ芋虫の様に身体を縮めて恐怖に身を震わせる少女に赤石が顔を寄せた。

麗夜と云うまるで夜の蝶の様なけばけばしい名前のように髪は脱色して金色に染め、爪には派手なマニキュアをして、顔にも厚化粧をしているが、近くから見ると全体に幼さが残っており、どうやら未だ高校生位か、ひょっとすると中学生位かとも思った。

ここに監禁されてから泣きはらしたのか、潤んだ目は赤く充血し、目の周りの化粧が落ちて目の下がどす黒く汚れていた。

間近から自分の事を嫌らしい目で眺め回す、不気味なヤクザ男に少女は怯えて身体をガタガタと震わせていた。

赤石は無言でフリルの一杯付いた派手な色の長いスカートをいきなり大腿まで捲った。

少女がビクッと身体を縮めて、乾いた悲鳴を上げた。

「何をビクビクしているんだ？これからオジサンが良い事をして上げようというのに・・・」と、少女の両脚を一つに縛っていた縄を解きながら、目に卑猥な色を宿して、ニヤニヤ笑いながら言った。

華奢な足首を掴む赤石の手に、少女の脚の震えが伝わった。

赤石が少女の脚の縄を解いたのは、これからの作業の為のほんの準備に過ぎなかった。

赤石は捲り上げられたスカートの端を掴むと、エイッとばかり思い切り上にたくし上げた。スカートの下に隠されていた、少女の秘部を守るショーツが丸見えになった。

「お前！顔に似合わず可愛らしいパンティを履いているな？」

赤石が面白そうに笑い声を上げた。

やはり年相応と言うべきか、少女は小熊の絵をプリントした子供のようなショーツを履いていたのだった。

「さて、パンティはお子様用だが、中身はどうか？」と、薄いショーツを脱がそうと手を掛けた時、少女は自由になった脚をバタバタさせて必死の抵抗をした。

少女の蹴り上げた脚が、赤石の顔面を捉えた。

何度も殴り合いの喧嘩を経験している赤石にとって、少女の蹴りなど痛くもなかったが、真正面から顔を蹴り上げられた怒りが込み上げて来て、見る見る顔を赤く染めると、自分に逆らったらどんな報復を受けることになるのか少女に思い知らせるかのように、悲鳴にも躊躇することなく、平手で少女の顔を何度も思い切り叩き続けた。

顔面を男の力で殴打される激痛に少女は、猿轡を詰められた不自由な口で悲鳴を上げ、泣き叫んだ。

「何をギャーギャー泣きわめいている！お前はな！これからお前のこの小汚いオコに

男の太い●ポを何本も突き立てられてから、組の為に働く娼婦にされるんだ！
毎日毎晩、股をおっぴろげては、狒々爺みみたいなスケベ男達に此处をこねくり回されるんだ！これぐらいの事でギャーギャー喚くな！」

赤石の激しい剣幕と暴力への恐怖で大人しくなった少女に、激しい口調で怒鳴りつけると薄いショーツに指を掛けて一機に足首まで引き下ろした。

まるで新雪の様に柔らかな脂肪を載せた白い下腹が、赤石の獣の様な目にハッキリと映り、ニヤリと淫靡な笑みを浮かべると唇を舌で嘗めた。

恐怖と羞恥に硬く閉じ合わされた股の間から淡い霞の様な春草が溢れ出ている。

野獣の様なヤクザ者の視線から避ける様に太股を思い切り閉じて震える少女に、薄気味悪い笑みを浮かべて、

「へへ・・・ここのお毛毛は薄いようだな・・・さて、中の具合はどうなっている？」

と、独り言を言うと、わずかに足先に絡んでいたショーツを抜き取り、そのまま少女の両脚首を掴むと、滑る様にきめ細かな脂肪を乗せた白い大腿を思い切り左右に押し広げた。

思わずヒィ！と、悲鳴を上げたが、少女は赤石に再び殴打される事を恐れて、ガタガタ身体を震わせて、無抵抗のまま赤石に狼藉を許していた。

涙をボロボロ流しながら、猿轡の下で苦しい口からママ・・・と少女が言ったように聞こえた。

「うるせー！麗夜なんてケバイ名前を付けやがって！どうせお前の母親は、昔し、暴走族のレディーかなんかやっていて、男と遊んでいる間にお前が出来てしまったんだろう？端っからお前に愛情なんか感じてなんか無かったんだ！

それで、別の若い男と良い仲になって、お前が邪魔になったんだろ！

お前が街で遊んでいたのも、そんな親の下に帰りたく無かったからだろう！お前が姿を消しても、お前の親は喜びこそすれ、誰も心配してお前の事なんか探さないんだ！」

恐怖と羞恥で涙をしゃくり上げる少女を見据えながら怒鳴った。

赤石が思い付き半分口にしていた事が、ほとんど正鵠を得ていたもので、悲しみが胸に込み上げ、見る見る麗夜の身体から力が失われていった。

「どうせお前なんか、この後生きていても、騙されて男に身体を売るか、自分から男に身体を売るしか、生きる道は無いんだ！」

と、なおも涙を浮かべる少女にたたみ掛けた。

少女の抵抗が無いことを良いことに、赤石は嬉しそうに広げ切った股間を検分していた。

元々体質的に薄いのか、未だ生え揃わないのか、少女の下草は大切な花園を隠すには余りに儂く、春草越しに二枚の白い花卉が透けて見え、程良く脂肪を置いた形良く盛り上がった二枚貝の貝殻のような肉の花卉の間にくっきりと亀裂がその姿を晒していた。

開いた少女の両脚の間に身体を差し入れて、脚を閉じる事を封じて、鼻歌を歌いながら、両手を使って外側の花肉を摘んでゆっくりと開き、中の様子を覗いた。

幾重にも畳まれた美しいピンク色の襷を搔き分け、最奥にまで達した時、赤石は思わずニンマリと笑みを浮かべた。

顔や衣装は随分遊んでる風ではあるが、この女まだ男を知らないのか？

最も深奥に隠された秘孔には未だ処女の証の半透明の薄い膜が懸かっていた。

「遅い、連絡はまだか？」

大亜門戸会本拠への奇襲成功の連絡が来ない事に、目高組の奈和組長は、苛立たしげに、独り言をもらした。

奈和は、先程から言い様の無い不安感に襲われていた。

暴力団の組織を束ねる親分として、奮い立つ子分達の目の前で不安そうな表情を見せる分けにも行かず、1階から自分の部屋の在る5階に上がって来て、独り言を言いながら、和服姿のまま廊下をうろうろ歩いていたのだった。

どちらが勝つか判らない状況なら、組員も緊張して油断すること無く奇襲をかけるだろう。しかし、今回の様に誰が見てもこちらの楽勝だと信じる時は、そこに油断が生まれ、逆に、敵に乗じられるスキが出来やすい物だ。

そのため、相手に付け入られるスキを作らないようあらゆる角度から今回の殴り込みの作戦を検討し、全てのリスクのある要素は潰した筈であった。

敵方のボスの動向は全て内通者を通じて筒抜けになっている。そこに相手の数倍の戦力で不意を衝いて襲い掛かるのだ。

万に一つも作戦が失敗する筈は無い。

しかし、敵方に殴り込みを掛けるための、ここまでの準備の間に、全てが旨く行き過ぎていく！—そこに何か腑に落ちない様な漠然とした不安を感じるのであった。

今回のような相手の不意を衝いた奇襲攻撃では、最初の数分で決着が着くものだ。

遅くとも10分以内には態勢が判明するはずだ。

それ以上時間を費やすということは、敵に気付かれ、作戦が失敗したことを意味する。

「やはり、自分が陣頭に立って行くべきではなかったか？」

ヤクザの抗争では、いくら周到な準備をしても、予期していない事態が起こることがある。

そして、そういう場合は、当初予定していた作戦を放棄してでも、その場その場の状況に応じた臨機応変の対応による指揮が出来なければならない。

そう言う事が出来るのは、何回も場数を踏んだ者の経験に基づく、動物的感のような瞬間的判断が非常に重要となる。

経験の無い息子では対処出来ないだろうと不安になった。

「いやいや、青沼が付いている・・・奴は若いが、しっかりした男だ。奴がドジを踏むことは無いだろう・・・」

奈和組長は、青沼の事を自分の若い頃にそっくりだと思っていた。

腕と度胸があり、常に冷静に対処出来て、決断力もある。

統率力も優れていて、子分の信頼も厚い。

青沼が杯を受けた時から、奈和はその本質を見抜きこれまで目を掛けてきていたのだった。奈和組長は跡目を息子に譲った後は、青沼と娘を娶わせ、分家させて目高組の外郭を守護する組織にしようと考えていた。

「幸い娘も青沼も互いに好きあっているようだし・・・」と、独り言を続けた。

娘の^{あけみ}曉美と青沼が付き合っていることは組内の公然の秘密となっており、当然奈和も娘の行動には早くから気が付いていた。

「親分、こちらに居たんですかい。」

階段を登って来た黄原が、組長を発見して、驚いたように声を掛けた。

黄原は内心、拙い事になったと思っていた。

計画では組長は1階に控えている筈であったので、1階から消えた組長を探して此処まで上がって来たのだった。

大亜門戸会の奇襲部隊は剛沢会長を含めて6名しかいない。そして奈和組長が立つ廊下の端にある非常口を破って、一度に入って来れるのは、1名ずつだけだ。

剛沢会長もこれまで他の暴力団との抗争を通して成長して来た組織のボスであり、喧嘩慣れた屈強な大男であった。

そして、今回の奇襲に当たっては、人数より質を重視して、大亜門戸会の中で最も格闘能力に優れた男達を選した筈で有るが、この格闘において無敵の強さを誇る奈和に侵入を気付かれたら、奇襲が失敗する恐れが強いと不安になった。

何とか口実を設けて組長を下に連れて行かなければならないと思案した。

そうしている間にも組長の背後に在る非常扉のサムターンが音も無く回り始めるのが、黄原の目に映った。

何か異様な気配を感じたのだろうか？奈和組長がゆっくりと扉の方を振り返ろうとした。

拙い！と思った黄原の手が咄嗟に動いた。

油断をしていた奈和組長の顎に黄原の拳がヒットした。

黄原は他の組員に比べてそれほど喧嘩は強く無いとは言え、まともに鉄拳を受けたのだ、普通の人間なら、そのまま倒れてもおかしくは無い。

しかし、奈和組長は黄原の拳を顎に受けたまま、瞬間、何が起きたか分からないというような表情をしていた。

そして、その内に、顔が見る見る赤くなり、怒りの表情を浮かべると、黄原に向けて台風の唸り声のような風切り音をさせて、物凄い拳を返して来た。まとも受けたら、自分なんか一発で吹っ飛んで意識不明となってしまうだろう。

かろうじて最初の反撃を避けた黄原に次の拳が襲って来た。

非常口を破り、最初に建物内に侵入したのは剛沢であった。

そして、廊下で黄原と奈和組長が素手で殴り合いしている光景に驚いた。

しかも若い黄原が奈和組長に一方的に圧倒されていた。

今、拳銃を使えば、奈和組長の玉を取ることは簡単だろう、しかし、このステゴロでは、一度も負けた事の無いと云う伝説を持つ男と一度素手で闘って見たいとの欲望に駆られた。

自分も若い頃から柔道と空手で鍛え、ステゴロでは無敵と自負していたのだった。

「黄原！俺に任せろ！」

横から剛沢が殴り合いに割り込んだ。

奈和組長は、殴り込みを掛けたはずの剛沢会長が、ここに居る事に驚いた表情を浮かべたが、今はそれどころの余裕は無かった。

さすがに喧嘩慣れした剛沢は黄原より数段上であったが、殴り合いながらも剛沢は、奈和組長の強さに舌を巻いた。

流石に、武闘派組織の荒くれどもを自らの力により従わせて来た男だけのことはあると感じた。

圧倒される剛沢に黄原が加勢して、二対一でやっとう角かと云う状態だった。

「お父さん！」「あなた！」

不意に背後で女の悲鳴が上がった。

剛沢と共に殴りこみを掛けた子分が娘と女房の部屋を奇襲して、女達を捕らえたのだった。

自分の妻と娘の悲鳴に一瞬奈和組長の意識が逸れた。

その隙を逃さず、剛沢の鉄拳が奈和組長の右こめかみを襲った。

「決まった！」

剛沢は思った。自分の渾身のパンチが相手のこめかみに炸裂したのだ！

普通の人間ならそのまま、意識を失って倒れてしまうだろう。

鍛えてない人間ならそのまま死んでも不思議では無い。

ところが、奈和組長は倒れる事無く、そのまま立っていた。

しかし、剛沢のパンチは、奈和組長に確実にダメージを与えたようだ。

左脚の動きが明らかに悪くなった。

剛沢のパンチで脳震盪を起こし、左脚が痺れたような状態となっているのだろう。

左脚を引きずる奈和組長の動きは確実に悪くなり、剛沢の拳を避けようとする、黄原のパンチを受け、黄原の拳を避けようとする、剛沢のパンチを受けた。

二対一で闘う相手に、有効な反撃が出来ないようになり、袋叩きにされる間に、よろよろと階段の踊り場まで追い詰められた。

ここで、剛沢と黄原のパンチが同時に、奈和組長の顎を捉えた。

奈和組長の巨体は、宙に舞い、そのまま下の階の踊り場に向かって転落した。

踊り場の床に、したたか体を打ち付け、身動きが出来ない奈和組長を見て、

「一番機！」

と、剛沢が階段から宙に身を翻し、下の踊り場に俯せに横たわる奈和組長の体の上に飛び降りた。

巨漢の剛沢の踵をまともに受けた、奈和組長の背骨が不気味な音を発てた。

「二番機！」

黄原が剛沢のまねをして、階段から飛び降りた。

黄原の踵が奈和組長の頸椎に炸裂した。

剛沢と黄原は、互いに目と目を交わして肯き合うと、踊り場の床にうずくまったまま動かなくなつた奈和組長の巨体を2人掛で、頭の上まで高く差し上げ、そのまま下の階の踊り場にめがけて、力一杯投げ付けた。

下の踊り場の床に思い切り打ち付けられ、組長の巨体が床の上で跳ねた。

そして、踊り場の床に叩き付けられたまま身動きしない、奈和組長の体めがけて、再び一番機！二番機！と攻撃を続けたのだつた。

剛沢達の全体重を載せた高所からの飛び蹴りは、無抵抗の奈和組長の骨を砕き確実なダメージを与えた。

二人の男は、更に大きなダメージを与えるため、今は意識の無い奈和組長を高々と差し上げると、思い切り階下の踊り場に叩き付け、更にドロップキックを見舞い続けるのであつた。こうして奈和組長は、無事に残っている体の部分を一つ一つ叩き潰されていきながら、下へと送られて行くのだつた・・・

「おい、何か上が騒がしく無いか？」

1階で待機していた幹部達が上の物音に気付いた。

「おい、ちょっと見て来い」と、部下に上を見てくるように命じた。

子分が階段から上を見上げた瞬間、何か巨大な物が上から物凄い勢いで降って来た。

かろうじて体を交わした時、目の前を何か赤黒い物体が通過するのを見た。

その赤黒い巨大な物は、ドスンと大きな音を発てて足下に落下した。

「ゲ！」その床に叩き付けられるように、落下した物を見て、驚いた声を上げた。

それは人間を捏ねて作った、巨大な饅頭のように見えた。

体はグニャグニャに曲がり、手足は有らぬ方向を向いていた。

全身は血塗れになり、最初それが誰か分からなかったが、血に染まってはいるが、着ている着物が、親分が着ていた着物だと分かったので、その変形した人間が親分の成れの果ての姿だと認識出来た。

肝を潰した子分が、皆を呼び寄せようとした時、階段の上から、黄原と剛沢が楽しそうに語りながら降りて来た。

大怪我をした親分と、抗争相手のボスと楽しそうに話あう目高組の幹部。

一体全体何が起きたか、今何が起きているのか理解できず、子分は階段口で呆然と立ち尽くしていた。

「お前の小便臭いオコは見せて貰ったが、上の方はどうなっている？」

赤石は上で起きている異常事態に未だ気付かず、少女をいたぶることに夢中になっていた。赤石は少女を後ろ手に縛り上げていた縄を解くと、派手な原色のブラウスのボタンに指を掛けた。

凶暴なヤクザ男の暴力の前に恐怖のどん底に叩き込まれた少女は涙を流しながらも最早抵抗は示さなかった。

ブラウスを乱暴に剥ぎ取ると後は柔らかな白い肌を覆う薄いピンクのブラジャーだけであった。

最後に残された下着を奪われまいと泣きながら両手で胸を隠す少女に構うことなく、太い腕で下着の紐に手を掛けるとベリベリと音を立てて力尽くで奪い取った。

ブラジャーをむしり取ると歳の割に意外と大きな胸が現れた。

「流石は、淫乱な母親の血を引く娘だぜ！」と、少女の手を払い除けて、重そうな乳房を握り締めながら赤石が有頂天の声を上げた。

「へへ・・柔らけえーや！まるでマシュマロみたいだぜ！」

男の力で絞り上げる様に揉み立てる激痛と恐怖に少女が泣き叫ぶのも構わず、赤石は年齢に似合わず撓わに実った果実の様な瑞々しい乳房を顔面いっぱい嬉色を浮かべて揉み上げた。

今や全裸に剥がれ、白い裸身を猿のように小さく丸める少女を赤石が残忍な目で眺め回した。

「これから男の味を教えてやるぜ！初めての男が俺のようなテクニシャンであった事を感謝するようになるぜ！」と、少女を睨みながら赤石は、鼻歌を歌いながら自分の着ていた服を脱ぎ始めた。

その頃には、目高組の留守番部隊の組員達もあらかた階段下に集まって来ており、自分たちの殴り込み部隊が奇襲攻撃を掛けた筈の、大亜門戸会のボスが黄原幹部と階段をゆっくりと降りて来る様を信じられない思いで啞然として見ていた。

この時誰かが拳銃で剛沢を撃てば、剛沢の命は取れたかも知れないが、心理的に混乱した状況下で、誰もそこまで気が回る余裕すら無かった。

黄原達に続いて、組長の女房と娘が後ろ手に縛り上げられ、まるで引き回される囚人の様に縄尻を剛沢の部下に持たれて降りて来た。

「姐さん！お嬢！」

目高組の面々が突然の有り得ない光景を目の当たりにして、悲痛な声を上げた。

階段下に集まった目高組の面々を前にして、黄原が声を張り上げた。

「見ての通りだ、親分はこのように血達磨になり、姐さんとお嬢は捕らえられた。そして、大亜門戸会襲撃に向かった連中は全員警察に逮捕された。

以前は目高組の方が三倍近い組員で勢力を誇っていたが、今や数の上でも完全に逆転したし、親分はこの有様だ！将棋で言えば金銀飛車角桂馬まで取られて、その上王将まで取られた様なものだ。最早目高組には、万に一つも勝ち目は無い！大人しく大亜門戸会の軍門に下れ！今直ぐ目高組の杯を返して、大亜門戸会の杯を受けるなら、いくらでも受け入れると剛沢会長も仰っておられるぞ！」

黄原は無駄な抵抗をして、命を失うよりは、目高組を裏切り、大亜門戸会に就くように演説した。

卑劣な欲望に猛り立った赤黒い毒々しい男のシンボルを目の前に突きつけられて、少女は思わず目を反らした。

「初めての夜だからな、一生の思い出に残るような素晴らしいセックスを味わわせてやるぜ。」

素っ裸に剥かれ恐怖に怯える少女を小気味よさそうに眺める赤石の手には小さな注射器が握られていた。

「こいつを注射^つれば、初めての痛みなんか全然感じず、良い気持ちになって死ぬほど感じるぜ・・・」

と、怯える少女をまるで死肉を求める禿鷹の様な目で見下ろしながら下卑た笑いを浮かべるのだった。

顔面蒼白となりガタガタ震えながら小さく蹲る少女を、脚で蹴り倒すと、ムッチリとした肉付きの良い白い尻が赤石の目の前に饗された。

無言のまま、柔らかな脂肪を置いた白い尻たぶにいきなり注射器の針を突き立てた。

一瞬、ウツと悲鳴を上げたが、やがて赤石の注入した麻薬がその効果を発揮し始めたのか、羞恥も恐怖心も消え去ったように、虚ろな目をして放心したようにボンヤリと赤石の方を眺めていた。

「嘘だ！そんなことは嘘だ！なるほど襲撃は、空振りに終わったかも知れないが、もう直ぐ全員帰って来て、お前たちを取り囲むぞ！」と、幹部の一人が震える声で怒鳴った。

組員にも動揺が走り、このまま大亜門戸会に寝返った方が、自分が無事か、目高組に忠誠を誓った方が無事か、考える者が出始めた。

「嘘じゃありませんぜ・・・、自分が全員逮捕される処を目撃しました・・・」

裏の夜間通用口を開けて、サブが事務所の中に入って来ながら言った。

さも落ち着いた態度で、不意に室内に現れた、カミソリと人から仇名され日頃から切れ者と目されているサブの姿に全員の視線が、サッと集まった。

「アイツら、畏に嵌ったんでさ・・・殴り込みを掛ける為、武器を満載した車で移動中に、待ち伏せしていた警官に止められ、銃刀法不法所持の現行犯ということで全員逮捕されやした。」

口の端を僅かに歪めて笑いを押し殺したように落ち着いた口調で、自分の方を睨み付ける様に視線を向ける男達に告げた。

「嘘だと思ふなら青沼の携帯に電話してみたらどうですか？」

突然の事態を受け入れる事が出来ず、オロオロと動揺する幹部連中を見透かすように、余裕泰然と口にした。

一人の幹部が咄嗟に机の上に置かれていた電話に飛びつき、青沼の携帯電話番号を回したが、幹部の焦燥感を掻き巻くように、電話は虚しく呼び出し音を上げるだけであった。

思いつくままに同行した他の男達の番号を回しても同じ状況であった。

電話を抱え込んだまま焦りと苛々した表情を見せる男に剛沢が声を掛けた。

「こちらから電話したら青沼の野郎、内通者からの電話だと信じて、自分が今どこを走っているかも知って呉れたぜ！その情報を待機していた警察に流してやったから、お陰で警察も余裕を持って逮捕出来た一っという算段だ！青沼の野郎も口程にも無い間抜け野郎だぜ！」と、可笑しそうに腹を抱えて笑った。

この一言で、組員の動揺は一層激しくなり、大亜門戸会に就いた方が、身の安全を守れるのではないかと決断する組員が出始めた。

しかし、これまでの義理を考えると自分からは言い出せず、仲間がどう動くかと、固唾を飲んで仲間内でチラチラと目を走らせあった。

その時、「俺は、大亜門戸会の杯を受けるぞ！」と、黄原の子分がサクラの役を演じて、前に進み出た。

その動きが進退を決め兼ねていた他の三下の組員に一機に伝播し、我も我もと大亜門戸会に
すがる為に進み出た。

剛沢は、この光景を見て満足げに肯いた。

後に残ったのは、十人にも満たない古参幹部だけになってしまった。

麻薬の効果で、筋肉は弛緩してぐったりとしているが、神経の敏感な所は逆に何十倍にも敏
感になっていた。

少女を抱き寄せ背後から撓わに実った胸を揉み上げると、その刺激が少女の脳にまで響くの
か、ウッウッと呻き声を上げて、その都度身体を敏感に震わせた。

「中々良い感度してるじゃないか？」

赤石のゴツゴツした手で歳の割に発達した乳房をこね回される間に、乳首が硬く屹立してく
るのが分かった。

「流石は淫乱な親から生まれた娘だけ・・・生まれ付きこんな事が好きな様だけ・・・」

少女の乳首を弄びながら、ニンマリと笑みを浮かべた。

「さて。下の方はどうかな？」と、卑猥な期待で頬を歪ませ、左手で乳房を揉み続けながら、
右手をしどけなく開いた股の間に降ろした。

こんもりと隆起した丘の直ぐ下から始まる陰裂を左右に押し広げると儂げな春草の直下に見
える陰核の付け根の盛り上がりに沿って指先を匍わせた。

少し硬い基部の上を往復する様に何度か指先でなぞった後、その先端の部分の包皮を指でそ
っと捲り上げた。

捲り上げた包皮の下から小さなルビーの様な粒が現れた。

その可憐なピンクの真珠の小粒をニンマリと笑みを浮かべて注視した後、何度か指先で露出
した繊細な神経を散りばめられた肉芽を撫で回した。

赤石のざらついた指先が敏感な表面を撫でる度に少女の身体がビクビクと痙攣した。

自分の膝の上に載せて背後から抱いていた姿勢に飽きたのか、赤石は少女の身体を裏返して、
背中を床の上に置いた仰向けの姿勢を取らせた。

少女の両足首を握って思い切り左右に押し広げると、少女の股間に顔を押し付け、その可愛
い女の弱点を舌で転がし、口に含んで吸い上げた。

麻薬の影響で神経が何十倍にも鋭敏となっている麗夜は、赤石の口唇による愛撫に腰をブル
ブルと震わせて呻き声を上げた。

今は閉じる意識も失って開け放たれたままの少女の秘めた部分を指先でなぞり上げると、敏感な箇所指先が触れる度に少女の身体がビクッ、ビクッと収縮した。

赤石の巧妙な指技を受ける間に少女の花園は赤く充血して、柔らかく膨らみ、秘孔からは甘い蜜が垂れ始めていた。

淫靡な笑みを唇に浮かべ、秘孔を覆う薄い膜を破らない様に注意しながら、膜の隙間を通して右手の中指をズルリと滑り込ませた。

ウッと声が上がり若い身体がビクッと震えた。

赤石が内部に挿入した指を動かす度に少女の身体がビクッビクッと反応した。

「こっちの感度も充分良いぜ！これは組の娼婦^{おんな}にして売り出せば客がごまんと付くぜ！」
赤石はそんな麗夜の反応を楽しみながら暖かく湿った若い処女の極上の内部を堪能した。

「準備OKで、所だな・・・」

赤石は少女を床の上に仰向けに横たえ、両脚を大きく広げた。

赤石の目の前に広がり切った、濡れた華園が広がっていた。

その白く柔らかな大腿や中央にコンモリと盛り上がった丘が熟れた桃を連想させた。

赤石は魅せられたように、甘露な蜜を流す華園に顔を寄せて、その秘臭を思う存分、鼻腔に流し込んだ。

「処女の此処は、良い匂いがするぜ！」

と、濡れそぼる花芯に犬の様に鼻を押し当て、その蒸れるような濃厚な香りを堪能した。

「お味の方はどうかな？」

と、顔を押し当たったまま舌を伸ばすと、その溢れ出た花蜜を吸り上げた。

「うめー！こいつは極上のマン汁だぜ！」と、感激した声を上げて、舌尖に絡む薄い膜の抵抗を楽しみながら、秘奥をざらつく舌尖で愛撫し続けた。

麻薬で神経を犯された少女も自分の秘められた箇所への刺激が、女体に秘められた性的快感を呼ぶのかウーウーと獣じみた呻き声を上げていた。

「もう我慢出来ネーッ！頂くぜ！」

と、叫ぶと身体を起こして、少女の両脚を思い切り押し広げ、股間に腰を入れると、いきり立つ分身の先端を花蜜に濡れた秘孔に宛がった。

硬化した男のモノの先端が入り口を覆った薄膜を押し上げ、メリメリと音を立てて引き裂こうとしていた。

「さすがに処女の入り口は狭いぜ！」

少女の秘孔に今その怒張の先端を突き入れようとした時、さすがの赤石にも階上から人々のざわめき立てる声と異様な雰囲気伝わって来た。

「くそ！良いところで一体何でえー？」

赤石は放心状態の少女を残して、慌ててズボンに脚を通した。

赤石は上半身裸のまま一階まで上がった時、異様な光景に目を奪われて、階段口に立ち竦んでしまった。

棒立ちになる赤石に大亜門戸会の男がすかさず背後から拳銃を頭に突き付けた。

「これは、これは、赤鬼の兄貴、お楽しみの所を悪かったな・・・」

半裸のまま呆然と立ち尽くす赤石の姿を見て、赤石が何処で何をしていたのか悟った黄原が、面白そう笑いながら声を掛けた。

「黄原！テメー！これはどういう事だ！」

「赤石の兄貴、口の横に縮れ毛が引っ付いているぜ！」

黄原がさも可笑しそうに笑い声を上げた。

黄原につられて失笑の聲が其処彼処に上がった。

慌てて頬を拭ったが、この場の空気から自分が地下に籠っていたわずかな時間に黄原達の反乱が成功し、状況は完全に黄原により支配されていることを思い知らされた。

黄原を睨み付けて歯嚙みをしたが、半裸の身に何も武器を持たず、後ろから拳銃を突き立てられた状況では、抵抗することも出来ず、赤石も他の古参幹部と並んで床に座らせられた。

若手組員は全員大亜門戸会に鞍替えしてしまっていた。後に10人ほどの古参幹部が残っただけとなった。

「お前たちはこれまで、親分から受けた恩義を仇で返そうと言うのか？恥を知れ！」

古くから目高組に仕えてきた幹部が、渡世の義理や、大亜門戸会に移っても良いことは無い一と、組を裏切ろうとしている三下組員に、必死に目高組に戻るよう呼び掛けた。

「どうやら、お前たちは徹底して大亜門戸会に楯突きたいらしいな・・・、そんなに死にたいのなら殺してやろう。」

剛沢が冷たく言い放った。

剛沢は、大亜門戸会に寝返った元目高組の子分に幹部たちを身動き出来ない様に縛り上げるように命じた。

大亜門戸会の男達から手渡された縄を手にして迫る元子分達に、古参幹部が厳しい視線を送った。

古参幹部から睨み付けられて、三下たちはビビってチラッと剛沢の方を振り返った。剛沢は早くしろ！と言わんばかりに顎をクイッと動かした。

ここで新しく鞍替えした剛沢に逆らっては自分達の命が危ないーと、意を決した三下達が、古参幹部に一斉に襲い掛かった。

これを受けて大人しく床に腰を落としていた古参幹部達も反撃に出た。

喧嘩慣れた古参幹部であり、三下組員の方にも以前は影も踏めなかったような幹部に縄を掛けることへの気後れがあり、最初は一方向的に古参幹部に殴られる状況であったが、剛沢や黄原から怒鳴られ、また殴られて痛みを感じる内に、長年自分たちを虐げて来た古参幹部への怒りが湧いて来て、殴り返し反撃出来るようになって来た。

広くもない事務所内には、怒声が飛び交い、目高組に所属しあっていた男同士が素手で殴り合う音が響いていた。

事此処に至ると、如何に喧嘩慣れた古参幹部と云えど、多勢に無勢なことと、此処までの異常な展開で大きなショックを受けており、精神的に既に敗北していたこともあり、大亜門戸会に鞍替えしたばかりの大勢の若い三下達から袋叩きにされ、全員取り押さえられ、厳しく縛り上げられてしまった。

両者とも激しい格闘により、ハアハアと激しい息を吐き、顔に痣を作り、血を流している者もいた。

縛り上げた幹部連中を事務所の中央にしゃがませ、その周囲を大亜門戸会に鞍替えした三下が取り囲んだ。

この様子を見ながら、剛沢が満足そうに肯いた。

「良くやった。これで今日からお前たちも晴れて大亜門戸会の一員だ。」

剛沢が三下達の働きを褒めた。

「今まで目高組の連中は、散々大亜門戸会に楯突きやがった。お前も今や大亜門戸会の一員なら目高組が憎いはずだな？」

剛沢が、一人の気の弱そうな年若いチンピラを見つけると、目を見据えながら言った。

そして、その三下に、縛られて身動き出来ない自分の兄貴筋に当たる幹部を痛めつけるように命じた。

剛沢に命じられた気の弱そうな若者が、幹部を取り囲む輪から一人離れ、縛り上げられた幹

部の方に向かった。

幹部から怒りの籠った目でギロツと睨み付けられ、三下は竦み上がった。

剛沢から早くしろと、急き立てられ、意を決したように足を高く上げると、ふらふらと力なく振り上げた足を上司だった幹部の頭に落とした。

「そんな力の無い蹴りがあるか！お前、本当に大亜門戸会に鞍替えする気があるのか？」と、剛沢に詰問され、もう後には引けなくなったと観念した若者は無我夢中に連続して蹴りを食らわせた。

最初は恐る恐るだった蹴りは、次第に強くなり、腰の据わった鋭い蹴りが幹部の腹や顔面に決まるようになって来た。

事務所の低い天井に爪先が肉の中に食い込む鈍い音が反射していた。

一方的に暴行される幹部は、最初は必死に痛みを堪えていたが、今は涙で顔中を濡らして堪え切れずに悲鳴を上げるようになっていた。

これまで心の底から恐れ、^{かしげ}傳いてきた男がこんなにも弱い男で在ったと気づくとメラメラと残忍なモノが込み上げて来た。

散々兄貴風を吹かせて威張り散らしていた幹部も日頃カツ上げの対象とする額の薄くなったデブ親父と何も違わないことが判ると、今や嗜虐的な欲望が理性をかなぐり捨てさせ、腹を蹴り込む脚の力も強くなっていた。

お前達もやれ！と剛沢が残りの三下にも暴行に加わるように命じた。

これまでの流れの中で、完全に目高組を見限り、これまで虐待されていた幹部連中に復讐心を抱くようになった三下達は、残忍なものを心の中で膨張させ、剛沢の命令を受けた事により血に酔った野犬の様に元の飼い主の許に駆け寄った。

身動きも出来ない様に嚴重に縛り上げられ、反撃も出来ない古参幹部たちは、圧倒的多数の若い三下たちから殴る蹴るの一方的リンチを受け始めた。

赤石が、とうとう溜まらず悲鳴を上げて、泣きながら剛沢に哀願した。

「助けてくれ！頼む！俺たちにも大亜門戸会の杯を受けさせてくれ！・・・お願いだから・・・これまでの事は許して下さい！・・・心を入れ替えて剛沢親分の下で三下でも何でもなります！・・・」

顔中を腫れ上がらせて、涙を流しながら必死の命乞いをする赤石達を一瞥した剛沢は冷たい声で、「もう遅いわ！殺れ！」と、命じた。

再び三下達による、激しいリンチが再開された。

剛沢から死の宣告を受け凄惨なリンチの晒される古参幹部たちの絶望的悲鳴が事務所内に響き上がった。

「止めて下さい！」

事務所内に女の凜とした声が響いた。

後ろ手に上半身を固く縛られたまま、黙って成り行きを見守っていた、組長の妻である晴江が堪らず声を上げた。

目高組の大姐の鋭い声に男達も思わず暴行の手を留めて、声の方を振り返った。

其処には縄目の辱めを受けながらも慄然と佇む大姐の姿が在った。

剛沢が晴江を見据えながら確認した。

「そうすると、大姐が、こいつらの不始末の責任を取って下さるということですかい？」

晴江はキッとした顔で大きく肯いた。

これまで奈和組長を支えて、この大きな暴力団の組織を統制して来た貫禄を垣間見せる晴江の毅然とした態度に気圧されたように剛沢は、

「それじゃ、ここでは何だから、我々の事務所にお出で頂いて、お話を伺いましょうか？」

と、全員に^{ひとま}一先ず撤収するよう命じた。

「面白い物が、落ちてましたぜ・・・」と、地下に偵察に行った大亜門戸会の組員が麻薬で、ぐったりとした全裸の少女を肩に担ぎ上げて戻って来た。

「こいつをどうしやすかい？」と、剛沢の方を覗った。

「このままここに残して行く訳にもいかんだろう。一緒に連れて行け。折角裸で準備が出来ているのだから道中退屈しのぎにお前達で可愛がって上げれば良いだろう。」と、剛沢が笑って言い放った。

剛沢の許可が出て大亜門戸会の男達が歓声を上げた。

こうして、目高組に残されていた高級車やマイクロバスに分乗して全員が暴力の修羅場と化した事務所から立ち去った。後には無人と化した事務所だけが残された。

その頃、警察の手を免れたテツと呼ばれる、すばしっこい一人の目高組組員が雑木林の中を必死に逃走していた。

銃刀法不法所持の現行犯で、全員逮捕され手錠を掛けられ、護送車に乗せられそうになった時、警備の一瞬の隙をついて、警官の手を振りほどいて背後の林の中に逃亡したのだった。仲間の組員も一斉に騒ぎを起こして警察官を引き止めて時間を稼ぎ、逃亡を助けてくれたこともあり、何とか逃げおおせることが出来た。

雑木林の中を必死に走りながら、今は兎に角、大亜門戸会の罠に嵌り、殴り込みが失敗したことを組に知らせなければならぬと考えた。

何とか公衆電話を探して連絡しなければ！と、必死になっていた。

テツは携帯電話を持っていなかったのだ。

携帯電話が爆発的普及を見せる僅か前の時代であり、特に地方都市では、市街地を外れると通話品質も悪くなるため、日頃携帯電話の必要性を認めず契約していなかった事を今日程悔やまれた事は無かった。

もともと携帯を持っていた幹部連中も武器と同時に携帯まで押収されていたから、例え自分が携帯を持っていたとしても同じ事だったろう。

雑木林を通り抜け、新興住宅街に入ることは出来た。

しかし、夜の住宅街には、行けども行けども公衆電話は見当たらなかった。

そして、ここにも既に警察の手が回っているようで、赤色灯を点滅させてパトカーがこちらの方に近づいて来た。慌てて民家の物陰に隠れてやり過ごした。

このままでは何時までも逃げおおせられる筈が無い。

まだ林の中に身を潜めていた方が、逮捕される危険は少ないが、それは組への連絡が絶望的に困難になることを意味していた。

今は真夜中で周囲も暗いから物陰に身を隠せば警官をやり過ごせるかも知れないが、夜が明ければ、再び逮捕されるのは、時間の問題だーと、覚悟した。

何処かの民家の窓を破って中に入り、電話を探そうか？

しかし、こんな手錠を嵌められた不自由な姿では、運が悪ければ、逆に家人に取り押さえられてしまうかも知れない。

その時、住宅街のメインストリートから大声で楽しげに喋る若者の声が聞こえて来た。

大方、この住宅街に住居を構える家族の大学生の息子が、遅くまで遊び歩いて一人で帰って来たのだろう。

仲の良い友達と話しているのか、携帯電話に向かい深夜にも拘わらず大声で喋っていた。

テツは、あれだ！と思った。

「その携帯を寄越しやがれ！」

突然暗闇の物陰から飛び出してきた男に若者は震え上がり、必死の思いで駆け出した。

「その携帯を寄越しやがれって、言ってんだよ！」

逃げてもなお執拗に追い掛けて来る異様な男に、若者は悲鳴を上げると携帯電話を投げ捨てて走り去った。

テツは若者が捨てた携帯電話を手にとると、もどかしそうに、組事務所の番号を入力した。

「糞！早く出やがれ！早く出やがれって、言ってんだよ！」

焦りが込み上げて来るなか、電話を耳に押し当てるが、無人の目高組事務所に継った電話は、ただ虚しく呼び出し音を立てるだけであった。

「居たぞ！あれだ！」

さっきの若者が警邏中の警官に救援を求めたのか、数名の警官が、テツの姿を捉えて、駆け寄って来た。

「しまった！」と、テツは携帯を握り締めたまま観念した。

目高組の敗北

剛沢と黄原や大姐の晴江とお嬢の暁美を乗せたベンツと今は大亜門戸会に寝返った目高組の三下と彼らからランチにあった古参幹部を乗せたマイクロバスの車列が、大亜門戸会の事務所に向かっていた。

「少しは手品でも使わないとな・お前達のような大きな組織に俺たちのような弱小组織がまともに戦を挑むなんて馬鹿のやることだぜ！」

剛沢が晴江と暁美の顔を交互に見交わし、笑い声を上げながら、どの様にして目高組を罠に誘い込み一網打尽にしたかと言う、これまで張り巡らした陰謀の顛末を得意気に喋った。

「ヤクザの出入りに警察の手を借りるとは、ヤクザの風上みにも置けない奴だよ！」

目高組組長の妻として、晴江が剛沢を睨み付けて憎々しそうに言った。

「馬鹿は、お前たちだぜ！警察の上の方はな、良い大学を出て、試験に受かり、地方の警察署を回ってキャリアを積みながら、東京に戻って上がりなんだ。その途中でヤクザの出入りなんかあってみろ、キャリアに傷が付いてしまうじゃないか。ところが自分が在任中に大き

な暴力団の摘発に成功して見ろ。キャリアに箔が付こうってもんじゃないか。・・・この差は雲泥の違いだ。」

剛沢が面白そうに返答した。

「そうするとお前たちは警察の上の方に話を付けたと言うのかい？」

なおも晴江が詰め寄った。

「お前たちは、本当に馬鹿だな？アイツらは、ただ良い大学を出ただけの世間知らずのただのボンボンだ。・・・だがな、上が出世して良い目をみれば、下にもオコボレが行こうってもんだ。・・・そのためなら、喜んで泥水でも啜る奴なんて、どこの世界にも居るもんさ。この話を持って行ったらアイツら喜んで乗って来たぜ。・・・まあ、持ちつ持たれつで、やつだぜ」
剛沢が、さも面白そうに笑い声を上げた。

目高組の事務所は S 市の繁華街に在るが、その縄張りを狙う、大亜門戸会は、いきなり S 市の中心部に本部を構えることも出来ず、郊外に広大な土地を取得して、そこに組事務所と組員が起居する宿舎を造っていた。

目高組の襲撃に備えるためか、まるで軍事基地の要塞の様に敷地の周囲はコンクリート製の高い塀で囲い、中の様子は表から伺うことは出来ないようになっていた。

暗い夜空を背景に、ヘッドライトに照らし出された、その黒々と高くそびえるコンクリートの塀がシルエットとなり近づいて来る光景に、組長の妻の晴江やその娘の暁美は、これから自分たちが収監される刑務所が近づいて来たような怯えを感じていた。

大亜門戸会の本部に到着して、連れ込まれたのは敷地内に何棟かある建物の内の組事務所として使われているコンクリート作りの建物の地下室であった。

3階建ての大きな建物の下にそのまま地下室が作られており、普段倉庫として利用しているのか、コンクリートを打っ放しにしただけのだだっ広い地下室の彼方此方には段ボール箱や木箱が堆く積み上げられていた。

さすがに自分の事務所に戻った安心感か、剛沢の指示で組長の妻と娘の縛めは解かれていた。しかし、古参幹部は相変わらず厳しく縛められたままで、コンクリートの床に車座に座らせられ、その周囲を元目高組の三下や大亜門戸会の子分が輪になって取り囲んでいた。

重症を負った奈和親分は、担架に乗せられたまま、床に放置され、意識不明状態で身動きもしなかった。

大亜門戸会の事務所に連れ込まれた目高組幹部の面々を目高組から寝返った若い組員が取り囲み、その周囲を更に大亜門戸会の男達を取り囲んだ。

口では目高組の杯を返して、大亜門戸会に就くとは言っているが、まだ本当に信用している訳ではなく、再び裏切らないよう、周囲から大亜門戸会の荒くれ達が取り囲んで威圧している様子であった。

今や大亜門戸会の留守番部隊の男達も加わり、多くの人々が地下室に集まり、捉えられた目高組の幹部と晴江達を取り巻いていた。

その中には剛沢の愛人であろうか、若い二人の女と一人のそれより年長の女が混じり、興味深そうに成り行きを眺めていた。

晴江は、取り囲む男達の中に大亜門戸会を裏切って目高組側に回ると約束していた大亜門戸会の幹部の男の顔を発見し、ニヤニヤと面白そうにこちらを眺める様子から、裏切ると言うのは最初から芝居であり、自分達が完全に剛沢の罠に嵌められていたことを思い知らされ、悔しさに唇を噛みしめるのであった。

縄を解かれたが、まだ痺れの残る右腕を着物の袖の上から摩りながら、

「それで、何をすれば許して貰えるんですか？」

と、晴江が鋭い目で剛沢を睨みながら尋ねた。

昔ながらのヤクザの組を束ねる大姐として、洋服を着ることは殆ど無く、普段から和服を着慣れているという晴江の艶やかな着物姿に見惚れるように繁々と見詰めていた剛沢は、晴江から突然詰問されて、ニヤッと口の端に笑みを浮かべると、

「先ず、目高組を解散して貰おうか。解散届けを書いて、警察に提出するんだ。」と、静かに命じた。

子分達に指示して倉庫の片隅に在った、小さな立ち机が持ち出され、和紙と硯と筆が用意された。

「先ず、・・・『本日を持って、指定暴力団目高組を解散します。』と書くんだ。・・・ホウー、中々達筆じゃないか・・・」

晴江は筆を手にとると、硯の墨を穂先に含ませ、和紙の上に剛沢に指示される通りに筆を走らせ始めた。

一見喪服を思わせる、濃い群青の着物を身に纏い、紙に触れないよう右手の裾を左手で僅か

に捲り上げ、細っそりとした白い手に筆を持ち、サラサラと筆を進める晴江の毅然とした出で立ちを剛沢は美しいと見惚れた。

濃い色の着物を優雅に着こなした姿から醸し出される風情は、物語に登場するような典型的な日本美人を象徴する女だと思った。

若くして現在の組長と結ばれ、当時まだ小さな組であった目高組を若い組長と一緒に、現在の組織まで育て上げた、裏稼業の世界では伝説の女傑であり、年はまだ40代初めの頃の筈であったが、その衰えぬ美貌はどう見ても30代前半にしか見えなかった。

長い黒髪をアップに結び上げ、着物の襟から覗く細くて白いうなじが、剛沢の目を引き付けた。

息子と娘の二人の子を産んだが、体の崩れは無く、いまだに凜とした美しさを保っていた。大きな暴力団の女親分として、有り余る財力を美容に注ぎ込んだ結果であることは明らかであるが、きめ細かい白い艶やかな肌には、僅かな小皺や弛みも見られなかった。

有名な女優の中には50代、60代になっても変わらぬ美貌を維持している女が居るが、常に周囲から注目される緊張感が女に何時までも張りを持たせ、変わらぬ美貌を維持する要因と言われるが、この女も常時周囲を血の気の多い博徒に取り囲まれ、常に猛獣の様な男達の視線に晒されながらも、少しの隙も見せること無く、毅然とした態度で荒くれ達を顎で使ってきた緊張感が、この一種壮絶なまでの研ぎ澄まされた美貌の原因であろうと思った。

流石に娘の暁美の様な、若さゆえの華やいだ美しさでは無いが、長い時間を掛けて積み上げて来た女の年輪の様な貫禄を秘めた、まるで氷で作った刀剣の様に冷たく鋭利な感じを周囲に振りまく美女だと思った。

『・・解散した後は、全員正業に就き、世間の皆様に決してご迷惑を掛ける事無く・・』
剛沢に指示されるままに、書き綴った。

自分が若くして奈和組長と結ばれた頃は、目高組はまだ地方の弱小のヤクザの組に過ぎなかった。夫と手を携え目高組を有数の暴力団に育て上げて来た記憶が書き綴りながら次々と浮かび上がって来た。

その夫と共に苦勞して築き上げて来た目高組が、この瞬間に音も立てず、はらはらと崩れ落ちていくのかと思うと思わず目頭が熱くなった。

奈和と共に手塩に掛けて育てて来た目高組は自分にとっても我が子と同様の感慨を持っていた。

その自分の子供と同じ、古くから苦勞を共にして組を育てて来た古参幹部をむざむざと見殺しにする訳には行かないと、自分を励まし、筆を進める晴江であった。

夫と二人して苦勞して育て上げて来た目高組が、今自分の筆を走らせる紙の上でもろくも崩壊して行くのかと思うと、万感の思いが込み上がって来たが、気丈にもその感慨を押さえ込み剛沢から命じられるまま書き綴った。

剛沢の口述通りに書き終えると、組事務所から持ち出した組印と実印を押させて、剛沢は、ひったくる様に解散届けを取り上げた。

「これを朝になったら警察署に届けるんだ。」と、傍にいた組員に解散届けを手渡した。

「次に、全財産を大亜門戸会に譲渡するための譲渡書に署名して貰おうか。」

剛沢の言葉にハッとしたようにその凜とした細面の顔を向け、込み上げる憤怒に鋭い目で睨む様に見詰める晴江に対して、

「解散した目高組には、最早、組の財産は不要だろう・・・」

剛沢が冷たい表情で立ち尽くす晴江を見つめながらニヤニヤとして言った。

「大亜門戸会の発展のためにはどうしても S 市の繁華街にある目高組の事務所が必要なんだ。・・・どうせ悪どい土地転がしや、法外な金利の闇金で元手も掛けずに儲けて建てた泡銭のような建物だ。別に俺たちに渡しても惜しく無いだろう。どうせ、お前たちなら、また悪どい事をして幾らでも儲けるだろう？・・・ついでに、目高組で抱えていた賭場と売春施設も居抜きで貰っておくぜ。解散した暴力団にはもう不要な物だからな！」

と、厳つい肩をヒクヒクと動かして勝ち誇ったように笑いながら言った。

拒絶すれば、何時でも幹部のリンチを再開するとの仕草を見せて、剛沢が強引に財産の譲渡を迫った。

「姐さん、止めて下さい。俺たちの事なんか、構わないで下さい。」

この状況に赤石が涙を流しながら弱々しい声を出した。

「テメーは、黙ってろ！」

元幹部と云う威厳に対する呪縛が完全に解かれ、今や身も心もすっかり大亜門戸会に鞍替えした元目高組の三下が、一声叫ぶと、上半身裸で剥き出しのままの腹を思い切り蹴り上げた。靴の爪先が無防備な腹に突き刺さり、胃袋を直撃した。

耐え難い苦痛に呻き声を上げると、ゲエゲエと胃の内容物を吐き出し始めた。

赤石を蹴り上げた三下は、

「ヘッ！汚ね一野郎だぜ！」と、これまで赤石達に虐げられて来た恨みを込めて言葉を投げると、ペッと唾を赤石の顔に向けて飛ばした。

「止めて下さい！譲渡書に署名します！」

幹部達に遺恨を持つ元の子分達から惨たらしいリンチを受ける古参の組員の姿に、晴江が必死な声を上げた。

「テメー達、姐さんに感謝しろよ・・・テメー達の命乞いのため、組を解散して、その上、全財産も放棄して下さろうと言うんだ・・・」

剛沢が嬉しそうに、署名捺印の終わった譲渡書を受け取った。

「ここまで、やって貰ったんだから、・・・後は余り酷いことは出来ないな・・・最後に、素っ裸になって、三つ指付いて土下座したら、こいつらをキッパリと許してやろう・・・」

突然の卑劣な要求を耳にして、「エッ！」と、声を上げると晴江の顔からサッと血の気が引くのが見えた。

そして、次に顔が見る見る紅潮していくのが判った。

「話に聞くところでは、晴江姐さんは総身彫りの見事な彫物をしているとの事じゃないか、ちょっと俺たちにも拝まして貰おうか。」

と、嫌らしい目をして晴江を駈るように見つめた。

「見下げた男達だよ！お前達は、手も脚も出ない女を素っ裸にして、恥をかかせて笑いものにしようってのかい？！」

剛沢の卑劣な要求に、晴江は怒りを含んだ目で、剛沢を睨み付けた。

「そうさ、大姐が俺たちの前で、ほんの少しの間だけ生き恥晒して、詫びを入れると言うなら、こいつらの罪を許してやろうと言うんだ。」

晴江に睨み付けられながら、薄笑いを浮かべて平然と嘯いた。

「姐さん・・・止めて下せ・・・もう俺たちの事は構わないで下せ・・・」

剛沢の前で進退窮まった様に立ち尽くす大姐に古参幹部が涙に声を詰まらせながら声を掛けたが、ウルセー！と元の子分達から平手打ちを喰うのだった。

「・・・そうか、いくら組の為に尽くした古参のためとは云え、素っ裸での土下座は嫌だと云うのか？・・・仕方ないな、自分たちの仕出かした不始末の落とし前は自分たちで付けて貰おうか？」

剛沢が匕首を手に赤石に迫った。

「ここに居る、元目高組の組員の皆はな一、テメー等らのような下らない幹部に、これまでこき使われて来て、すっかり頭に来ているんだぜ・・・詫びの印に一人当たり一本ずつ指を摘めたとして、両手、両足の指を全て摘めても足りないな・・・仕方無いから、両の耳と鼻も摘めて貰おうか？」

冷たい匕首の刃で鼻を軽く叩きながら、剛沢が赤石を見つめた。

「テメーは出入りの時に受けた頬の傷を自慢していたじゃないか？両方の耳とおまけに鼻も失ったらもっと箔が付くってもんだろう？」

と、冷たく笑って、そのまま鼻の真下に刃を押し当てると、今にも鼻をえぐり取ろうとした。その剛沢の狂気を帯びた冷酷な目を間近に見て、赤石は剛沢が脅しで言っているのでは無く本気だと信じた。

ヒエエーと、空気の抜けるような間の抜けた悲鳴を上げると、唯一赤石の身体を覆っているズボンの股間が黒く湿り始め、そのまま夥しい量の小便が床に広がり出した。

「みんな！よく見ろよ！この野郎ビビって小便を漏らしやがったぜ！」

と、高笑いし、赤石の後頭部に足を掛けると、自分の吐瀉物と尿が混じった床上の汚物に赤石の顔を押し付け、ぐりぐりと踵で赤石の後頭部を捏ね上げた。

ついさつきまで、颯爽と肩で風を切って歩いていた赤石達幹部の余りに惨めな姿を見かねて、「止めて下さい！脱ぎます、脱いで土下座します。」

と、悲痛な声を上げて、剛沢に止めくれるように哀願した。

憎みても余りある大亜門戸会の男達の見詰める前で、肌身を晒す恥辱に気が狂いそうな程の屈辱感が込み上げて来たが、自分がここで生き恥を晒せば、これまで目高組に忠誠を尽くして来てくれた幹部達の命を救う事が出来ると考えると、断崖から身を投げ出す思いで、帯留めに手を掛けるのであった。

「そうかい？・・・折角、姐さんが裸になって、総身彫りの見事な刺青をご披露して下さると言うのだ・・・」

剛沢が少し考えるような素振りをする、ニヤッと口元に笑みを浮かべて、

「ビデオに残して置かない手は無いな・・・、おい、撮影の用意をするんだ！」と、子分に命じた。

全裸で剛沢の前に土下座をするという惨めな姿をビデオに記録しようと言う剛沢の陰險な企みを知って、思わず憤怒の表情を浮かべて剛沢の方をキッと睨み付けたが、冷酷な笑みを

浮かべて晴江の方を見返す剛沢に対して、今の晴江にはどうすることも出来ないと思い知らされるだけであった。

命令を受けた子分達は手早く、2台のビデオカメラと数機の照明スタンドなど撮影器材を持ちこみ準備を始めた。

晴江の立ち姿を照明が煌々と照らし出し、カメラが回り出した。

早く脱ぐんだーとばかりに、ネットリとした陰湿な笑みを口の端に浮かべて、剛沢が顎をしゃくった。

自分の惨めな姿をビデオに残し、恐らく闇ルートで売り捌くつもりだろうと、晴江は思った。剛沢の陰険な考えに腹が立ったが、今の自分にはどうすることも出来ないとの思いが、心を鬱いだ。

これで、この裏稼業の世界に自分の惨めなビデオが出回ってしまえば、自分は二度と同業の人々と顔を合わすことも出来なくなるだろうーとの思いで心が押し潰されそうになりながらも、これまで目高組のために尽くしてくれた幹部達の命を救うには自分が一時恥を忍ぶしか方法はないーと、観念したように、ゆっくり目を閉じると、静かに帯止めを解き始めた。シュウシュウ衣擦れの音をさせて帯を解き終わると、濃い群青の着物をスルッと肩から足元に落とし、藤色の長襦袢姿となった。

立ったまま、足をもたげて、小鉤を外し、足袋を脱いだ。

長襦袢の裾からチラリと見えた、透き通るように白く、きめ細やかな肌をした^{ふくらはぎ}脛に男達の目に欲情の光が宿った。

次々を着ているものを失っていく晴江を見つめて、次への期待を込めて目を皿の様にして見詰める男達が、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

長襦袢を脱ぐと、その下は白い肌襦袢と薄い朱鷺色の腰巻姿となった。

肌襦袢の袖口から、腕に彫られた噂の彫物が見え隠れしていた。

肌襦袢を通して、全体的に骨っぽい細身の体のシルエットが浮かび上がった。

「姐さん！もう止めて下さい！もう俺たちの事は構わないで下さい！」

余りの惨めさに、一人の古参幹部が涙を流しながら叫んだ。

「うるさい！テメー達の下らない不始末の詫びを入れる為に、わざわざ大姐が一肌脱いで下さってんだ！ テメー達も目を見開いて綺麗な裸を拝ませて貰ったらどうだ！」と、三下に怒鳴りつけられた。

もちろん自分達の助命のため敵方の男達の目に裸身を晒す大姐の気持ちを思うと、まともに

見る気持ちにもなれず、固く目を閉じた。

しかし、いくら目を塞いでも、きつく縛り上げられた古参幹部の耳には、その場の雰囲気不容赦無く流れ込んで来て、ズキズキと心を抉った。

「さて、変な邪魔が入って、氣勢が殺がれたが、早く素っ裸になるんだ！」

剛沢から急き立てられ、諦めたように肌襦袢をスルリと脱ぎ落とした。

そこに現れた、晴江の肌身を覆う見事な彫物に、居合わせた人間がオオッと歓声を上げた。

「ほうー、騎龍観音の胸割れか・・・見事なものだ」

剛沢が裸身を晒した晴江の周囲を一回りして、背中一面に大きく彫り上げられた極彩色の龍の頭の上に立つ薄い衣を纏った女体を思わせる観音菩薩の彫物をしげしげと見つめながら、ため息を吐いた。

晴江の体は、細く全体的に骨ばっており、乳房はそれ程大きいわけでは無いが、固そうなお椀型の形の良い乳房をしていた。

そして、その乳房にも一面に極彩色の彫物が美しく彫り上げられていた。

背中から回った刺青は、二の腕まで続き、胸や脇腹にも一面に美しく彫り込まれていたが、首から腹にかけて、胸の間から腹に続く身体を中心線に彫物は無く、白くまだ張りのある艶やかな地肌を露出していた。

両乳房の三分の二ほどに彫り物が施され、そのままそれに続くように両脇腹にも彫り物が施され、その間の白い肌が極彩色の刺青との対比により、際だって白く感じられた。

カメラを肩にした組員が、その妖しい美しさを秘めた肌を舐めるように写し取って行く。

「さて、最後の物も取っていただくか。」

一瞬露わになった乳房を両手を前に交差させて固く覆い隠し、淡いピンク色をした腰巻一枚でようやく女の最奥の羞恥を封じているだけの裸身を男達の目に晒し、それ以上は自分で脱ぐことが出来なくなったのか、小さく前かがみになって、立ち尽くす晴江に剛沢が冷たく命じた。

「お願いします！ここまで恥を晒せばもう十分じゃ無いですか？最後の物は勘弁して下さい！」

気丈な晴江もギラギラとした隠微な視線を注ぐ男達の前で自分が最も女で在る部分を晒す事に堪えかねて剛沢の方を向くと哀願する様な声を上げた。

「聞いて無かったのかい？俺は素っ裸で土下座しろと言ったんだぜ・・・」

剛沢の突き放した言い方に、敵方の首領に哀願しても無駄で在る事を改めて思い知らされた

晴江は全てを諦めたように、両乳房を覆っていた手を離して、指先を腰巻きの紐に掛けた。一度は身を投げる思いで紐を掴んだものの込み上げる恥ずかしさに、直ぐに紐を解く事も出来ず、男達の取り囲む輪の中で立ち尽くすのであった。

「へへ・・・どうした？脱ぎ方を知らないなら俺たちが手伝ってやろうか？」

卑猥な目で見詰める男達が、涎を垂らしそうな口で晴江に声を掛けた。

「これ位自分で脱げるさ！」

今にも男達が、その嫌らしい手を伸ばして来て、腰巻に手を触れそうな気配を感じて、男達の手体に触れ回されるくらいなら自分で脱いだ方がましだとでも言うように、悲痛な声音で叫ぶように言った。

そうは言っても、子分達の命を助けなければならない使命感と憎い敵方の男達の前に裸身を晒す羞恥と屈辱の間で葛藤していたが、早くしろ！と、脅すような剛沢の視線を受けて、怖ず怖ずと巻の紐を指先でしっかりと掴んだ。

そして、野卑な目で見詰める男達への憤怒のためか、それとも羞恥のためか、震える指先で紐を解いていった。

解き放たれた紐が晴江の指先を離れ、裸身を最後まで守っていた艶めかしい布は、支えを失い、揃えた太股に沿ってゆっくりと足元に落下した。

この瞬間、見詰めるヤクザの間からワッと歓声が上がり、その場の空気が震えた。

「今時腰巻きの下に何も着けてない女が居るんだな！」

今や剥き出しとなった晴江の下腹に熱い視線を送りながら剛沢が感心したように声を上げた。

腰巻の下に隠されていた上半身から続く彫物が隠す物も無く全体を露出した。

彫物は尻全体を覆い、太腿まで続いて終わっていた。

首から臍を通り鼠蹊部に至る部分に彫物は無く、滑やかな光沢のある白い地肌を露出していた。

40歳を幾つか超えた現在においても、実際の年齢より10歳以上は若く見える美貌を保っているが、その体つきの方も歳相応の肌の衰えもなく、弛みも無く、しっとりとした光沢を持つ肌は、やはり実年齢より10歳以上若い女盛りの美しさを保っていた。

刺青の施されていない部分は、染み一つ無い白い肌をしており、その極彩色の刺青と白い肌の織りなす見事なコントラストに男達は目を瞠った。

さすがに野卑な男たちの目に秘奥を晒す羞恥心から、前屈み体をくの字に折り、両手で股間と胸を隠したが、腰巻が滑り落ちる瞬間、刺青の施されていない白い地肌を晒す股間の中心に、こんもりと生える黒々とした艶のある恥毛が、照明に照らし出されてクッキリと浮かび上がり、きめ細かい白い肌の上に、生々しく艶めかしく輝くのが、血走った目で注視する男たちの目に焼き付いた。

長らく自分達と敵対していた敵方の大姐御が自分達の目に前に一糸纏わぬ姿を晒していることに半ば信じられない思いで、声も上げることが出来ず、瞬きも忘れて凝視する男達の生唾を呑み込む音と敗北感に打ちのめされた古参幹部の嗚咽する声だけが、シンと静まった地下室に流れた。

全身に見事な彫り物を入れているとは云え、普段は着物の中に隠されており、裏の世界で噂されるだけで、夫以外の人目に晒したことのない鮮やかな彩色を帯びた秘画が男達のギラ付く目の前に在った。

全ての衣類を脱ぎ捨て、全裸となった晴江は両手で剥き出しとなった胸と股間を隠しながら、剛沢の前に進み出て、床に膝を付き、土下座の姿勢に入ろうとした。

「ちょっと待て！素っ裸で土下座をするのは、母親だけとの法は無い。親子は同罪だ！お嬢にも脱いで貰おうか！」

剛沢が娘の暁美の方を身ながら命じた。

敵方の前で全裸を晒すと云う羞恥に、暁美は激しく頭を振った。

「お願いします！この娘だけは許して上げて下さい！」

ヤクザの女房といえども自分の娘に対しては、世間の母親と変わる事は無く、娘を野卑な男達に前に全裸で晒し者にして、恥ずかしい姿をビデオに撮るつもりだと知って青くなった。おろおろしながら、晴江が必死に剛沢に哀願した。

「ならねっ！親子は同罪だと言ったろう！娘も素っ裸になって土下座するんだ！」

嫌らしい目付きで周囲を取り囲む男達に無理やり剥ぎ取られるのを恐れたかの様に、真っ青になって必死に両手で衣服を固く押さえて身を曲げてイヤイヤをする暁美の様子に、業を煮やして剛沢は赤石に詰め寄って、周囲に響くように大声で叫んだ。

「大姐御は、お前たちのために、一肌脱いでくれたが、お嬢は嫌だっつよ！」

そして、「まあ、薄情なお嬢を持ったと思って諦めるんだな・・・」と、低い声で言うと、匕首の刃を赤石の耳の付け根に押し当ててスッと手前に引いた。

鮮血が耳の付け根から噴出し、赤石がギャーとまるで断末魔のような大きな悲鳴を上げた。

「止めて下さい！脱ぎます！脱ぎます！」

赤石の悲鳴に、とうとう娘も耐え切れなくなって、涙を流しながら服従の意を示した。

震える指でピンクのワンピースのボタンを外しながら、涙を吸り上げた。

今年で二十歳を迎えたはずだが、生まれた時から組の三下どもにかしずかれ、男を男とも思わず傍若無人に過ごして来た娘が、小馬鹿にして来た三下たちの前でべそをかきながら、裸になるとは皮肉なものだと黄原は思った。

全体に細身の母親と違い、娘は父親の遺伝か大柄で肉付が良く、全身に程良く脂肪を載せ女らしい柔らかな体のラインをつくっていた。

鼻や顎の形など、何箇所か整形したという顔は、白人モデルのように鼻筋が通っていた。

彫りの深いエキゾチックな顔は、明るい栗色に染め上げたカールの掛かったロングヘアと共に日本人離れした美しい顔立ちをしていた。

ワンピースを脱ぎ去ると、フリルのいっぱい付いた黄色いブラジャーと、揃いのショーツが適度に脂肪を載せた柔らかな胸と股間を覆っているだけであった。

ブラジャーで支えられた豊かな胸は深い谷間を作っていた。Fカップ以上ありそうだった。

エステに通って整えた体に崩れは無く、腰はすっきりとくびれ尻回りは豊かに張っていた。

足はすらりと長く、全身バランスの取れた若い女らしいプロポーションを持ち、このままモデルになってもトップモデルとして勤まりそうだった。

青沼と恋仲なのを知っていたが、青沼がこの魅惑に満ちた若い体を好きなように抱いていたのかと思うと少し嫉妬を感じた。

遊びで入れたのか、柔らかな肉を置いた、しみ一つ無い白い内股に赤い一輪の薔薇の刺青を入れていた。

野卑なヤクザ達の前で、下着姿を晒しながら、それ以上自分で脱ぐことが出来ず立ち往生している様子に、男たちが早く脱げとかオッパイを見せろとか囁し立てた。

晝美の透き通るような白い肌をしたまるでファッションモデルの様なスタイルの良い肢体と進退際まった悲壮な表情がカメラに収められていった。

今にも泣き出しそうな顔で俯きながら、震える手を背中に回してブラジャーのホックを外すと、きつく覆っていたブラジャーを跳ね飛ばすように豊かな乳房が現れた。

その瞬間取り囲む男達からドッと歓声が上がった。

咄嗟に両手を胸の前で交差させて露出した乳房を男達の猥じみた視線から隠したが、瞬間垣間見えた豊満な乳房が瞬きも忘れて凝視する男達の目に焼き付いた。

「前々からお嬢のオッパイは大きいと思っていたが、実物を見ると想像していた以上じゃ無いか！」

「こいつは、文字通り巨乳じゃないか！」

「巨乳を通り越して爆乳だぜ！」

「一体何を喰えばこんなに大きく育つんだ！」

「毎晩青沼の野郎に揉み上げられて大きく成ったんじゃないか？」

男達の卑猥な野次に顔を赤く染めて、身体をブルブルと震わせ、両手で乳房を覆い隠したまま立ち往生する暁美であった。

そんな羞恥に全身を紅潮させる若い女に、男達は幹部の命を助けたければ早く下の物も脱げと迫った。

涙に咽びながら、両手をショーツの縁に掛けたので、それまで覆い隠されていた乳房が血走った目で見詰める男達の目の前に再び露わとなった。

「それに、どうでえ！この綺麗な形はよー！」

柔らかな弾力ある豊かな乳房と可愛らしいピンク色の乳首に焼ける様な男達の見線が集まり、驚喜した様に口々に歓声を上げた。

男達はストリップ劇場のバックミュージックのような口まねをして立ち往生する暁美を盛んに囁し立てた。

早くパンティを脱げと急き立てられ、涙を吸り上げながら、諦めたように立ったままフリルの付いたショーツをズリ下げた。

最近ハワイに旅行して焼いてきた健康的に日焼けした淡い小麦色の肌には、ビキニの跡がしっかりと残っており、その小さな水着の形作る抜ける様な乳白色の地肌が男達目の一層扇情的に映った。

まるでミルクを鍊った様な白い地肌を晒す水着の跡から、「お前は、そんなストリッパーが履くような際どいビキニのパンツなんか履きやがって、ブラからはみ出す様なデカイパイオツをチラチラさせて外人の男達を誘惑して得意になっていたんだろう！組に居た時も子分達に見せ付けていたんじゃないか？勿体ぶらず俺達にも良く見せてくれよ！」と男達が裸身を晒してしまった暁美を指差して囁し立てた。

無駄毛を処理しているのか、白い股の間に生える適度の毛量を持った形の良い陰毛が男たちの目を集めた。

その様はまるで谷間に漂う霧の様に儂く股間を被い、その微かな春草を通してその奥の様子が垣間見れそうで、思わず男達が目を凝らした。

男達の嫌らしい視線を少しでも遮ろうと、股間を堅く絞め、苦勞して片足ずつ上げてショーツを脱ぎ去ると、とうとう身に纏う物は一切失った。

そして、全身を羞恥で赤く染めて、両手で股間と胸を少しでも男達の野卑な視線から隠そうと努めながら、覚束ない足取りで、既に全裸を晒している母親の隣に歩み寄ると、母親に寄り添う様に並んで正座した。

男たちが幾重にも輪を作る中心で、二人並んで、コンクリートを打っただけの床に掌を付き男達に急かされるままに頭を深く下げた。

野卑な男達の前に全裸姿を晒す羞恥か、憎みても余りある敵方の男達に恥ずかしい姿で屈辱的な土下座姿を強要される憤怒と屈辱の為か、体はブルブルと震え、上気した肌は見る見る赤く染まって来るのが分かった。

「土下座というのは、両手を付いて顔を地面に擦り付けてやるもんだ！もっとケツを高く上げなければ頭を深く下げられないだろう！もっとケツを上に掲げるんだ！」

と、勝ち誇った男達から囃し立てられ、逆らう事も出来ず、言われた通り、覆い隠す物の一切無い剥き出しの尻を上げて、額を床に擦り付けた。

正座の姿勢から頭を深く下げたため、お尻が浮き上がる形となり、女達の肛門の位置は、丁度真後ろを向く姿勢となり、その僅か下にふっくらとした柔らかな肉付きの丘が垣間見え、その中心を一筋縦に通って恥ずかしい割れ目とその隠微な姿をありありと晒していた。

これまで、恐る恐る剛沢や大亜門戸会の古参幹部連中の後に隠れるように、肩越しに女達の裸を正面から見詰め、涎を垂らさんばかりに口の端を卑猥に歪めて淫靡な笑みを浮かべていた若いチンピラ達であったが、女達が額を地面に擦り付け、豊かな尻を高く擡げる姿に、とうとう我慢出来なくなって、一斉に女達の背後に駆け寄った。

何人かが女の背後に回ると、我も我もと男達が群がり、女達が晒す白い尻を中心として、何重にも輪が出来た。

女達が晒す秘奥と視線の高さを合わせるように腰を屈めて、ギラギラする視線で女達の羞恥

の部分に凝視した。

晴江のこれまで夫以外に見せたはずの無い、一度も陽の光に晒された事も無い染み一つ無い、^{まさ}当に乳白色のガラスの様に透明感を帯びた抜ける様な白い肌が、極彩色の彫り物を施された双臀の間に垣間見え、一方、暁美の健康的に日焼けしたプリプリと弾む様な若い臀丘の狭間の抜ける様に白い地肌が嫌が上にも男達目を引きつけた。

これまで目高組に所属していた時に、畏敬の念で見詰めていた女神の化身の様であった女達が一糸まとわず、それどころか自分たちの目の前に女なら絶対に見せられない羞恥の秘奥を晒している光景に、痺れる様に脳味噌が溶け出し、これまで培って来た忠誠心や畏怖の念が流れ落ちて行くように感じられた。

暁美の日焼け跡からTバックスタイルの股ぐりの細い水着を着ていたことが判った。

淫靡な目で見詰める男達は、この目高組のじゃじゃ馬娘がハワイでボリュームのある身体を外国人に見せ付ける様に挑発的な水着を着ていたのかと想像した。

女達は、必死に臀肉を寄せて禁断の中心部を隠そうと努めていたが、羞恥に身悶えする度に尻たぶの間から菫色した菊花の蕾と二人が紛れもなく女性であることを示す仄暗い割れ目がチラチラと背後に回った男達の目に映った。

「へへ・・・二人とも揃いも揃ってでかいケツを並べやがって！」

「コラ！何を恥ずかしそうにモジモジしてるんだよ！もっと額を地面に擦り付けて、そのでかいケツを高く上げるんだよ！」

「お嬢もハワイでは随分とイヤらしい水着を着ていたんだな。まるでストリッパーの衣装の様じゃないか？その小さなビキニで、でかいオッパイとケツをスケベな外人野郎に見せ付けて得意になっていたんだろ？ケチケチせずに組に居た時もちょっと位、子分たちにも見せてやれば良かったのにな！」

と、笑い声を上げた。

男達の嫌らしい視線を剥き出しの下半身に感じて、母娘は顔がカーッと熱くなるのを感じ、男達の卑猥な要求に堪えられず啜り泣きを漏らした。

顔を床に押し着け、床に着いた両手の間に埋める事により、屈辱に泣く惨めな表情を直視されないだけ、少しでもましだと観念する母娘であった。

ゲスな男達から視姦される悔しさに自然と歯がカチカチと鳴ったが、二人は剛沢の命じる詫

びの言葉を詰まり詰まり復唱させられた。

羞恥の余り言葉が詰まると、容赦無く叱責の聲が浴びせられた。

哀れな母娘は、気丈な意志を奮い立たせ、必死の思いで涙を堪え、憎い剛沢の前で言葉に詰まりながらも詫びを続けるのであった。

そんな女達の惨めな姿に堪えようもなく嗜虐感が燃え上がり、悦淫の情を滾らせた男達は、女達の背後から、額が床に付くまで折り曲げて、高く持ち上げた女達の尻を下から眺め上げ、その仄暗い股の間から僅かに垣間見える恥ずかしい女の肉の褻を涎を流しながら血走った目付きで鑑賞していた。

「へへ！股の間から嫌らしいビラビラとおケケがチラチラ見えるぜ！」

「晴江姐さんは流石に大姐の貫禄でマ■■■■の回りからケツの穴の回りまで毛だらけだぜ！」

「男の無精髭みたいにボーボー汚い毛を生やしやがってよ！お前！女の嗜みってやつを知らねーのか？お嬢様はちゃんと無駄毛の処理をなさっているぜ！ちょっとは娘を見習ったらどうだ？」

「そりゃ、そんな目に毒な幅の狭いビキニを着ていたんだ。ちゃんと毛を剃っておかなければ、はみ出て仕舞うぜ！」

男達が臀肉の間から見える羞恥の部分を指差して大声で笑いながら叫んだ。

「それにしても汚いケツの穴の色をしやがってよ！それに随分使い込んだのか前のビラビラも真っ黒だぜ！」

晴江のその部分は、実際には、それ程色素が沈着している訳では無いが、自分で見ることの出来ない部分を大げさに囁し立てられ、羞恥の余り尻をブルッと震わせた。

「お嬢の方は、まだそんなに青沼に突っ込まれてないのか、綺麗なピンク色をしているぜ！」

自分の羞恥の部分を指摘され暁美が腰を震わせた。

「ケチケチせずに、もっと脚を拡げて、ケツを高く上げて、もっと良く中身を見せろよ！」

「ジロジロ見られて恥ずかしいのかよ？ケツがブルブル震えているぜ！」

口々に卑猥な野次を飛ばしながら、男達が涎を垂らさんばかりに、目を皿の様にしてその扇情的な姿を見詰めるのであった。

男達から卑猥な野次を次々と浴びせ掛けられる度に、女達は羞恥と憤怒で耳の先まで赤く染め、必死の思いで男達に向いた股間を窄めるのであった。

尻を高く上げて土下座の姿勢を取ったために、露出してしまった秘部を少しでも隠そうと、

紅く火照った臀肉をビクビクと緊張させる健気な様子に男達の劣情は嫌が上にも高まって行った。

必死の思いで羞恥の部分を隠そうと努める母娘であったが、床に顔を擦り付け、目を固く閉ざしながらも、男たちのギラギラした熱い視線が自分達の隠しておきたい恥ずかしい処に痛いほど突き刺さるのを感じていた。

照明を取り付けられたビデオカメラを構えた男が、女達の背後に回り、真後ろから高くもたげた尻を撮影し始めた。

カメラの照明に照らし上げられて、これまで、薄暗くしか見えなかった股間の佇まいが容赦無く照らし上げられた。

「おお！こいつは良く見えるぜ！」

男達が一斉に喚声を上げた。

男達の残酷な視線が股間の一点に集中している事を感じて、堪えようにも思わず悲鳴を上げてしまった。

「姐さんのオ●●●は、流石に年期が入った色をしているが、お嬢の方はまだ可愛い色をしてるぜ！」

「へへ・・・恥ずかしそうにケツの穴がピクピクしているぜよ！」

「それにしても大姐の方は汚い大きなケツの穴をしているぜ！」

「その汚い穴から大姐の貫禄で太くてうんと臭いウンコを放り出すんじゃないか？」

「ハハッ！違い無いや！」

男達が好き勝手に上げる野次に思わず怒りが込み上げて来て身体がブルブルと震えた。

「やっぱりお嬢ちゃんの方は可愛い小菊だぜ！」

「そんな小さな穴からちゃんとウンコが出るのかよ？一度見てみたいぜ！」

男達にその部分を挿入されて、イヤッと暁美が腰を震わせた。

「もっとケツを上げて、嫌らしく振ってみろよ！」

下劣な男達に女の秘奥の中心部を見詰められる羞恥と屈辱に抑えようとしても体が震えた。

「どうでえ・・・見てみろよ！股の間が綺麗なピンク色に染まって来たぜ・・・」

次々と男達の卑猥な野次を受けて羞恥で体が赤く染まって行くのがわかった。

背後の低い位置から撮影するビデオカメラに取り付けられたライトの熱が股間の秘められた奥深い部分をジリジリと焙った。

羞恥と憤怒でカーッと体温が上がり、汗の臭いにも似た体臭が周囲に拡がり始めた。

「へへ、良い匂いがしてきたじゃないか？」

周囲を取り囲む男達が二人の女から立ち昇る甘美な香りに鼻をヒクヒクさせた。

「へへ・・・盛りの付いた雌猫の臭いまでして来たぜ！」

二人の熱く火照った股間から、牝の羞恥の臭いが立ち上がり始めているのを男達が目敏く気付いた。

二人の女の股間から立ち上った甘酸っぱい体臭が、女達の間近に佇む男達の鼻腔を攪り、感激したような声を上げた。

今や、ジットリと汗に塗れた股間からは、抑えも効かず、濃厚な女性器の臭いを立ち上らせていた。

男達は、今にも両手を伸ばして、女の尻たぶを思い切り押し広げ、その奥の秘められた所に鼻を押し付けて、間近から思い切り、牝の性臭を嗅ぎたいとの衝動に駆られたが、剛沢の許し無しで勝手な行動に出た後の恐ろしさを良く知っていたので、女達の裸身には一切手を触れることなく、周囲を取り囲んで卑猥な野次を飛ばす事により、何とか衝動を押し止めていたのだった。

覆う物の無い無防備な背後に回った撮影係が、カメラを床に置くような低い位置から狙い、二人の股間からチラチラと垣間見える女性器と排泄孔を鮮明にカメラに収めて行った。

長い時間、男たちの前で屈辱的な姿を晒し、気も狂いそうになる程の羞恥に思わず泣き叫びそうになる心の乱れを気丈に抑えて、剛沢から強制された詫びの言葉を何度も言わされた。最早、女たちは悔し涙を流し続けながらも従順に男達の命令に従うしか無かった。

自分たちの命乞いのため、敵の前で凄まじい生き恥を晒している大姐とお嬢に目高組の古参幹部も堪え切れず、悔し涙を流しながら大声で悲痛な泣き声を上げていた。

長い恥辱の時間の末に、ようやく剛沢から許しが出来、ほっと二人は頭を上げた。

剛沢は上機嫌で、

「天下の目高組の大姐御とお嬢に素っ裸で土下座をされて、詫びを入れられたんでは、こちらとしても許さない訳には行かないな。俺も男だ！約束通りこいつらの罪は無かった事にしてやろう！」

と、キッパリと宣言した。

そして、

「おいっ！こいつらに痛み止めを打ってやれ」

と、子分に声を掛けた。

何人かの部下がヘロインの入った注射器を手を持って来た。

「今まで、痛い目にあわせてすまなかったな。今痛み止めを打ってやるからな。」

と、敗北感に苛まれ啜り泣きをもらしている、すっかり大人しくなった古参幹部を見つめながら言った。

「音に聞こえた赤石の兄さん達に青痣を作ったまま帰しては失礼だからな、傷がすっかり治るまで治療してから帰してやるぜ。」

剛沢の子分から次々と痛み止めの麻薬の入った注射を打たれて、自分達の配下だった若者達から袋叩きにあった傷の痛みで苦悶の表情を浮かべていた幹部たちの表情が、痴呆者の様に変化し、顔の筋肉が弛緩してしまい、だらしなく開いたままの口の端から涎が流れ落ち、トロンとした目で天井を見上げていた。

そして、厳しく縛っていた縄が解かれると、剛沢の子分達に手を引かれて、立ち上がらされ、何処かに連れ去られて行った。

晴江も暁美も祈るような思いで連行される幹部達の後姿を見つめ続けた。

そして、これがこれまで組のために貢献してくれた古参幹部達の姿を見る最後となることをまだ晴江達は知らなかった。

最後まで目高組に忠誠を誓った古参幹部達が連れ去られ、後には重傷を負った目高組組長と全裸の母娘だけが残された。

ようやく古参幹部連中がリンチから解放されたことにホッとして、自分たちの脱いだ服に手を伸ばそうとした時、大亜門戸会の子分に混じってこの様子を面白そうに見物していた剛沢の愛人たちが、サッと衣類を取り上げてしまった。

「確か、この女、全財産を大亜門戸会に譲渡すると言ったわね。じゃあ、この立派なお召し物を私たちで頂いても文句は無いわね？」

女たちが高そうな衣類を手にして、キャツキャツと楽しそうに騒ぐのを見て、剛沢も「まあ、そう言う事だな・・・」

と、女たちの意地悪さを面白そうに見ながら肯いた。

周囲を取り囲む男性組員からも

「そうだ！そうだ！丸裸になって散々恥を晒したのだから今更恥ずかしがることは無いだろう？」

「ずっと裸でいれば良いじゃないか！」

「丸裸で放り出してやるから、何処へでも行きやがれ！」と囃し立てられた。

「なによ！その目は！何か文句があるの？」

晴江や暁美の下着に至るまで全ての着衣を奪い去り憎々しげに睨み付けられた女たちが逆切れしたような声を出した。

「お前達の土下座に免じて、目高組幹部の罪は許してやった。・・・しかし、これでお前達が、これまで散々大亜門戸会に楯突いて来た罪が消えるものではない。」

剛沢が全裸のまま床の上に両手で乳房を隠して前屈みに正座する二人に宣告した。

晴江は、剛沢のベツトリと粘り着くような蛇のように陰湿なしつこさにくさくさとしたように、

「分かりました！私も極道者の妻です。この場でスッパリと指を摘めて、落とし前をつけさせて頂きます！」

と、男達の見線から乳房を隠していた両手を解き、小指を立てた左手を前に突き出すと、キツとした表情になり、睨み付ける様な目で、剛沢に今この場で指を詰めますと迫った。

「女に指を詰めさせても、ちっとも面白くない。・・・俺流のやり方で落とし前をつけさせてもらうぜ。」

そんな晴江の鬼気迫る表情を無視するかの様に、口元に薄ら笑いを浮かべた剛沢が地下室を見回しながら言った。

「この部屋はな、普段倉庫代わりに使用しているが、元々は組を裏切ろうとした奴を見せしめのために折檻したり、敵対する組の奴らを拷問に掛けて秘密情報を吐かせるために作った特別な地下室なんだ。今までにもお前達の組員で連れ込まれた奴がいるんだぜ・・・」と、晴江達を見詰めながら、不気味な笑みを浮かべた。

「失踪したうちの組員は、お前達が、ここで殺したのかい？」

晴江が憎しみのこもった目で剛沢を睨み付けた。

「人間きの悪い事を言うなよ。殺人事件とはな・・・死体が上がるから殺人事件で、死体が上がらなかったら、ただの失踪事件さ・・・」

この部屋には死体を跡形も残さず処分できるだけの設備があり、例え殺しても死体は発見さ

れないと、自信を持ってうそぶく剛沢であった。

「今から、この拷問部屋の設備を使って、お前達にヤキを入れてやるから覚悟するんだぜ・・・」

剛沢が目に残酷な光を宿して、二人を見つめながらニヤッと笑った。

コンクリートの壁面には鉄製のボックスが設置されており、剛沢はその鉄製の操作盤の蓋を開くと、その中に並んだ幾つかのスイッチの内の一つのスイッチを操作した。

すると、天井からガラガラと音をさせて4本の鎖が降りて来た。

鎖の先には革の手枷が取り付けられていた。

組員に手伝わせ、いやがる母娘を立ち上がらせると有無を言わず両手を掴んで手枷に固定した。

再びスイッチを押すとウィンチのモーター音を響かせて鎖が引き上げられ、二人の女は両手を大きく開いて吊り上げられた姿勢で、並んで部屋の中央に立たされてしまった。

「へへ、良い格好にさせて貰ったじゃないか？」

両手を頭上に高く引き上げられ、恥ずかしい処を隠すことも出来ず、立位で吊り上げられた二人の女の周囲を回って、その裸身を遠慮なくジロジロ見ながら剛沢が声を掛けた。

相変わらずカメラは二人の裸身を捉え続けていた。

晴江の背中に彫り込まれた騎龍観音が、羞恥と怒りで、ふるふると震えているのが分かった。

両手を上に引き上げられているにも拘わらず、暁美のふくよかな乳房は、形が崩れる事無く前に突き出していた。

二人のゆで卵の薄皮を剥いたような白い肌に映える、股間の黒く艶のある春草にヤクザ達の目が集まった。

両手を頭上に吊り上げられ、恥ずかしい処を隠すことも出来ず、全裸姿を野卑なヤクザ達からジロジロ見られる羞恥と屈辱で身悶えした。

少しでも股間の恥ずかしい処を隠そうとするかのように、股を深く閉じ合わせようとモジモジと太腿を振り合わせるいじらしい姿に、男達の欲望がメラメラと燃え上がった。

剛沢は、壁に取り付けられた木製の棚の扉を開いた。

扉を開けると中には、夥しい数のおぞましい拷問道具が納められていた。

剛沢はその中から4本の革製の鞭を取り出すと、元目高組の三下に無言で手渡した。

剛沢の意を汲んだ三下達が、緊張した表情で無言のまま肯くと、それぞれ鞭を手に、晴江と暁美の前と後ろに配置した。

剛沢の命令を受けた大亜門戸会の子分が、鞭で打たれている間に舌を嚙まないよう、二人の口に猿轡をねじ込んだ。

硬質ゴム製の太短い棒をしっかりと両の奥歯の間に挟み込ませると、棒の両端に取り付けられた、革ベルトにより頭の後ろでカッチリと縛り上げた。

「そんな色っぽい目で睨まないでくれよ。」

猿轡を嚙ませながら、組員が晴江に言った。

猿轡を詰められ横目で恨めしそうに作業者を睨み付ける晴江の顔は、確かに素顔の時より一層妖艶に映った。

準備が整い、剛沢が目で元目高組の4人の三下に合図を送った。

男達は、青ざめた顔色のまま二人の女の前後ろに陣取り、冷酷な剛沢の命令に逆らう事も出来ず、形だけは、鞭を高く振り上げた。

晴江が鞭を手にした正面の男に怒りを含んだ目で睨み付けた。

傍目にも睨み付けられた男が、晴江の眼光にたじろぐ様子が判った。

回りを取り囲む大亜門戸会の荒くれ達が、この目高組を裏切って大亜門戸会に鞍替えした男達が、本当に元の親分の女房や娘を鞭打ちすることが出来るか、踏み絵を見守る様に冷たい視線を浴びせた。

早くやれ！と言うかのように剛沢が顎をしゃくった。

今まで何かと機嫌の悪い時には、突然理由もなく殴る蹴るの暴行を受け、散々虐められて来た古参幹部には、これまでの恨みを思い起こすと、遠慮なく暴力を行使出来るようになったが、今まで陰も踏めず、直接のそのような虐待を受けた経験も無い大姐とお嬢に暴行を加えるには、さすがに気後れしていた。

剛沢の冷たい視線を背に受けて、ここで大恩ある親分の夫人や娘に鞭を振るわねば、剛沢の怒りを買って自分に危険が及ぶと、恐怖に急き立てられると、全身を覆う緊張感に身体は痺れ、力が入らないまま焦って鞭を大きく振りかぶったが、ペチンと気の無い音を上げて柔肌に跳ね返されるような鞭となった。

「何だ！何だ！お前らやる気があるのか？」

大亜門戸会の組員に野次られ、剛沢の目に煽られ、進退窮まった三下達は、晴江達と目を会わさぬように目を固く閉じ、固く唇を喰い絞め、渡世の全ての義理や人情を振り捨て、意を決したように、鞭を振りたてた。

ビシッと音を立てて鞭の先が晴江の身体を捉えた。

まともに鞭の衝撃を脇腹に喰らった晴江がウツと声を上げた。

隣では暁美の身体が鞭の衝撃で撓^{しな}った。

何もかもかなぐり捨て恩義有る親分の妻や娘を打擲する男達から次第に強い鞭の打撃を与えられるようになって来た。

何時の間にか鞭の風を切る音もビュービューと鋭くなり始め、鞭先が柔肌に衝突する時も段々と甲高い大きな音を立てるようになって来ていた。

ほんの僅かな間に、兄貴分として仕えていた恩義ある幹部連中に暴行を加えることに、後ろめたさを感じなくなり、逆に抵抗を封じられた幹部に暴力を振るうことによりこれまで押さえ付けられてきた鬱憤を晴らす事に快感をおぼえ始めたように、男達が大恩在る親分の女房や娘を積極的に虐待するのに時間は掛からなかった。

自分達が振るう鞭の激痛に身体を震わせる女達の様子を見ていると、組に居る間感じていた恐れにも似た感情は消え去り、代わりに獣じみた残忍な欲望が沸々と沸き上がって来るのを感じていた。

取り囲む大亜門戸会の組員は、かつては歯牙にも掛けなかった三下組員からも見捨てられた上、その元の子分達から徐々に強く鞭撃たれるようになって来た母娘の光景を面白そうに見物していた。

今やかかつて受けた恩や義理を捨て去った唾棄すべき男達により、次第に激しくなって来た打撃を、胸や背中に同時に受け、女達は激痛に身悶えていた。

全身を脂汗で艶々と照り返らせ、胸や腹や背に無数の赤い打撃痕を刻み、身悶えする女達を目前にして、心を無にして打擲を加え続ける内に、何時の間にか男達からは親分の妻や娘への畏敬の念は消え去り、今はただ苦痛に身を振る弱い肉塊が在るだけだーと、云うような意識に変わって来た。

そして、元の親分の夫人や娘に対する恩義を心の奥底からすっかりと捨て去るのと入れ替わるように、常に自分たちに尊大に接していた女達への怒りが込み上げ始めていた。

かつては畏敬の目で見っていた、女達が自分たちの鞭により脂汗を流して苦悶するだけのただの弱い女だったと判ると、自分たちの心の中で長年に渡って築き上げて来た畏怖すべき女神としての偶像は、音を立てて崩れ落ちてしまっていた。

そして、その後には、壊れた偶像を完膚無い程に粉微塵に打ち砕いてしまいたいという暗い欲望へと変化を推し進めていた。

味方は全滅し、残った組員も全て敵方に寝返ったこの絶望的状況下で、鞭打たれる苦痛に惨めに悲鳴を上げ涙を流し、無残に鞭の苦痛に身悶える姿を晒すことが、大亜門戸会への完全な屈服を認める事になると信じているのか、気丈にも鞭打ちの激痛にカッと目を見開き身体をブルブルと震わせることはあっても悲鳴を上げることは無く、口に嵌められた猿轡を奥歯でグッと噛みしめ、必死に鞭の痛みを堪えていた。

一方、打擲を加える男達の心には、鞭打たれ苦痛に身を振りながらも、今や立場が完全に逆転して自由に暴力を振るえる様になった自分達に対して、いまだに親分の妻や娘としての威厳を誇示するかの様に強靱な精神力で抵抗を試みるこの女達に、最後の抵抗心を微塵に打ち砕き、身も世もない惨めな悲鳴を上げさせ、かつて自分達を睥睨していた女達に敗北感を骨身に滲み入るほど思い知らせてやりたいという嗜虐の欲望が混み上がって来た。

女達の驚異的な抵抗心を鞭打ちの激痛で排除して、嗜虐者である自分達の目の前に惨めに泣き叫ぶ姿を晒させてやろうと、既に鞭打たれて、赤い打撃痕が残る部分を精密に狙って鞭を加えた。

瞬間女達は、カッと目を見開きブルブルと身体を震わせ激痛を訴えたが、それでも悲鳴を上げることは無かった。

鞭打つ男達の方が、汗をビッショリかき、ハアハア息を荒げて、鞭打つ手を休めた。

「どうした？もう疲れたのか？」

剛沢が、だらしないと云うような表情で尋ねた。

「いえね、今度はここを狙ってみたいと思いやして・・・」

と、女の股の間を指さして言った。

腹や背中にいくら打擲を加えても悲鳴を上げようとしなない屈強な女達に、ならば、女ならではの急所を直接鞭打ってみようと考えたのだ。

この元子分の声が聞こえ、晴江達は怒りに震え、猿轡を噛みしめて、男を睨み付けた。

しかし、いまやこれまでの恩義を捨て去り、逆に自分たちに尊大であった女達への復讐心が心の内を占める男達への効果は無かった。

逆に、男達は晴江たちの怒りの視線の矛先を受けたことにより、いかにこの強情な女達と云えども剥き出しの股間を鞭打たれることが、どれほどの苦痛を呼び起こすか恐怖を感じているに違いないと、女性器鞭打ちの効果を理解して嫌らしく女達に笑い返した。

剛沢はその提案に腹を抱えて笑った。

「おい！聞いたか？これまでお前達が顎で使って来た三下共が、お前らのオコを鞭で打ちたいってよ！」

と、晴江の髪を鷲掴みにして、グイグイしごきながら声を掛けた。

「こうなったら組長の妻の貫禄で、大股開いて元の子分達に気の済むまで好きなだけ打たせてやったら良いじゃないか？」

残酷な刑罰への恐怖に顔を青くし、それに対して何も出来ない悔しさに、目を潤ませる晴江達に向かって、腹を揺すって笑いながら叫ぶのであった。

大亜門戸会が折檻に使う場所だけあって、コンクリートの床面には、杭が差し込める穴が幾つも用意されていた。

立位の女達の横の床から、穴を塞いでいたカバーを取り外し、露出した穴に、太くて長い鉄製の杭を差し入れた。鉄の杭の一端には、鉄環が溶接されていた。

剛沢の子分が女達の足下に群がると、鎖の付いた革製の足枷を足に取り付け、鎖を床の杭の鉄環に通して思い切り引き絞った。

これ以上の辱めを受けることに堪えかねて股を開かせまいと、精一杯の力を両脚に込めて、寄って集って股間をこじ開けようとする男達に抵抗したが、

「何を頑張っているんだ？早く開くんだよ！」と、鎖で両手を繋がれ宙に固定され身動きを封じられた女を前にしてすっかり余裕を持った男達は、そんな女達の最後の抵抗にニヤニヤと卑猥な笑顔を浮かべてパンパンと尻を平手で打ち、両脚に絡めた何人もの手に一層力を込めるのであった。

先ほどの裸で土下座の間は剛沢の許しが無く、二人の裸身に手を触れる事が出来ないもどかしさを感じていたが、今は自由に女の柔らかな脂肪を乗せた体を触り、先ほどは良く見えなかった股の奥に隠された秘所をこの目で拝めると言う感激に後押しされて、まるで餌に群がる蟻のように、何人もの男達が無防備な母娘に集まった。

超武闘派の荒くれ男達を顎で使って来た女達であるから、格闘なら男達に決して引けを取らない能力を持っていたが、手脚を封じられてしまったら、所詮女の力でしか無く、必死の抵抗も虚しく、何人もの男に引き絞られ、男達の力の前に抗しきれず、ズルズルと両脚が付け根から開いていった。

必死に股間に力を込めても、男達の力の前にジワジワと開いていく間に、汗を浮かべた体を捻らせて、猿轡を嵌められた口からアアッアアッと悲鳴のような呻き声が上がった。

「何が、アア、アアだよ！ほら！お前達が必死こいて隠していた割れ目の奥がジワジワと見

えてきたぜ！」

「へへ、強い女とも思えないほど可愛いビラビラじゃないか！」

「この秘め処をこれから思い切り鞭打たれるんだぜ！どうだ、考えただけでもワクワクして来るだろう？」

無理やり股間をこじ開けながら、次第に大きく露出を始めた女性器を眺めて嬉しそうに笑い声を上げた。

これ以上無いほど股間を大きく広げると、再び閉じることを封じるため、足枷から延びる鎖を鉄環に大きな南京錠で固定した。

「お前ら、良い格好にして貰ったじゃないか？」

両足を扇のように広げ、大の字に固定された晴江達を前にして、剛沢が上機嫌で笑った。

「そんなにおっ^ト拵げたら腹の中の臓物まで見えそうだぜ！」

女の羞恥の源泉は隠しようも無く、大きく露出し、どうぞ好きなように鞭で打って下さいとでも云うかのように堂々と野卑な男達の前に開いていた。

「今まで俺たちのことを散々こき使って呉れたお礼に、ここに嫌って言う程、鞭の嵐を呉れてやりますぜ・・・」

鞭を手にした男がニヤッと冷たく笑うと、鞭の柄を開き切った晴江の股間に押し付け、濃密な陰毛の上から女の命の宿る場所をグリグリと擦り上げた。

これまで男を男とも思わず顎でこき使って来た下級組員から敵意の籠もった目で、敏感な箇所を硬い鞭の柄で捏ね回されて、思わず恐怖に悲鳴を上げそうになった。

「流石に体に鞭を受けても悲鳴一つ上げなかった気丈な姐さん達だが、ここに鞭を受ければどうですかね？どんな我慢強い女でも激痛に悲鳴を上げて泣き叫びますよ・・・もっとも、真っ赤に腫れ上がって血を流して泣き叫ぼうと、これまでの恨みをすっかり晴らすまでは、許しては上げませんよ・・・」

鞭を手に非情な言葉を投げ付け、冷たい視線を浴びせる男達に、晴江達は全身から血の気が引いて行くような恐怖を感じた。

元目高組の三下達が、鞭打ちの位置に着こうとした時、突然剛沢の一人の子分が声を上げた。

「ちょっと待て！股の間の変なものを刺ってしまった方が、鞭の狙いが定め易いのでは無いか？」

この愚劣な提案に男達は大笑いして、そうだ！そうだ！と嘯し立てた。

男達の目の前で、大きく股を広げた姿を晒すだけでも気が狂いそうな羞恥なのに、その上更に恥の上塗りをさせようと云うのかと思うと、男達の残忍さに怒りが込み上げて思わず歯噛みした。

晴江達母娘を取り囲む男達も、衆人の注視する中で素っ裸にされて股間を大開に固定されているだけでも、耐え難い恥ずかしさだろうに、その上、秘裂を隠す最後の盾まで奪われてしまったら、この女達はどの様な羞恥を示すのかと思うと、卑猥な目で女達の股間の繁茂に目を注ぐのであった。

「それでは、その役は私^{アッシ}にやらせて下さい。」

裏切り者のサブが名乗りを上げて前に進み出た。

「こう見えても私は、目高組の杯を受ける前は理容師の学校に通っていた事が在りまして・・・カミソリを扱わせたら大したもんですよ・・・」

だから付いた仇名がカミソリのサブだったのか？と、取り囲む男達から笑い声が上がった。

「縁あって大亜門戸会の杯を受け、目高組の杯はお返しすることになりましたが、これまでのご恩に報いるため、姐さんの下のおケケは私が端正込めて、綺麗な剥き身のハマグリの活け作りの様に剃り上げてさし上げましょう。」

と、卑猥な笑い声を上げながら、晴江の傍に歩み出て来た。

最初に組を裏切ったサブの厭らしい顔が間近に迫り、この男からだけは、死んでも辱めを受けたくないーと、猿轡の奥からうめき声を上げて、屈辱と嫌悪感で身動き出来ない体を必死に振った。

「それじゃ、お嬢の方は、私が引き受けましょう。私も昔し床屋で修行したことがありますてね、お嬢の綺麗なお肌をスベスベ、ツルツルの剃りマンに仕上げてさし上げますよ。」と、剛沢の子分の吉原という男が名乗り上げた。

これを見て、取り囲む男達から

「専属の理容師が出来て良かったじゃないか。これからも伸びて来たら定期的に剃って貰えぼどうだ？」と、笑いが起こった。

大亜門戸会の子分達が代わる代わる熱く蒸されたタオルを女達の股間をくぐるように押し当てた。

熱く湿ったタオルは女達の敏感な薄い肌をチリチリと刺激したが、このタオルでくるまれて

いる間は自分たちの羞恥の地帯が男達の卑猥な目から隠されている間であった。

サブ達から指示されて熱を失ったタオルが取り去られ、更に何度も熱い蒸しタオルを股間に押し付けられ、肌が赤くなり、繊毛が柔らかく撓垂れるまで良く蒸し上げられた。

タオルの熱さは耐え難く、タオルを押さえる指でイヤらしく秘裂を颯る男達の指の動きも堪え難かったが、そのタオルを取り去られ再び男達の目に秘奥を晒すことも耐え難い苦痛であった。

十分に蒸し上げ、しっとりとした湿り気を帯びて艶々と輝く黒々とした恥毛に不意にサブが手を触れた。

素手でズロリと陰毛を逆撫でに撫で上げられた瞬間、ヒィ！と小さく悲鳴を上げて、まるで電気に触れた様に身体をビクッと硬化させた。

「大姐のここの毛を初めて見せて頂きましたが、男勝りの姐さんの事だから、男の無精髭みたいにゴワゴワで硬い毛かと思ってましたが、どうしてどうして、まるで子猫みたいに柔らかいおケケじゃ無いですか？」

卑猥な笑みを口元に浮かべて、背後で見物する男達の方を振り返り、笑いを誘った。

言葉で元の親分の妻をいたぶりながら、指先の動きは休むことなく、晴江の成熟した陰裂に沿って指を上下させた。

「どうです？今まで歯牙にも掛けなかった様な下っ端組員に大事な大事な毛をツルツルに剃り上げられる事になって、悔しくて仕方無いんじゃないですか？その仕返しにして、剃ってる最中に私の顔にオシッコを引っ掛けたりしないで下さいよ・・・」

サブの粘っこい視線で秘所を見詰められ、更にイヤらしい指先で、しっとりとした湿った秘毛を掻き上げられ、陰湿な言葉颯りを受けて、屈辱のあまり眉根を寄せて、イヤイヤと腰を振り立てた。

蒸しタオルで良く蒸し上げられしっとりとした撓り良くなった痴毛を両手の指先で掻き分けながら、突然サブが大声で笑い始めた。

「大姐の此処を見せて頂くのは初めてでですが、こんなに大きなクリチャンをお持ちだとは知りませんでした！俺の小指の先よりもデカイじゃないですか！」

サブの笑い声に周囲を取り囲む男達も一斉に晴江の股間を注視して、こいつは大きいや！とか、流石に女親分は持ち物が違うとか、互いに肩を叩いて笑いさざめいた。

自分の恥ずかしい体の秘密を敵方の男達に知られてしまった悔しさと羞恥の顔をサッと振ると見る見る赤く染まって行った。

男なら亀頭部分に当たる箇所を半ば覆っていた包皮を丁寧な手付きで捲り上げられながら、込み上げる恥ずかしさでナヨナヨと腰を震わせた。

そこにはかつての強い女親分の威勢は無く、ただの羞恥に身悶える女々しい姿しかなかった。

「組にいた時には、姐さんの勇ましい姿に本当は男だったんじゃないかと思ったこともありやしたが、こんな色っぽい身体の奥に、こんな男らしい物を隠していたんですね？」と、淫靡な笑みを満面にたたえて言葉騷りしながら、指先でその根元部分まで完全に包皮を剥き上げ、痴丘の下に位置する突起物を見物人の目に顕かに示しながら、「形も■■■■ポコにリツクソじゃ在りませんか！」と大声で笑い上げるのであった。

剥き出しになった陰核の表面を親指の腹で撫でる様にして、

「夜は布団の中で親分のデカイ■■■■ポとこれをぶつけ合ってチャンバラをしていたのですかい？」

と、二人の夜の営みを想像する様にニヤッと笑った。

自分のみならず親分まで元の三下にかかわれた事に憤怒の表情を浮かべたが、そんな事も気にならず、晴江の羞恥に身悶える姿を食欲に楽しむ様に、指先で丁寧に陰毛を左右に掻き分けて、成熟した女性の亀裂をさらけ出す様にしたので、血走った目で背後から見詰める男達が、掻き分けられた豊かな陰毛の間から姿を見せた柔らかく肥大した肉襞を目にして生唾を呑み込む音が呟した。

今まで見下していた下っ端の子分の裏切りに合い、そのイヤらしい指先を秘裂に沿って騷られる屈辱に、身体をブルブルと震わせ、身体を仰け反らして、猿轡を嵌められた口からウウッと呻き声を漏らした。

晴江の反応を楽しむ様に、一っ切り指先で女親分の最も女である部分を淫靡に撫でさすった後、不意に真顔に戻って、

「それじゃ、用意も調った様ですからそろそろ始めますか・・・」と、呟いた。

何処から持って来たのか理容室で使うような本格的な陶器の泡立て器が2セット二人の足下に用意された。

微温湯に溶かされた粉石鹼がブラシで手早くかき回され、程良く泡を立てた。

慣れた手付きで、泡だった石鹼液をブラシに載せ、晴江の飾毛の上をそっと撫でた。

その瞬間、おぞましい電流が走ったように体を硬直させて顔を顰めた。

そんな晴江の羞恥に身体を硬ばらせる様子も気にならないかの様に、ブラシの先で^{くすぐ}擦るよ

うに股間をはわせながら、これは剃り易そうな柔らかい毛だと、独り言のように呟いた。

「動くとき怪我をしますぜ・・・」

扇の様に大きく開いた両脚の間にドッカと胡座をかいて座り込んだサブがカミソリを手に晴江の顔と股間を交互に見上げながら言った。

カミソリの刃先を春草の繁みの端に押し当てると、スーと肌を嘗めるようにカミソリを動かした。

そして、カミソリが通った跡には滑やかな白い肌が露出した。

そのカミソリの刃が上下するおぞましい感触を、晴江達は、堅く目を閉じて耐えていた。

さつきまで股間を覆っていた、艶々とした飾り毛は徐々に姿を消し、その跡には童女のような、左右の柔らかい二つの膨らみが形作る艶めかしい割れ目をハッキリと露出させ始めていた。

黒々とした艶のある晴江の秘毛も暁美の谷間に漂う霞の様な儂い春草も男達の手にしたカミソリによって無残にも剥ぎ取られて行った。

「ほらほら・・・段々と割れ目ちゃんがハッキリと顔を見せてきましたぜ・・・良い歳して・・・四十も過ぎているのに、まるで子供の頃みたいにツルツルの剥き出しになって・・・すっかり若返って嬉しいやら、恥ずかしいやら、悔しいやら、哀しいやら、複雑な気分じゃないですか？」

サブは、そんな仕事が楽しくて仕方が無いと言うように、卑猥な笑みを浮かべて、時々からかう様に羞恥と屈辱感に身悶える晴江に話掛けたり、気持ち良さそうに口笛を吹きながらカミソリの刃を這わせ、滑りが悪くなったと見たらブラシに石鹼を含ませ柔肌にブラシの毛先を這わせるのであった。

僅かばかりの面積を覆う体毛であったが、一機に剃り上げては面白くないとでも言うかの様に男達は、少しずつ剃っては、また石鹼の泡を塗すなど、女達の神経をなるべく長い間いたぶる様に作業を進めているように見えた。

敏感な神経を散りばめた微妙な部分を生暖かい石鹼の泡をたっぷりも含んだブラシの剛毛で擦るように舐られ、次に冷たい硬質なカミソリの刃を押し当てられ女達は屈辱に満ちた苦痛のようなものを痛感するのであった。

「へへ・・・大事な大事な秘め場所を長年に渡って隠してきた物がだんだん無くなって来て、頼りない気分になって来たんじゃないですか？」

サブがいやらしい目付きで卑猥な笑みを浮かべて、羞恥に苦悶する晴江の顔を下から見上げながら声を掛けた。

そんなサブの手捌きにより身に着けていた最後の盾を少しずつ奪い去られて行く目高組の大姐の姿に居合わせた男達の目は釘付けとなり、全身に彫り込まれた極彩色の刺青とむき出しの女性器のアンバランスに、男達の劣情はいや増しにも高まって行った。

一方、暁美の方も、もともと毛量の少なかった春草は、既にほとんど剥ぎ取られて、良く盛り上がった女の丘から豊かに成熟した花園までを隠すもの無く晒していた。

「どうですか？風が当たってスースーするんじゃないですか？お嬢も大事な所を何もかも剥き出しにして、子供のころに帰ったようなはしゃいだ気分になっているんじゃないですか？」

吉原が満面に卑猥な笑みを浮かべて、羞恥の涙に鼻を吸る暁美を見上げながらからかった。そして、石鹸の泡をたっぷりと載せたブラシを手にして、剥き出しにされた恥ずかしい突起をブラシの先でツツツと突く様に撫で回したり、秘裂に沿って柔らかい襞の上をいやらしく撫で回して、暁美の示す反応を楽しむのであった。

作業の手を休めたサブが、自分の仕事を確認するように、恥毛を剥ぎ取られて剥き出しとなった秘所を繁々と見詰めながら言った。

「流石に男勝りの大姐だ！クリちゃんも男勝りの立派なモノを持っているじゃありませんか？折角こんな大きなモノを持っているんだから、何時もここを剃り上げて股を丸出しにして、子供達のモノと大きさを比べっこして威張っていたら良かったじゃありませんか・・・」隠す物を失い、丸見えとなった女の花園の上部に位置する柱の様に筋の通った部分の先端に包皮に半分覆われたピンク色の突起物をじっと見詰め、嬉しそうに大声を上げた。

今は隠す物を失った自分の恥ずかしい器官を大っぴらに指摘され、思わず「ああっ！イヤ！止めて！」と、叫んだが、猿轡に遮られ呻き声にしかならなかった。

サブが指摘するように平均的な女の物よりはだいぶな、女芯の先端に位置する、包皮から半ば剥き出しとなった大豆の様な形の薄いピンク色した柔らかい突起を親指の腹で撫で回すように押されたり、肉芽の根元を覆う包皮を剥き上げる様に指をはわせる度に、羞恥の悲鳴を上げて尻を振り立てた。

暫くの間、晴江の身悶えぶりを見詰めていたが、残酷さにおいては隣の吉原よりずっと上の

サブは、狐の様に狡猾な笑みを浮かべると、再びブラシを石鹼水の中に浸して、泡をタップリと含ませた。

そして、陶器の容器の縁で余分の泡を拭い取って、ブラシの先端を尖らせると、その細い毛先で、晴江の突起を擦った。

生暖かい石鹼を塗された柔らかだけど腰のある毛先で、神経の集中する敏感な部分を責め立てられ、堪り兼ねた様に腰をブルブルと振り始めた。

「へへ・・・このデカイ女は感度が悪いと言いヤスが、どうしてどうして大姐は充分感度が良いじゃありませんか？・・・こんなに喜んで貰えて私も嬉しいですよ！」

散々陰核の先端をブラシに先で刺した後、次に突起の根元を覆う包皮との隙間にブラシの先端を差し込み刺激を加えた。

陰核の表面と包皮の間に侵入したブラシの毛先に責め立てられビクビクと腰を痙攣させた。

「お嬢の方はさすがに母親と比べると小振りだけど、随分感度が良いようですね！」

サブを真似て暁美の陰核をブラシでいたぶる吉原が嬉しそうに声を上げた。

包皮の奥から僅かに顔を覗かせている先端部分を石鹼水をタップリと含んだ毛先で刺し上げた後、突起部分を覆っていた秘膜を捲き上げ、これまで触れられた事の無い鋭敏な箇所を毛先で責め立てられた。

生暖かい石鹼水のヌルヌルとした感触と動物の毛で作られた柔らかでも腰のある感触が、繊細な神経を散りばめた秘芽からズキンズキンと込み上げ、名状できない鋭敏な刺激に、堪えようにもアアッ、アアッと呻き声が漏れ、腰がガクガクと震えた。

「お嬢は案外こんな事が好きな様だ！ほらほら・・・こうしている間にもこの小さなモノが充血して勃起して来ましたぜ！」

暁美の身体の変化を目敏く見付けて、吉原が上体を仰け反らせて笑い声を上げた。

周囲を取り巻く男達からも、痛々しく充血し変化を始めた暁美の秘部を指差して笑い声が上がった。

一方、晴江も唾棄すべき裏切り者から与えられる屈辱への悔しさと、敏感な陰核と包皮の間の繊細な神経が散りばめられた隙間に尖った毛先を差し入れられ刺さる搔痒感に、堪えようとしても腰がブルブルと震え、屈辱感に一筋の涙が頬を流れた。

鞭打ちの激痛には、歯を噛みしめて耐えていた気丈な目高組の女親分も陰湿な悪戯に根負けしたように女ばい喘ぎ声を上げて艶めかしく尻を振る様子に、見守る男達から思わず哄笑が巻き起こった。

一切り悪さをして女に悲鳴を上げさせた後、再びカミソリを手にしたサブが、

「ここからは、ちょっと難しいので、誰か手伝ってもらえませんか？」と、後ろを振り返り助けを求めた。

男達はサブに言われるままに、いったん片足の鎖を解き、晴江が暴れ出さないよう二人がかりで脚をガッチリと抱えると前に大きく持ち上げた。

別の男にはライトを持たせて、下から晴江の股間を照らし上げさせた。

片脚を大きく上に持ち上げられ、大きく開いた股間に後ろ下方から照らし上げられ肛門の周囲がまざまざと晒し出された。

長時間の屈辱感に呵まれた晴江にとって、最早自由になった足を振り回して、男を振り払う気力は無くなっていた。

「へへ・・・大姐御ともあろう人が、お尻の穴の周りも毛だらけじゃないですか？人に見せられた様じゃ無いですねえ・・・まあ夫以外には見せることは無いでしょうが、淑女の嗜みってヤツだ。ここも綺麗に剃り上げて上げてやりますぜ・・・」

晴江の股間の下に潜り込み、陰唇の襞の周りから生えるむだ毛や肛門周りのむだ毛をカミソリの刃先を当て一本一本丁寧に処理始めた。

「目高組の大姐ともあろう人が、こんな所にみっともない毛をボーボー生やして恥ずかしく無いんですか？こんな無神経な女を大姐御として拝んでいたのかと思うとこちらの方が、恥ずかしくなって来やすぜ！」

人に見せる筈も無い恥ずかしい部分の発毛を指摘され、晴江が羞恥の苦痛で顔を激しく振った。

「何時も顔は綺麗に作ってすまし顔をしていたくせに、ココがこんなにほったらかしだったってガッカリですぜ！元の子分達に謝って貰いたいくらいだ・・・」

さして多くもない肛門の回りに生えた毛の一本一本も根元にカミソリの刃先を当てるとゆっくりと時間を掛けて楽しむ様に剃り上げていった。

「どうです？ゴワゴワした毛が無くなってスベスベになって良い気持ちでしょう？これでトイレに行ってもウンコが毛にこびり付く心配は在りやせんぜ。あまり良い気持ちになったからといって気を抜いて私^{アッ}の顔にオナラなんかふっ掛けしないで下さいよ・・・」

と、嬉しそうに笑い声を上げながら元組長の妻の尻周りの除毛をして行くのであった。

明るい照明に照らし上げられた肛門の回りの恥毛を全て丁寧に剃り終えると、陰唇の周りに

残った最後の無駄毛の処理を始めた。

カミソリを当て易いように陰唇の襞を摘んで引っ張りながらカミソリを走らせるが、時々、指先で女芯の奥の方の襞を摘んで大きく開いてその秘奥の中身を覗いたり、後ろの菊座の中心を石鹸を含ませたブラシで擦って、女の反応を楽しむような悪さを続けた。

そのサブの淫猥な悪戯に、羞恥の余り体がカアアッと火照って全身が赤く染まり汗ばむ程体温が上昇した。

「姐さんのここから良い匂いがして来ましたぜ・・・」

と、石鹸の芳香の陰から火照った体温により発し始めた微かに漂う女肉の臭いを敏感に嗅ぎ分け、鼻を女陰に近付けるとクンクンとその牝の臭いを鼻腔に収めた。

晴江の方もサブのこの陰湿な悪戯に耐えられないように小さく悲鳴を上げながら、このような一寸試し五分試しの辱めを何時までも受け続けるくらいなら、いっそ早く剃毛を済まして欲しいと願うようになっていた。

吉原の方もサブをまねて暁美に羞恥の悲鳴を上げさせながら、股間の処理を続けた。

流行の水着を着るため下の毛の処理をしていた暁美の毛量は少なく、剃毛は直ぐに終わってしまっていたが、直ぐには解放せず、剃り上げた後もネチネチといたぶり続けるのであった。ヒィ！と緘口具を嵌められた暁美の口から悲鳴が上がり体を振らせた。

吉原が石鹸の泡を手で股間に塗り込む振りをして、石けん液でツルツルと滑る指先を暁美の後口に滑り込ませたのであった。

「これは、これは失礼しやした。うっかり指が滑ってお嬢のお尻の穴に入ってしまったじゃないですか！」

中指を付け根まで肛門内に突き立てられ身悶える暁美を淫猥な目で見詰め笑いながらシレッと言うのであった。

うっかりと口にするのは裏腹に吉原は根元まで挿入した指を離そうとはせず、きつく指を締め付ける緊縮力を楽しみ、指先で熱い直腸内を掻き回して悲鳴を上げさせ続けるのであった。周囲を取り巻く男達も吉原に中指を深々と突き立てられ狂った様に体をくねらせる暁美の姿を下卑た笑いを浮かべながら見詰めていた。

「お嬢の前の穴は青沼に突かせて処女じゃ無い事は知っておりますが、こちらの穴も青沼に使わせているのでやすかい？」

不潔な器官を不気味な男の指で刺される気味の悪い感触と、更に恋人を愚弄する様な言葉を浴びせられ身悶え続けた。

時間を掛けてネットリと男達に弄ばれながら、無抵抗な母娘の全ての下の毛の処理が終了した。

カメラも局部を嘗め回すようにアップで撮り続け、この猥褻な作業の一部始終を取めた。

屈辱の長い時間が過ぎ、女達は元通り、大きく足を広げた大の字に固定された。

「これは本当に蒸したての肉饅頭のような・・・」

仕上げの蒸したタオルで股間を拭き取られた後の露出した、ふっくらと豊かに突き出した股間の盛り上がりをしげしげと見つめながらサブが呟いた。

作業を全て終えたサブと吉原が、女の股間から身を退かしたので、周囲を取り囲む男女の目には二人の女の股間の佇まいがマザマザと映った。

童女のように飾り毛の無い剥き出しの二人の女の股間には、今まさに爛熟期を迎え、毒々しいまでに開花した婀娜っぽい魅力に満ちた女性自身と、一方、若さ故、弾むような弾力を秘めた豊かに脂肪を載せて盛り上がった丘のような部分から見事に一筋の谷のように鋭く切れ込む魅惑的な割れ目が隠しようも無く曝されていた。

「最後の仕上げをして差し上げましょう・・・」

既に女達の股間は、完全に飾り毛を失い、これ以上剃り上げるものは無くなっていたが、女性に対して限りない残酷性を秘めたサブが淫靡に唇を歪めた。

陰惨な嗜虐者の前に心身共に疲弊し両腕を吊り上げられたままガックリと項垂れていた晴江はこの上何をするつもりなのかとボンヤリとする意識の中でサブの手元を見詰めた。

そんな晴江の様子も気に掛ける事無く、手元に置かれていた電気髭剃り器を手にとると、スイッチを入れた。

ブーンと大きな音を立てて振動する電気カミソリを晴江の無防備な秘裂に押し当てた。

外国製の強力なモーターを内蔵した、激しく振動する大きな髭剃り器を敏感な秘所に押し付けられ、その強い低周波振動に晴江の身体がビクッと痙攣した。

サブは晴江の反応に満足した様にニヤッと笑みを浮かべると、手にした電気カミソリで晴江の秘所を撫で回した。

吉原もサブの真似をして、剥き出しの暁美の秘部を電気カミソリで撫で回し、悲鳴を上げさせ続けた。

裏切り者のサブに意地悪く陰唇を責め立てられながら、この男の残酷性には敵わない！鞭打

ちでも何でも喜んで受けるから、早く淫靡な悪戯を終わって欲しいーと、股間から衝き上げる激しい刺激に身悶えながら思うのであった。

男達の淫靡な責めが終わり、童女のようにされた股間を取り囲む大亜門戸会の男達の前に晒している母娘の姿があった。

虚空に手足を大の字に鎖で固定され、身動きもままならない状態にもかかわらず、少しでも恥ずかしい所を周囲の男達の中から隠そうとするかのように不自由な体をくねらせる母娘の艶めかしい姿を見詰める黄原には、女性としての尊厳も有力な暴力団の頂点に君臨していたという威厳も全て剛沢の力の前に散々に踏み躪られ、野卑な男達の前に全裸像を晒すだけに留まらず、成熟した女として、到底人に見せることが出来ない秘密の場所まで、無理矢理押し広げられて全身を赤く染め羞恥に身悶える母娘の姿から、とうとうこの気位の高い女達を此処まで貶めることが出来たと、股間から痺れる様な快感が突き上げて来るのだった。

男達に混じってこの様子を見詰めていた剛沢の愛人達がプーッと噴き出して、

「ヤーネ！そんな恥ずかしいモノを突き出して。早く仕舞いなさいよ！同じ女として、こっちまで恥ずかしくなって来るわ！」と女達の股間を指差しながら笑い転げた。

「お前達、生まれたての赤ん坊のようになったじゃないか！」とか、

「背中に観音様、股間に弁天様をハッキリと見せてくれるじゃないか！」

とか、哄笑しながら男達も囁し立てた。

男達は目の前に突如現れた、二人の女の剥き身の股間に眼が釘付けになった。

憎い敵方の男達の面前に素っ裸に晒された上、成熟した女性の尊厳をあざ笑うかのように秘所を隠す毛まで奪い去られた屈辱感に、鎖により身動きの出来ないように固定された体を恥ずかしそうに身悶えさせるのであった。

母親の婀娜っぽい、成熟した女の妖しい魔力を醸し出すような妖艶な割れ目と、娘の羞恥に赤く染まった柔らかく盛り上がった股間の柔肉の間に、艶めかしく一筋くっきりと深く通った、少女の様な初々しさを漂わせる割れ目に心を奪われ、ウツトリとするように、しばし鑑賞に浸り、股間を鞭打つことを忘れていた。

お竜参上

突然、地下室の入り口の方から、ドカドカと大きな音がして、続いて男の悲鳴が聞こえた。剥き身に剃り上げられた女達に心を奪われていた男達が、何事かと入り口の方を振り返った。そこには大亜門戸会の若い組員が、着流し姿の女に手を後ろに捻り上げられ、苦しそうに悲鳴を上げていた。

「お前は、お竜じゃないか!？」

組員が女の顔を見て驚いた声を上げた。

お竜の本名は常子と云う地味な名前であったが、右肩から二の腕かけて彫られた青い昇り龍と左肩から二の腕に彫られた赤い降り龍の鮮やかな彫物にちなみ、‘二つ龍のお竜’の名で通っていた。

元は目高組の賭場の管理を任され、‘壺振りお竜’の通名で自らも壺振り役をしていたが、今は後釜に壺振り役を譲り、組長の愛人として囲われていたのだった。

歳はまだ30台半ばに達していないはずであった。

白い瓜実顔をした美貌と成熟した女の持つ色香が全身から立ち昇っていたが、敵陣に単身乗り込むという緊張感も伴い壮絶なまでの艶麗美が漂っていた。

女とは云え、奈和親分が見込んで、危険な鉄火場を任せただけあって、修羅場になった時の度胸も腕っ節もそこらのチンピラには負けないことは、そのスジでは良く知れ渡っていた。以前にも博打で大損した男がお竜を逆恨みして、夜道の薄暗がりの中で待ち伏せし、背後からナイフを持って襲いかかった事があったが、逆に素手のお竜に叩きのめされたという武勇伝が噂に上ったことがあった程だった。

「大亜門戸会の親分さんも随分悪どいやり方をするもんじゃありませんか？」

右手にピストルを構え、剛沢の方に銃口を向けながら言った。

それを見た子分達が、

「引退した壺振りが、今時分、何をのこのこ出て来やがったんだ! テメーの出る幕じゃねーっ!」と、口々に叫びながら、もし親分に引き金を引いたら、この二人も射殺するーとばかりに、立位に固定された全裸の二人の女の乳房にグリグリと銃口を押し付けた。

力一杯押し付けた銃口が暁美の白く豊かな乳房に埋め込まれ、銃身の先端は柔らかな脂肪を包みこんだ乳房の中に姿を消していた。

銃口が乳房にめり込む苦痛と何時指を掛けた引き金を引かれて弾丸が飛び出すかと恐怖感に襲われ、猿轡の下から声にならない悲鳴を上げた。

曉美の悲鳴に気付いたお竜が、ふと囚われた女達の方に視線を送ると、その余りにも無残な姿に目が釘付けとなった。

「女の身になんと、惨いことを・・・」

憎みても余りある敵方の男達の真ん中で、全裸のまま中空に大の字の立位に固定され、両脚を扇の様に左右に大きく広げさせられ、しかも下の毛まで綺麗に剃り上げられてしまい、人に決して見せることの出来ない豊かに成熟した女性の秘裂を隠しようも無く、真一文字に晒け出した組長の妻と娘を発見して思わず呟いた。

そして更に、彼女らの雪の様に白い女体に赤黒く腫れ上がった鞭の跡が無数に刻みつけられていることに気付いた。

傍には鞭を手にしたままの、自分も見知っている目高組のチンピラが、呆然とした表情でお竜の方を見て、立ち尽くしていた。

「お前達！よくも大恩のある大姐やお嬢に対してこんな事が出来たもんだね！」

目高組にいた下っ端組員が、組を裏切り大亜門戸会に混じって、元の親分の妻と娘に対して折檻に加わった事を理解して、怒りを露わにして睨み付けた。

「見下げたもんだよ！お前達はヤクザの風上にも置けないただの屑だよ！」

お竜の憤怒の形相に、裏切り者達は、雷が近くに落ちた様に震え上がり、感電した様に手にしていた鞭を床に落とした。

「お竜！この一件が片付いたら、お前の事も片を付けなければならないと思っていたんだぜ。そっちからわざわざ出張ってくれて、返って好都合でもんだぜ。そんな物騒な物は捨ててこちらに来たらどうでい？ 三人並んで仲良くオコ丸出しにしてやるぜ・・・」

銃口を向けられても剛沢は、怯える様子も無くニヤニヤ笑いながら言った。

「私ゃね、今日は死ぬ気で来たんだよ！テツから電話が在ったのさ！『大亜門戸会の罠に嵌った。悔しい、悔しい、姐さん仇を討ってくれ・・・』て、警察に捕まる間際まで電話口で泣いていたよ。テツの頼み通り、仇は取らせて貰うからね・・・」

手首をねじり上げ、押さえていた男を突き放すと、懐からオイルライターを取り出して火を点けた。

お竜はこれを死に装束と決めたのか、賭場で壺を振っていた時の着慣れた白い^{ひとえ}単衣の着物を鮮やかに着流しにして、腰の帯の周りには無数のダイナマイトをガムテープで貼り付けてい

た。

この大量のダイナマイトに火が着いたら、この地下室など木っ端微塵に吹き飛ばしてしまうだろう。

これには大亜門戸会の組員も容易に手を出せず、膠着状態となった。

黄原はスーツの懐からメモ紙を取り出して、‘クロロフォルムを用意してあるか?’と走り書きすると、横に居る大亜門戸会の組員を肘で突いて、メモ紙を示した。

黄原と並んで立っていたのは、黄原が目高組を裏切って大亜門戸会に鞍替えした時に仲立ちした大亜門戸会の古参幹部の一人であった。

黄原は今回の抗争に当たって色々な事態を想定して、クロロフォルムも用意して置く様に指示していたのであった。

黄原のメモを目にした幹部は、全てを理解した様であったが、緊張した表情で首を大きく縦に振った後、怯えた目をして、お竜の手にする火の点いたライターをそっと指差した。

クロロフォルムでお竜を眠らせようとした時に、間違っ引火して、ダイナマイトが誘爆することを恐れている一と、黄原は直ぐに理解した。

‘大丈夫だ、クロロフォルムなら引火しない’と怯えを解消する様に、メモに書き足した。

‘ありったけのクロロフォルムをお竜の後ろからぶっかける’

と、男の表情を見ながら更に書き加え、男の手にメモ紙を手渡した。

黄原の計画を理解して、男は再び大きく肯いた。

お竜の死角で指示していたが、シーンと静まりかえった異常な緊張下でペンを走らす音がお竜に聞き咎められたのか、背後に不穏な気配を感じた様に、黄原達の方に顔を向けた。

そこに見知った黄原の姿をみとめて、眉根を寄せてちょっと驚いた表情を浮かべたが、次に黄原に向かって蔑むような視線を投げかけながら、

「おや？黄原じゃないか？・・読めたよ・・今回のこの下らない筋書きを書いたのはあんただね？前々から才気ばかり先走った、いけ好かない野郎だと思っていたんだよ。あんただけは生かしくと訳にはいかないからね！」

と、言いながら銃口をクイックイッと動かして、剛沢と並ぶように指示した。

「好きにするがいいさ！」

と、吐き捨てる様に口にすると、黄原は剛沢の方に移動しながら、その組員がそっと抜け出すのを目で確認した。

「全くお前という奴は、極道の風上にも置けない奴だ！さんざん奈和親分の恩を受けながら、裏切って仇で返そうとは・・・」

お竜が黄原を睨み付けながら憎々しく呟いた。

「奈和組長への恩なんか、こればかりも感じていないぜ・・・奴は、赤石の兄貴や青沼の野郎ばかり可愛がって、俺の能力を認めようともせず、馬鹿にしていやがったから、今まで馬鹿にされていた恩を返したまでだ。」

超武闘派とヤクザ世界の中で評価されている目高組の中では、親分も組の雰囲気も黄原のような知性派は重視されず、赤石や青沼のような武闘派が優遇されている状況にすっかり嫌気がさしていたのだった。

「所が、この剛沢のボスは、俺の力を心底認めてくれた。だから俺は剛沢親分の杯を受ける事にしたのさ・・・」

黄原は剛沢の隣に並びながらうそぶいた。

黄原が剛沢の隣に並ぶと、後ろの人混みをかき分けて若い女が進み出て来て、黄原の左腕に絡み付いた。

「お前は、お銀！」

お竜が、思わず眼を見開いて驚いた声を上げた。

お銀の本名は銀子と云うが、お竜が引退した後、後釜として目高組の賭場で‘壺振りお銀’の通名で壺振り役を務めていたのだった。

「お竜姐さん、お久しぶり。その節は、壺の振り方など色々指導頂き有り難うございました・・・でも、悪く思わないでね。私は、ずっと前から黄原の愛人^{あいじん}だったのよ。今度の計画も黄原から教えられて最初から知っていたわ。自分達が罠に掛けられているのも知らずに、真面目ぶって毎日毎日作戦会議なんか開いて・・・私や、可笑しくって笑いを堪えるのに苦労したわよ！」

と、黄原の腕にぶら下がりながら甲高い声で、可笑しそうに喋るのだった。

「それにしても、黄原の読みも大した物ね！私や黄原に言われてお竜姐さんを見張っていたのよ。尾行されているのも気が付かなかった？」

銀子に言われて、非常事態に気が急いで、車を運転している間も背後に気を配る余裕が無かったことをハッと思い出した。

「ここからは、もう逃げられないわよ。表に駐めてあったお竜姐さんの車のタイヤをパンクさせておいたから・・・」

銀子が甲高い声で勝ち誇ったように笑い声を上げた。

黄原も笑いながら銀子に良くやったと褒めた。

これで奈和親分達を救出しても、ここから逃走する手段が封じられたと、お竜が自分の迂闊さほろに臍を嚙んだ。

しかし、この不利な状況に置かれても、自分の車が駄目なら、大亜門戸会の車を奪って逃げるまでだーと、思い直した。

「さあ、そう言うことだ、物騒なダイナマイトなんか片付けて、さっさと素っ裸になって、大姐さん達の仲間に加われ！」

黄原が笑いながらお竜に声を掛けた。

黄原の卑劣な言葉にお竜が憤怒の色を浮かべて睨み付けてきた。

その間に、さっきの幹部ともう一人の組員がクロロホルムの入ったバケツを手にしてジリジリとお竜の背後に迫る様子を、黄原はじっと見ていた。

晴江と暁美がお竜に注意を促すように、猿轡を詰められて声にならない口で、呻くような声を上げた—

異様な気配を背後に察知したお竜は、咄嗟に身を交わし、最初に浴びせられたクロロホルムの一撃は交わしたが、同時にもう一人が横から投げたクロロホルムを上半身にまともに浴びてしまった。

何を！と、言おうとした瞬間、強烈な甘い香りが鼻腔を突き、目の前が突然真っ暗になった。

「様さまは無いな・・・」

意識を失って床に倒れ伏したお竜の周囲に立って、見下ろしながら男達が声を上げた。

「おい、意識を取り戻す前に、素っ裸に剥き上げ、ふん縛ってしまえ！」

剛沢から裸に剥き上げろと指示されて、喜び勇んだ組員が、意識の無いお竜に飛び付いた。

ところが、少し襟に手を掛けたところで、お竜の着物に染みこんだクロロホルムをまともに吸い込んでしまい、まるでお竜の横に添い寝するように倒れ込んでしまった。

この様子に取り囲む組員が爆笑した。

「馬鹿野郎！息を止めて脱がすんだ！」

剛沢が呆れたように怒鳴った。

男達は息を止めて交代で少しずつ、お竜の着物を剥ぎ取っていった。

一人が、クロロフォルムの蒸気の影響が及ばない空気の綺麗な場所で思い切り、肺に空気を溜め込むと、お竜の傍に掛けより、そのまま息を止めながら帯を解き、息が続かなくなると、逃げるようにその場を立ち去り、離れた場所でハアハアと苦しそうに息継ぎした。

交代した男も同様にやはり息を止めながら、白い着物を緩め、また次の男が、お竜の体から着物を剥ぎ取った。

こうした男達の交代作業が続き、とうとう、意識の無いお竜に残されたのは、胸に巻いた白いサラシと緋色の腰巻だけとなっていた。

胸に巻いたサラシを解きほぐし、もうすぐお竜の胸が露出する間際になって、クロロフォルムに濡れた着物を剥ぎ取られ、新鮮な空気に触れる事が出来るようになったため、お竜の意識が蘇った。

ふと気が付くと、敵方の男達が寄って集って自分の着物を剥ぎ取り、今まさに乳房が露わとなる直前であることに、羞恥と恐怖で気が動転した。

思わず、サラシを解く男を突き飛ばし、背後に飛び退いた。

「へへ・・・そんな格好で、どこに行こうと言うのだ？」

男達は、武器も持たず、わずかに腰巻と緩んだサラシを身に付けただけのお竜を舌なめずりして取り囲んだ。

お竜は男達に取り囲まれながら、乳房が露出しないよう緩んだサラシを手で押さえていた。寸鉄も帯びない裸同然の女だと馬鹿にして、坂本という男が不用意にお竜に飛び掛かった。お竜は、ひらりと飛び上がって男の体を避けると、そのまま体をひねり、背中を見せた男の後頭部にハイキックを見舞った。

赤い腰巻の間から白く長い足が現れた瞬間、男の首筋に空手で鍛えた蹴りが一閃した。

堅い踵をまともに頸椎に受けた男は、そのまま気を失って床に倒れ伏して動かなくなった。

「気を付けろ！この女は空手技を使うぞ！」男達に緊張が走った。

超武闘派の組の女に相応しく、お竜も空手と合気道を極め、並の男が相手なら負ける気はしなかった。

お竜を取り囲む男達の数は多いが、今は、この男達を倒して、血路を開かなければならないと覚悟を決めたのだった。

坂本は油断していたからやられたんだと、植木という男が、「俺は坂本のように、いかないぜ！」と、お竜にむしゃぶりついたが、隙だらけの素人流の喧嘩技で飛び込んだため、がら空きの股間をお竜に思い切り蹴り上げられてしまった。

そのまま苦悶の表情を浮かべて床に倒れ込み、口から泡を吹いてピクピクと全身を痙攣させた。

二対一ではどうだと、二人の男が同時に挑んだが、一人の懐に飛び込み、もう一人のパンチからの盾代わりに使うと、そのまま背負い投げに投げ、無様に床に倒れた所をお竜に股間を踏み潰されてしまった。そして息つく間もなくパッと飛び上がると、もう一人のこめかみに踵を見舞った。

今や、お竜にやられた何人もの男が無様に床に倒れて苦痛に呻いていた。

「さあ！怪我をしたいなら掛かっておいで！あそこを蹴り潰されて二度と使いモンにならなくなっても知らないよ！」と、お竜が血走った目で、取り囲む男達を睨み付けた。

そのお竜の鬼気迫る表情に、男達は手出しをすることも出来ず、遠巻きにお竜を取り囲むのであった。

剛沢や剛沢と共に大亜門戸会の基礎を築いた格闘には自信を持つ猛者達は、始めの内は、自分達の部下である若い三下共がどの程度の腕前を持っているか見極める積もりで、剛沢の左右に陣取り、腕組みしながら面白そうに美女とチンピラの格闘を眺めていたが、余りにも自分の手下が不甲斐ない姿を晒すのを見て、堪らず重い腰を上げようとした。

一人の喧嘩慣れた幹部が前に出ようとするのを剛沢は無言で遮り、代わって自分が前に進み出た。

目の前に立ち塞がった剛沢の巨体を目にして、瞬間的にお竜の顔に緊張が走った。

一目で剛沢のずば抜けた格闘能力を見抜いたのだ。

お竜も超武闘派の目高組の中に在って、女だてらに数々の修羅場を潜り抜けて来た女であり、大概の事には、恐怖を覚え怯む事など無かったが、これまで感じたことの無い、まるで凶暴な^{ひぐま}熊のようなオーラを全身から発する、この巨漢に言いようの無い威圧感を感じるのであった。

そして哀しいことに、この大男を倒せる自信は、まるで湧いて来な無かった。

とは言え、兎に角この男を倒さなければ、この窮地から抜け出すことは出来ないと悲壮な覚悟を決めたのだった。

「お前は、玉を蹴るのが好きなようだな？それじゃ蹴ってみろ！」

お竜の前に仁王立ちした剛沢が、ニヤニヤ笑いながら、わざと股間を開いてお竜の蹴りを誘

った。

大胆不敵な誘いであったが、お竜としても他に手は無かった。

この男も他のチンピラのように女だと思って馬鹿にしているのかも知れないと、考えた。

本格的な戦いになる前に、無防備な、金的を蹴り潰してしまえば、勝機は掴めるかも知れないと決心した。

乾坤一擲、鋭い気合いと共に剛沢に蹴りを入れた。

見守る男達には、赤い腰巻の間から一瞬白い脚が伸びて大沢の股間を捉える様子が見えた。

「利かんな・・・」

お竜の脚の甲を股間に受けたまま剛沢がニヤリと笑った。

此奴は化け物だ！ 一瞬お竜の心に冷たい物が走った。

股間を直撃する寸前に、瞬間的に剛沢の硬い太股に挟み込まれ、幾分蹴りの力は減殺されたとは言え、それでも、かなりの力で脚の甲は剛沢の金的を捉えていた感触はあった。

今やお竜は、利き足の右足を剛沢の両太股に捉えられたまま不安定な姿勢で剛沢に対峙していた。

このままでは、反撃に遭うと、必死に体を飛び上がらせて、左足で剛沢の胸を蹴り上げた。空中での不安定な姿勢からの蹴りで、強い蹴りにはならなかったが、それでも剛沢はお竜の右足を捉えていた両脚を開いたので、その隙に背後に飛び退き間合いを取ることが出来た。

「そんなに、優しく撫でられたら痒いぜ・・・ああー、痒い、痒い」

剛沢がお竜に蹴られた胸板をスーツの上からボリボリ搔きながら呟いた。

お竜は、この容易でない男を倒すには、相手から攻撃を受けるリスクは有っても、相手の懐に飛び込んでの渾身の力を込めた蹴りしか無いと観念した。

剛沢との間に十分間合いを取り、息を整え、圧倒的な剛沢の威圧感の前に、ふとすると萎えそうになる自分の気持ちを鼓舞するように気を込めると、気合い諸共、連続する蹴りを剛沢に見舞った。

お竜の空手技のキレは鋭いものがあったが、しかし、喧嘩慣れした剛沢の敵では無かった。

剛沢は、ギリギリのところで蹴りを見切って交わし、そのままお竜に接近して両手を伸ばすと、お竜の弛んだサラシを掴み、思いきり引っ張り上げた。

剛沢に胸のサラシを思い切り引かれたので、お竜の体は放り投げられたように空中に舞い上がり、そのまま独楽のようにくるくると回り、ドタッと床に倒れ落ちた。

剛沢がお竜の体から胸を覆っていたサラシを奪い取ったのだ。

床に尻餅をついたお竜の白い豊満な乳房が露出し、見守る男達から一斉に歓声が上った。

剛沢は取り上げたサラシを子分達の方に投げると、床に腰をついたままのお竜にジリッと接近した。

お竜はさっと立ち上がると、後ろに飛び退いて剛沢との間合いを取った。

乳房を晒す羞恥に囚われていては、この男に勝つことは出来ないと観念したお竜は、手で胸を隠すことを諦め、両手を前に出し、腰を屈めて攻撃の姿勢を取った。

今や赤い腰巻一枚を身に着けるだけで、白く柔らかな乳房をダラリと垂らしながら、まるで猛獣のように両手を前に突き出し攻撃の機会を窺うお竜の姿に鬼気迫る艶然とした姿を見て男達が目を瞠らせた。

鋭い気合いと共に、連続する突きや蹴りを繰り返したが、またしても剛沢は、寸での所で見切り、有効な打撃を与えられずにいた。

剛沢にとって、奈和組長との闘いは、まさに死闘だったので、一瞬も気を抜くことは出来なかったが、お竜との闘いは余裕を持って対応することが出来た。

なるほど、この空手技を持ってすれば、並の男ならなぎ倒すことは出来るかもしれないが、自分にとっては、容易に見切ることが出来るスピードだと剛沢は、闘いながら確信した。

一方、お竜は必死の技を繰り返す続けるが、一発も有効打を与えることが出来ず、息だけが上がり、めっきり動きが悪くなって来たことを感じていた。

お竜の半裸の体は筋肉が発する熱による汗と緊張感から流れる汗でびしょりと濡れ光っていた。

しかし、相対する剛沢は汗も浮かべず、少しも息が上がることなく、冷静にお竜の繰り返す技を全て見切っている・・・お竜は闘いながら絶望的なものを感じていた。

汗で額に張り付いた乱れた前髪をさっと手で掻き上げると、最後の力を振り絞り一縷の思いを込めて剛沢に向かい渾身の蹴りを繰り返した。

お竜が必死の思いで繰り返した乾坤一擲の蹴りもさらりと交わした剛沢は、巨体にも似合わぬ俊敏さでお竜の背後に回ると、腰巻の上からボリュームのある尻を撫で上げた。

その嫌らしいゾロツと尻を撫でられる感触に、戦いの最中ではあったが、羞恥と嫌悪感が走り思わず悲鳴を上げてしまった。

そのお竜が上げた、いかにも女らしい悲鳴に見守る三下連中からドッと笑い声が上がった。

自分の必殺の技が一つも通用しないままに、自分の体は疲労でめっきり動きが悪くなって来た悲痛の思いに目に涙が込み上がって来た。

まるでべそを搔いたような表情を浮かべ、今は狼から逃げ惑う子羊のようになったお竜に、至近距離から半裸の女に悪戯を加える剛沢であった。

その嫌らしい手から逃れる為に、まるでイヤイヤをするように突きや蹴りを繰り返して反撃したが、巧みにお竜の攻撃を封じながら、素早く後に回ったり前から迫っては、腰巻を捲り上げその真っ白い大腿を露わにしたり、白く脂肪を載せた柔らかい肌を撫でたりするのだった。剛沢の嫌らしい手がお竜の裸身に触れる度にお竜は羞恥の悲鳴を上げた。

その猫が鼠をいたぶるような、剛沢の悪ふざけした攻撃が決まる都度、子分達は大声を上げて笑い、喝采を送った。

とうとう、疲労が溜まりすっかり動きが落ちて、がら空きとなった正面からお竜の豊かな両乳房を剛沢は思いきり握り締めた。

憎い敵に二つの乳房を鷲掴みに揉まれるという羞恥に、思わず剛沢の手を振り解き、両手で自分の胸を抱えてしまった。

その隙を逃さず、剛沢は腰巻を支える紐を解きに掛かった。

紐を解いて腰巻を脱がそうとしている剛沢の企みが判って、今度は腰巻の紐に手を掛けた剛沢の手を払い除けようとした。

俊敏にお竜の背後に回った剛沢は背後からお竜の乳房をがっちり鷲掴みにして、楽しそうにグイグイと豊かな胸を搾り上げた。

剛沢の一方的ないたぶりとも言えるべき攻撃に、お竜は泣きそうな表情となり、イヤイヤするように顔を左右に振って、剛沢の手を払い除け、両腕で交差する様に乳房を庇った。

剛沢との圧倒的な力の差の前に戦意を喪失して、すっかり女々しくなったお竜が半泣きのまま胸を庇っている間に、剛沢は易々と腰巻の紐を解き終えたのだった。

支えを失いずり下がった腰巻に足許を捕られバランスを崩したお竜の半分露出した白い豊かな尻めがけて思い切り蹴り上げ、待ち受ける子分達の方に蹴り倒した。

床に倒れ込んだお竜を剛沢の子分達が、喊声を上げて一斉に押さえ込んだ。

圧倒的な数の男達に同時に手足を押さえ込まれては、さすがにお竜としてもどうしようもない。

「それにしても、白くて艶っぽい肌じゃないか！手が吸い付きそうだぜ！」

「こんな柔らかい腕の何処に男達を殴り倒す力だるんだ？」

殆ど全裸に近いお竜の身体を上から押さえ込み、両腕を捻り上げながら、男達が感激した様に叫びあった。

必死の力でジタバタと身悶えるお竜の体を束になって上から押さえ付けながら、

「へへ・・・男勝りの鉄火姐さんのアソコがどんな形をしているか見てやるぜ！」

と一人の男が叫ぶように声を上げると、

別の男が、「これだけ強い姐さんだから、股の間に太い竿を隠し持っているかも知れないぜ！」と、嬉しそうに叫んだ。

調子付いた男達は、抵抗の出来ないお竜の最後に残された腰巻を鷲掴みにした。

下劣な男達により丸裸にされそうになり、アアーッ！イヤァッ！と、お竜が羞恥の悲鳴を上げた。

「おい！聞いたか？アアーン、イヤーン・・・だってよ！」

「おい！お竜！お前も随分女っぽい声を出すようになったじゃないか？」

単身敵方の組に殴り込みをかけ、男達をなぎ倒した強い女の影は身を潜め、ただの弱い女に変身して男達に衣類をむしり取られる羞恥に身悶えるお竜に、男達は溜飲の下がる思いになって、

「こうなったら、潔く素っ裸を晒してしまえ！」

と、ほざくと身悶えるお竜から力尽くで、腰巻を奪い取った。

「おい！この女、腰巻の下にパンティを履いているじゃないか！」

腰巻を剥ぎ取った男が、双臀を覆う小さな白くて薄いショーツを見つけて奇声を上げた。

「賭場では、腰巻の裾から太股をチラチラ見せながら、下にはそんな色気の無い物を履いていたのか？それじゃインチキじゃないか！脱いじゃえ！脱いじゃえ！」と、男達は、はしゃぎながらその薄いナイロン製のショーツに四方から手を掛けると、イヤイヤと腰をくねらせ抵抗するお竜の尻から一気に剥ぎ取った。

最後の身を覆う物を奪われまいとの必死の思いで腰を蠢かせたが、男達の力の前に易々と筆り取られ、薄いショーツの下から肉付きの良い白い双臀が露わになった。

「へへ！お竜姐さんのご開帳で御座い！」

男達から一斉に歓声と笑い声が上がった。

最後の身を守っていた盾を奪い取られ糸纏わぬ全裸とされて、お竜が悲痛な叫び声を上げた。

「何て真っ白でムッチリした尻をしているんだ！」

「柔らかそうな、でかいケツじゃないか！」

「こうして見ると中々良い尻の形をしているぜ！」

お竜の身体を上から押さえ付ける男達が、戦果を確認する様に剥き出しになったお竜の双臀をジロジロとイヤらしい目で眺め回した。

お竜のパンティを引き剥がした男達の間で順送りにその白い小さな衣類が回されていった。最後にお竜のパンティを手にした男が、嫌らしい目付きで、その股間に当たっていた部分を拵げて、しげしげと眺めた後、匂いを嗅ぐような仕草をしてから、ポイツと投げ捨てた。

銀子も混じって、剛沢の女達が剥ぎ取られたばかりのまだ肌の温もりが残る腰巻やパンティを嬉しそうに奪い合った。

男達は束になって、全裸にひん剥かれたお竜の上に馬乗りとなり、肩や両脚をカ一杯コンクリートの床に押し付け、お竜の抵抗を力づくで封じると、思い切りお竜の両腕を背中にこじ上げて、麻縄を持ち出して縛り始めた。

上半身をきつく麻縄で縛り終え、縄尻を男に捕まれたお竜は、最早抵抗することを諦めように項垂れて床に腰を落としていた。

男達は新たに捕らえた獲物を前に、しげしげとその美しい裸身を嘗めるよう眺め回した。特に怒りと羞恥にフルフルと震えるこんもりとした繁みに覆われた股間に、熱い卑猥な視線が容赦なく降り注いだ。

曉美の様なスレンダーなモデル体型ではないが、空手や合気道で鍛えた筋肉が身体全体にバランス良く配置された肉付きの良い中背の身体に、女盛りを迎えて全体に柔らかな脂肪を置いていた。

その吸い付くような白い肌に、上半身を厳しく縛り上げた麻縄が食い込んでいた。

豊かな乳房の上下を縛る縄により、疊惑的な二つの乳房が前に向かって突き出され、激しい格闘を終わったばかりで興奮して吐き出す荒い息により乳房が大きく上下し、その先端のまだあまり色素が沈着していない可憐な乳首がフルフルと揺れていた。

男達は、麻縄に縛り上げられ、抵抗を封じられて床に腰を落とすお竜を取り囲みながら、一体この女らしい体型の何処に男勝りの力を秘めているのかと不思議な物を眺める様に見詰めていた。

そして、くびれた腰から大きく張った尻の方に視線を移し、白く豊かに脂肪を置いたなだら

かなカーブを描く太股の間に視線を注いで漆黒の繁みに覆われた部分を繁々と見詰め、お竜が紛れもなく一人の女で有ったことに納得するのであった。

お竜は、敵方のただ中で全裸に剥がれ、身動きも出来ないように縛り上げられてしまった恐怖と絶望感が込み上がって来て、殺せ！殺せ！と悲鳴のような声で叫び続けていた。

「望み通り殺してやろう。」

剛沢が冷たく言い放ったので、一瞬周囲がシンと静かになった。

身動き出来ないように雁字搦めに縛り上げたお竜を取り囲む男達が、剛沢の突然の宣言に何が始まるのかと緊張して見詰める中で、剛沢がお竜の前に進み出た。

「一本借りるぞ。」

と、剛沢は脱ぎ捨てられたままの着物の帯にガムテープで貼り付けられていたダイナマイトを手にするるとベリベリと剥がした。

異様な緊張感の中で、剛沢が次に何がしようとしているのか？と、居合わせた子分達は互いに顔を見交わした。

お竜爆殺

雪のような白い体をどす黒く変色した麻縄できびしく上半身を縛められた、全裸のお竜が男達に取り囲まれて、事務所の外に連れ出されてきた。

裸でいるには涼し過ぎる、ひんやりした真夜中の空気であったが、死刑場に引き立てられるお竜には寒さを感じる余裕すらなかった。

舌を噛んで自殺するのを防ぐために、お竜の口には赤いゴム製のボール状の緘口具が噛まされ、ボールの左右に取り付けられた二組の革ベルトの一组は鼻梁の両側を縦に通り、お竜の額で一つに合わさり縦に後頭部に回り、もう一组のベルトは頬を水平に締め付けて後頭部に周り、縦と横に通ったベルトは、緩まないように頭の後ろでしっかりと固定されていた。

すっかり観念したように、うな垂れて歩むお竜は、両手を背中で高手小手に麻縄により縛り上げられ、両手を縛り上げて残った縄は胸の前に回り、乳房の上下に二巻き三巻きされ、その豊かな乳房を誇張するように絞り上げられていた。

形良い窪んだ臍回りの柔らかな脂肪を溜めた、雪の様に真っ白な肌の腹や、黒々とした艶の

ある蠱惑的な下腹部の繁みを、周囲を取り囲んで歩む男達はチラチラと盗み見ていた。力自慢の男達を叩きのめした強靱な筋肉は体表を覆った柔らかな脂肪の層に覆われ、成熟した女性らしい体型を形成するぬめやかな柔肌にとす黒い麻縄を深々と食い込ませているお竜の姿をこの目にすると、これが今し方荒くれ男達を叩きのめした強い女とは、信じられない思いになり、柔らかな曲線を描く腰回りや、男の目を恥じて閉じ合わず太股の間や、くぶり上げられた乳房など、お竜が女である証拠を目をパチパチさせながら覗くのであった。

大亜門戸会は本部として、S市郊外の山野に2000坪以上の広大な土地を買いあさり、まるで要塞のように周囲に高い塀を廻らし、塀の内側にも何重にも高い樹木を植えて、中の様子が窺えないように外部と完全に遮断していた。

その広大な敷地の中に、組事務所の建物と、剛沢の自宅と、組員が寝起きする宿舎の3棟がコの字型に配置されていた。

剛沢がお竜の処刑に選んだのは、この3つの建物の中央の芝生の庭であった。

先に出た組員が芝生の地面に3本の杭を打ち込み終わるところだった。

3本の杭は三角形に配置され、1本はお竜の上半身を固定するため地面から大きく飛び出し、2本はお竜の両足を大きく左右に開いて固定するため地面に深く打ち込まれていた。

更にその周りでは、何人かの組員がビデオカメラや照明のセッティングをしていた。

「どうだ？お竜！ 判るか？これからお前は大事な所にダイナマイトを突っ込まれてバラバラに吹き飛ばされて死ぬんだぜ。折角の機会だからビデオに撮っておいて売りさばいてやる！お竜姐さんがバラバラに飛び散る瞬間のビデオだ、好きな連中の中で高く売れること間違い無しだ！」

剛沢がすっかり観念した風情のお竜の青ざめた顔を見詰めながら楽しそうに言った。

「でもね、ボス、折角買った高い業務用ハイビジョンカメラと一緒に壊れてしまうんじゃないんですかい？」

ビデオカメラをセットしていた組員が心配そうに剛沢に聞いた。

「お竜姐さんがバラバラになる決定的瞬間が撮れるんだ。ハイビジョンカメラの2台や3台など惜しくもないさ！ウチは画質の良さを売りにしているんだ、毛筋一本まで綺麗に撮れるハイビジョンカメラで決定的瞬間をバッチリ撮ってやる。」と、きっぱりと言った。

そうしている間にも大亜門戸会の組員達によって、お竜は地面に尻を落とした格好で、両足

を左右の杭に取り付けられた鎖の付いた革製の足枷で縛り付けられ、上半身を少し起こして、顔が正面を向くように背中 of 杭に麻縄で固定されていた。

全ての希望を失い、すっかり諦め切ったお竜は、抵抗の素振りも見せることなく男達によって体を地面に固定されていたのだった。

その様子を3台のビデオカメラが冷徹に捉えていた。

1台は開き切った股間の正面に据えられ、名声を流してきた女渡世人として決して人に見せる事の出来ない股間の秘められたる佇まいを隠しようも無くアップに捉えていた。

正面から明々と照明に照らし上げられ、赤や青の細かな血管が透けて見える白いふくよかな大腿をさらけ出し、裂くように大きく広げられたその股間の奥には、お竜の女性の構造を余す所無く鮮鋭に捉えていた。

もう一台はお竜の顔の表情をアップで捉え、お竜の死を迎える苦悶の表情を冷酷に撮影しようとしていた。

最後の一台は人の字型に地面に固定された全身像を映し出すようにセットされていた。

3台のビデオカメラからはケーブルが長々と伸びて組事務所まで繋がっていた。

爆風の及ばない組事務所の中でモニターしながら、録画するつもりなのだろう。

作業を一通り終えて、地面に仰向けになり両足を大きく広げて固定されたお竜を取り囲む男達が、好奇の視線でお竜を見下ろした。

「お前の付けてきた導火線は短すぎるから、長いのに取り替えてやったぜ。」と、長々とした導火線に取り替えられたダイナマイトをお竜の目の前に見せつけながら剛沢が言った。

大姉達の救出に失敗し、自分まで捕らえられ素っ裸の醜態を晒すことになり、半ば不貞腐れたように諦めの表情を浮かべていたお竜ではあったが、やはり死を目前に迎えて恐怖がこみ上がり、顔を蒼白にして体がブルッと震えた。

「これから、これをお前の大事な所に突っ込んで、導火線に火をつけてやるからな・・・」と、ダイナマイトの先で、お竜の開き切った女体の中心部をポンポンと叩いた。

死の恐怖に怯えたお竜は、その都度まるで高圧電極を押し当てられたようにピクッ、ピクッと体を痙攣させた。

お竜の恐怖に身悶える表情を見て、面白そうに笑いながら剛沢が言った。

「しかし、こんなに干涸らびたマ■■■■では、ダイナマイトを突っ込みようがないな・・・誰か事務所からパイプを持って来い！」

剛沢が羞恥心と恐怖心で固く閉ざされた女陰を指で上下に撫で回しながら組員に命令した。

秘められた割れ口を剛沢の指により撫でられ、お竜の体がピクピクと痙攣し猿轡を嵌められた口からウ、ウッとうめき声が上がった。

大きく開け放たれた股間の中心部を撫で摩りながら、男の世界の中に身を投じ、男勝りの活躍をして来たお竜もやはり女でしか無かったのだと感じた。

そうこうする内に命じられた組員が、段ボール箱一杯にバイブやローターなど諸々の大人のオモチャを持って帰って来た。

「この女に、この世に未練を残さないで済むように、最後の楽しみを与えてやれ！」

と、淫靡な笑みを口元に浮かべて、子分達に命令した。

取り囲む男達は、剛沢の命令に歓声を上げると、我先に段ボール箱に手を突っ込み大小のバイブやローターなど諸々のオモチャを奪い合った。

お竜の周囲を取り囲む男達は、麻縄で括り上げられた乳房を驚掴みにして揉み上げ、大腿や乳首の先に陰具を押し当て、こんもりと茂った春草を押し開けて羞恥の源を露出させると、歓声を上げて女芯の敏感な小豆粒のような肉芽の周りなど敏感な部分にローターや柔らかい筆の先を這わせた。

地面に深く打ち込まれた杭に固定され、身動き付かない全身を憎い敵方の男達から寄って集ってバイブやローターや筆の先や鳥の羽やあるいは素手で撫で回され、お竜は虫酸が走るような嫌悪感で一杯であった。

股間に陣取った男が、開き切った股の間をまさぐり、肉襞を大きく広げて、剥き出しにした肉芽に指を伸ばすと、強く摘み上げ、捻り回した。

突然敏感な部分を思い切り捻り上げられた激痛に、猿轡の下から呻き声を上げて、体を振った。

これでも喰らえ！と、お竜の股間に位置を占めた男が、乱暴に太いバイブを秘奥に突き立てようとしていた。

力尽くで巨大な筒具を押し入れようとする男の暴力の前に、お竜は悲鳴を上げて、抗議するように腰をうねらせてその先端を避けようとした。

男達の力任せの愛撫に、益々体を硬直させていくお竜の姿に見かねて、見物する男達の中から銀子が進み出て、股の間を責め立てる男に代わるように言った。

「ちょっと代わって頂戴！ 男って本当にガサツでやーね。こんな事じゃお竜姐さんも気分を出す所じゃ無いじゃないわ・・・」

代わって股間に位置を占めると、上半身を硬く縛められ、両脚を大きく扇の様に広げた無防

備な体勢のお竜の身体にそっと指を伸ばした。

これまで信用して目を掛けて来た女が自分の開け広げられた股間の前に腰を落とした時、お竜は堪えがたい羞恥とゾッとする様な恐怖を感じた。

夕闇の中でぼーっと浮かぶ白い貌の中に紅く塗られた唇がくつきりとお竜の目に映った。

銀子が目高組に来た時に、自分が身請け人同然になってやって、賭場での作法や壺振りの技などを手取り足取り指導して上げて来たのに、その信用していた女から、辱めを受ける悔しさと、裏切り者の目に裸身を晒す羞恥が胸にグッと込み上げて来て、銀子の指が太股に触れた途端ビクッと股間を収縮させた。

その恥じらいを含んだ様なお竜の動きに何かの手ごたえを得たのか、ニヤッと口の端に笑みを浮かべると、「心配しなくても良いのよ・・・これからお竜姐さんにこれまでのお礼をするつもりで素敵なお気分にしてあげるから、ノビノビと太股を広げていけば良いのよ・・・」と、笑いながら自分より年上の鉄火女に声を掛けるのであった。

そんな風に口ではお竜の心を弄びながら、滑らかに指先を這わせ、女ならではの女の快感の壺を知り尽くしていると云う様に、優しく巧みな愛撫を開始し始めたのだった。

「今までお竜姐さんには、本当に世話になったわね・・・これから死んで行くお竜姐さんに、この世に未練を残さなくても良いように、たっぷりとお楽しみさせてあげるわね・・・」

頬に卑猥な笑みを浮かべて、指先でお竜の太股や股間に優しく愛撫を加えながら、恐怖の色をたたえる目をじっと見詰め返して、静かに話し掛けた後、その赤い唇をお竜の柔らかい下腹に這わせ始めた。

同性から体をまさぐられた経験の無いお竜は、ましてや自分たちを裏切り、組を潰すのに一役買った裏切り者の愛人から愛撫を受けることに、激しい嫌悪感を覚え、銀子の良く動く指先を拒絶するように股間を振った。

しかし、同性ならではの女の弱点を知り尽くした銀子の巧みな指使いと、口唇による愛撫に、次第にお竜の奥底に眠る女の本能が掻き立てられ始めるのを感じ始めた。

女が最も感じる場所を知り尽くしている銀子が、繊細な指使いでお竜の柔らかな肌を撫でる度に、まるで鳥肌が立つような鋭い刺激がお竜の心臓を襲った。

それは、奈和親分に抱かれた時のような圧倒的な男の精力に翻弄され、それに身体が反応する様な一方的な刺激では無く、お竜という女の胎内深く秘められていた女の情念を目覚めさせる様な、これまで味わった事の無い鋭い快美感を伴った刺激であった。

まるで、銀子の指先には何か不可思議な魔力が潜んでいるかのように、その指先の動き一つ

一つがズグズキとするような妖しげな快美感をお竜の体にも与え続けた。

銀子は、お竜の敏感な花園を責めながら、周りに陣取ってじっと銀子に責められるお竜の姿を見詰める男達に、両乳房や太股を愛撫するように指示を送った。

銀子の許可を得て男達は、銀子に指示された持ち場に陣取った。

銀子の指先と口唇による巧妙な愛撫に加え、銀子の適切な指示を受け、繊細な女体を柔らかく揉みほぐす様に、ぐっと旨くなった性感帯への愛撫により、更にお竜の女の本能を目覚めさせようとした。

圧倒的な男達の数により全身の性感帯を隈無く責め立てられ、これまで奈和組長から幾度も女の喜びを教えられて来た熟れた女体は、心を裏切り始め、体に次第に変化が起き始めていた。

青ざめていた全身に血の気が蘇り、激しい血流により体温が上昇し、全身が紅潮し始めていた。

死の恐怖で硬直していた顔も赤みが差し、むずかるように眉をゆがめ、鼻の奥から甘い声を上げるようになって来た。

銀子の魔力にも似た絶妙の愛撫と、銀子に加勢した男達により全身に加えられる愛撫により、いまやお竜は正常な神経を失いつつあり、その押し寄せる快感にむずかるように体をくねくねと蠢かせていた。

これまで自分でも気が付かなかった胎内深く眠り続けていた女体の本性を居並ぶ男達の前に無理やり引きずり出されるのでは無いかという恐怖を覚えイヤイヤするように体をビクビクと蠢かせた。

両側からお竜の柔らかな乳房を揉み上げていた男達は、お竜から立ち昇り始めた、甘い女の体臭に魅了されたように、益々責め手を激しくするのであった。

ゾクッとするような快感が突然、お竜の股間から脳天に突き上げた。

顔を擡げると、両脚を大きく左右に広げたまま固定され、隠しようも無く大きく開いた股間に銀子が顔を埋めている様子が目に入った。

銀子はお竜の股間に顔を押し付けるように近付け、舌を延ばすと女の肉の谷間に沿って上下に舌を動かしていた。

寄りにも寄って、この裏切り者の女に女芯を嘗められることに、ゾツとするような汚辱感が込み上げて、来て思わず腰を動かして、その舌先を避けようとしたが、銀子はそうはさせじと両の太股を抱え込み、まるでむずかる子をあやすように優しく舌先で愛撫を続けた。

舌先を巧みに使用して、たっぷり脂肪を含んだ柔らかな左右の肉の丘を押し分け、その中心部を包む複雑な形をした薄い襞を優しく搔き分け、何時の間にか女の最も深い孔の周囲に舌先を匍わせていた。

最初は不快感でギュッと眉間に皺を寄せて、屈辱に堪えていたお竜であったが、その魔性が籠もっているのでは無いかと疑いたくなるような銀子の巧みな舌捌きに、何時しか臉を薄く閉じ、下腹から込み上げる肉感に浸り始めたように見られた。

器用に舌を使って、剥き上げた木の芽を、舌先でツンツンと刺激する度に、お竜の身体がビクビクと痙攣した。

口に堅く嵌められた猿轡により、悲鳴を完全に封じられていたが、もし猿轡が無ければ快感に喘ぎ、女らしい悲鳴を男達の耳に聞かせていたことだろう。

銀子は、お竜の股間に顔を埋め舌を匍わせながら、開け放たれて肉の洞窟の奥から、後から後から、甘い女の蜜が湧き出して来たことを舌先に感じていた。

この様子は余す所無くビデオに収められて行った。

敵方に寝返った憎い女と無数の敵方の男達に全身の性感帯を責め立てられ、無理矢理女の肉欲を呼び覚まされ搔き立てられたお竜は、どうせこのまま死んで行くなら、剛沢の言うように最後に女の喜びを骨身に染みるまで味わって死んで行くのも良いのでは無いかと、捨て鉢な気持ちになって来ていた。

「どう、男達に寄って集ってこんなに良い気分させて貰って、男勝りのお竜姐さんで通っていたけど、やはり自分が女だったって、今更思い返しているんじゃないの？」

銀子が指先で股間の愛撫を続けながら、冷たい笑みを浮かべて問い掛けた。

銀子が細かく動かす指先により開かれた華洞の奥から熱い女の樹液が止め処なく流れ出していた。

銀子達によって快樂の壺を押し開かれ、止め処なく昂揚した女体は、熱く火照り、自分の意識を裏切って物欲しげに淫液を滴らせている状況にふと気付いて、男達に交じって白刃の中を生きて来た鉄火女の自分も、銀子の言うようにただの女だったのだーと今更ながら思い出されて来た。

そして、女体の中心部から狂おしく昇り来る快美感の中で、この惨めな姿をビデオに納められ、どうせ死後も自分の恥ずかしい姿は、裏世界の好色家の晒し者になるだけなのだから、体面を繕っても仕方ないーと、猥褻な責めをまともに受けて立つ気分になっていた。

猿轡を嚙まされている為、言葉を発する事は封じられているが、今は誰はばかることなく鼻を鳴らし、喉の奥から嬌声を発するようになったお竜を剛沢は頼もしく見つめ、これで良いビデオが撮れそうだと内心ほくそ笑んだ。

「ウヒョー、凄いじゃないか！壺の奥からだらだら嬉しそうに涎を垂れ流しやがってよー。そんなに良いのかい？賭場ではこの壺の中にイカサマ賽を忍ばせていたんじゃないか？」銀子に責められ、今は激しく愛液を吐出させるお竜の股間を発見して男達が歓声を上げた。

「中にイカサマ賽を隠してないか良く調べてやれ！」と、男達が銀子に声援を送った。頃は良しと見た銀子が、愛液を次々と送らせる肉洞に細いしなやかな指を差し入れ、性本能に煽られて蠢めく内部をまさぐった。

その瞬間、お竜は縛り上げられた体をビクッと痙攣させた。

二本の指で熱くたぎったお竜の極上の内部に充分に指技を駆使した銀子は、次に段ボール箱の中から細身のバイブを取り出した。

そして、お竜の花園をバイブの先で撫で回して振動により周辺を愛撫してから、赤く充血し柔らかく開いた肉洞にゆっくりと沈み込ませ行った。

銀子の魔性の指先で肉洞内を搔き回され、昇りに昇らされて、心臓は早鐘のように響き、まるで靄がかかったように何も分からなくなっていたお竜であったが、更にその快美感を鋭く突き上げるように、銀子の手にした筒具が熟れた秘肉を押し開いてズブズブと内部に侵入して来た。

「どう？いいでしょ？いいって言いなさい・・・」

銀子が巧みにバイブを操作しながらお竜の目を見つめて聞いた。

堪えようにも内から込み上げる圧倒的な力で理性を押しえ付けられ、熱く燃え上がる本能に煽られたお竜は、股間から振動とともに沸き上がる得体の知れない何かに突き動かされて、眉を顰めて、ベソをかいたような潤んだ瞳で銀子の方を見詰めながら、猿轡を詰められた顔をウンウンと振るのであった。

裏切り者の銀子の手掛かり、憎い黄原や剛沢や敵方の男達の見守る中で絶頂を極め、落下微塵の姿を晒すことは耐え難い屈辱であったが、最早自力では止める事が出来なくなった暴走を始めた肉欲は、お竜の心を裏切り、激しく絶頂を迎えることを渴望し始めていた。

ダイナマイトによる爆殺という凄まじい姿をビデオに撮られ、死に恥を晒して行く自分にとって、これが生きていた最後の最後に晒す生き恥と、観念して絶頂に向かって体がまっしぐらに動き出そうとしていた。

心臓は最高潮に高鳴り、吐出された熱い血流は、秘部を充血させて、本能の命ずるままに挿入されたバイブを夢中で食い絞めていることが意識できたが、一方、頭は霞がかかったように混沌とし、貧血寸前のように今にも意識が飛びそうであった。

上気した顔に薄く汗を浮かべ、忙しげに息を吐き、苦しげに眉根を寄せるお竜の顔をじっと観察していた銀子は、「どうしたの？もうイキそうなの？」と、唇の端に笑み浮かべて静かに問い掛けた。

耳元で優しく囁くような銀子の言葉につられたように、恥も外聞も投げ捨てたように最後の瞬間を希求して鼻を鳴らして必死に頷くお竜であった。

「お竜姐さんともあろう人が、こんな細いバイブで昇天しては、後でビデオを見る人が、がっかりしてしまうわね・・・」

と、全身を悶えさせ、絶頂を間近に迎えたお竜の女の香りを立ち昇らせる湯気の立つような華洞から、快感を煽り立てていた性具をゆっくり抜き去った。

敵方の男達の目に醜態を晒すという悲しい諦めをし、もう少しで絶頂を迎えるという間際で、バイブを引き抜かれたお竜が恨めしそうな目で銀子を見つめた。

「そんなにガツガツしないで・・・ お竜姐さんには、お竜姐さんの貫禄にあった物で往生を遂げさせて上げるわ。」

お竜がイケそうでイケなかったもどかしさに身をよじる様子を可笑しそうに眺めながら言うと、箱の中に手を突っ込み、ガサガサと掻き回して探しながら、

「お竜姐さんの持って来たダイナマイトは直径4センチもあるのよ。これぐらいの物で通しを良くしておかないとね・・・」

と、直径5センチ位ありそうな極太バイブを手を取った。

「これで極楽往生させて上げるから、今生の別れにしっかりと楽しむのよ。」

と、周囲に細かいブツブツの生えた野太いバイブをお竜の鼻先に見せつけながら言った。

お竜は目に涙を一杯に浮かべて、自分にこの世で最後の快感を与えるであろう、その淫猥な振動を続ける醜怪で巨大な器具を潤んだ目で見つめながら、憑かれた様にウンウンと肯いた。

「ちょっと大きすぎるかな？まあ、奈和親分のイチモツを何時も腹に収めていたお竜姐さんの貫禄ならこれ位の物くらい易々と呑み込むわね・・・」と、ブツブツ言いながらバイブの先端をすっかり濡れそぼり、可憐な花卉を外部に向かって開き切って甘美な果汁に満たされたその蠱惑的な内部を覗かせる、今や準備のすっかり整った秘孔に押し当てると、お竜の肉の

抵抗を楽しむかのように力を込めてズブズブと体内に押し入れた。

そのバイブの巨大さは、かつてお竜が経験した事も無い様な太さで有ったので、メリメリと音を立てて秘肉を押し広げる感触が脳髄にまで響いたが、性感に押し上げられまともな意識を失いそうな今のお竜に取っては、無理矢理体内に押し入って来る、その凶暴なまでの苦痛も甘美な快感と表裏の関係となっていた。

周囲を取り囲んで銀子の作業を瞬きもせず見守る男達の目に、太いバイブにより秘部を飾る褌も伸びきり、無残にも肉孔が目一杯に押し広げられている様子が在り在りと映った。

お竜は苦しげに眉根を寄せて、自分からも銀子の作業を手伝おうとするかの様に腰を柔らかく振り、喉の奥からハアハアと喘ぎ声を上げた。

バイブの先端が子宮口を突き上げ、根本まで股間に埋没した事を確認してから、バイブの振動を最大にしてスイッチを入れた。

その瞬間お竜は、ウツと声を上げると、電気に打たれたように体を仰け反らせ、目が裏返り、苦痛とも快感とも分からない喜悦の表情を浮かべたまま、身体を硬直させた。

「ハハハ・流石のお竜姐さんも銀子の手管の前で無理矢理往生させられたぜ！」

全身を石の様に硬直させながらも、秘具を咥え込んだ部分はブルブルと痙攣させて凄まじい絶頂の様を晒すお竜を取り囲んで男達から笑い声が上がった。

快楽の頂上まで一機にお竜の事を押し上げた銀子は、お竜の硬直が次第に解れてくるのを確認しながら、柔らかく筒具を操作して、一旦燃え上がった炎を消さない様に責め続けた。

銀子の技巧により無残にも快楽源を破られ、女の弱さを露呈してしまったお竜は、銀子の絶妙なテクニックの前に最早堪えることも出来ず、すねる様に腰をモジモジとさせながら甘美な啜り泣きを漏らしていた。

異常な状況下で最初の絶頂を極めさせられた後も、銀子のツボを得た執拗な後技により、最初は強張っていた筋肉もすっかり弛緩したのを見届けてから、銀子は傍で涎を垂らさんばかりに見ていた大亜門戸会の男に持ち場を譲った。

男は嬉しそうにバイブの端を握り締めると目を血走らせて責め立てた。

銀子によりすっかりと開いた女体は羞恥や嫌悪を忘れたように悶え狂った。

その後、何人もの男が、奇声を上げてお竜に群がり、お竜の反応を面白がりながら、入れ替わり立ち替わり、様々な器具を突き立て、出し入れしては、お竜の女の情念を煽り立て続けた。

「ほらほら！又イキそうじゃないか？遠慮せずにどんどんイッたらどうだ！」

卑猥な形状をした筒具を手にした男が、猛烈な速さでお竜の秘所を突き立てながら、笑い声を上げ、叫ぶ様に言った。

猿轡を嵌められ言葉を発することを封じられていたお竜は、カッと目を見開き、ウーッ！ウーッ！と悲痛な叫び声を上げて、激しく汗塗れの顔を左右に振り立てていたが、荒々しい男の力の前に敢え無く屈して、熱い飛沫を男の手にする太い責め具に浴びせかけて、身体を仰け反らした。

「へへ・・・又タイキやがったぜ！」

最初に銀子により快樂源を衝き破られて以来、連続して絶頂を極めさせられ、押し止める事も出来なくなった様に女体の深奥から後から後から襲い来る、激しい肉体の疼きにビクビクと身体を痙攣させ続けるお竜を見下ろし、卑猥な笑い声を上げた。

「じゃんじゃんイクじゃないか！おい！これで何回目だよ？」

「へっ！全く好きな女だぜ！」

「二つ龍のお竜姐さんも形無しじゃないか！」

「偉そうに清まし込んで壺を振っていたのはどこの誰だったんだ？」

お竜を取り囲む男達は、鉄火女としての男勝りの強い外見がすっかり影を潜め、心身共に肉欲に占領されたかの様に全身を紅潮させて、のたうち回るお竜を卑猥な目で見詰めるのだった。

「次から次から、汐を噴き出しやがってよ！そんなに良かったのかい？」

張り型を肉奥に含んで、ガッシリと喰い絞めたまま、赤く充血した秘肉の狭間から、サラサラと愛液を流し続けるお竜の姿を見て笑い声を上げるのだった。

野卑な男達の前で何度も何度も無理矢理絶頂を極めさせられ、その都度、男達の嘲笑を浴びせ続けられ、ぐったりとしたお竜を見下ろしながら、

「これだけ楽しませて貰ったら、もうこの世に未練は無いだろう？」

と、剛沢が冷たく言い放った。

剛沢がゆっくりと背くのを見て、ダイナマイトを手にした子分達が喜び勇んでお竜の股間の前に立った。

赤や青の細い血管が浮いて見える透明感のある二つの白い太股の間に鬱蒼と繁茂した陰毛

を搔き分けるように左右に押し広げると、散々男達に陰具を突き立てられ、いまだ愛液を垂れ流し続ける、ポツカリと口を上げたままの充血した秘孔が明るい照明に照らし上げられ露わになった。

お竜の流した大量の随喜の涙でビッショリと潤ったままの柔らかな褻を指先で摘んで左右に大きく広げると、もう一人の男が、その中心部に筒状のダイナマイトを挿入しようとした。ダイナマイトの直径は4センチもあったが、長時間野太い張り型に責め続けられ、ポツカリと大きく口を開いたままの状態のお竜の肉洞には、抵抗無く太い円柱形状の物がすりと入り、導火線の取り付け部を僅かに表に出すだけで、その姿をほとんど体内に没してしまっただけで、「ビデオにして売るには、もう少しダイナマイトが突き立っている様子が判る方が良いな・・・」

お竜の股間に埋没したダイナマイトの筒を見つめながら、顎に手を当てて剛沢が考え込んでいた。

「この毛が邪魔だな。この立派な毛に隠れてダイナマイトが良く見えない・・・」と、剛沢が呟いた。

確かにお竜の下の毛は、晴江や暁美に比べると鬱蒼としており、平均的な女よりも多毛の方だろう。

その黒々とした豊富な毛量により、秘裂を大きく左右に押し開き挿入したダイナマイトを覆い隠し、僅かにその一部しか見えなかった。

その呟きを聞いた子分が、早速カミソリを持って来ましようと言うのを、剛沢は制して、「お竜姐さんのここを剥き出しにするのに、カミソリでは手緩いな・・・確か事務所に建材用のガムテープが在ったはずだ、取って来い」と、傍らの子分に命じた。

暫くして、子分が強い粘着力を持つ太い建材用ガムテープを持って帰って来た。

それを受け取ると剛沢は、分厚いゴムで出来たガムテープをベリッと20センチ程引き出してパツカリと開け放たれた股間にぴったりと押し付けた。

ガムテープがお竜の飾り毛と充分密着したことを確認してから、力一杯股間から引き剥がした。

その激痛にお竜の悲鳴が上がった。

強力な粘着力を持ったガムテープの粘着面には無数の毛が張り付いており、股間の毛量は一気に減少していた。

剛沢は無言で、ガムテープを横に居た子分に手渡した。

嬉々としてガムテープを受け取った子分も剛沢のまねをして、ガムテープをお竜の股間に押し付け、力一杯剥ぎ取った。

再び激痛に身悶えるお竜の姿があった。

ガムテープは、次々に子分達にリレーされ、その都度お竜の股間はみるみる地肌が露わとなっていた。

ガムテープを手に涎を垂らさんばかりの喜色の笑みを浮かべ、淫猥な目付きで、何か卑猥な言葉を口走りながら開き切ったお竜の股間に向かう三下達の姿に、お竜は苦痛の涙を浮かべた目でイヤイヤとするように首を振った。

お竜の顎を手で掴み、激痛に涙ぐむお竜を見つめながら、

「もうすぐ、腹の中にダイナマイトを仕込まれて、股の間から引き裂かれて、内臓をまき散らして死んで行く身じゃないか。これぐらい痛くも痒くも無いだろう？」と、剛沢が冷酷に言い放ち、お竜の目尻から流れ出た涙を指先ですくうと、その涙に濡れた指先を自分の口に持って行ってお竜の敗北の涙の味を味わった。

「一本残らず綺麗に抜き取りました。」と、子分が剛沢に報告した。

さっきまでお竜の股間を覆っていた、濃密な繁みはすっかり消え去り、こんもりとした股間の盛り上がり、その下から始まる女の割れ目が、隠す物無く生々しく露出していた。

強引に毛を引き抜かれたため、周囲の皮膚が赤く腫れ上がっている様子が痛々しかった。

満足げに剛沢が頷くのを確認して、子分がお竜の肉洞に再びダイナマイトを突き立てた。

男達の手により散々弄ばれたその箇所は未だ痺れた様にうっすらと柔らかな雌蕊を表に向かって開いており、その内部はお竜の芯奥よりもたらされた粘液で満たされていたため抵抗無く内部に滑り込んだ。

自分を真っ二つに引き裂く兇器を膣内奥深くに挿入される恐怖にお竜は激しく首を振りたてたが、幾度も絶頂を極めさせられた下半身は痺れたままで鉛の様に重く男達に対して抵抗する事が出来なかった。

童女のようにむき出しになった割れ目の中心を押し開くように、太い灰色の筒が女芯の肉壁に根元まで包み込まれ、まるで張り型の握り部分のように先端が陰部から飛び出している光景が卑猥に映った。

膣の圧力によりダイナマイトが押し出されないようにダイナマイトの端を麻縄で縛り、その縄をお竜の腰に回して、まるで縄の禪をかけるような形に縛り上げた。

しっかりと縛り上げ縄止めして、抜け落ちないことを確認すると、

「これでお前とも、お別れだが、これも俺たちに散々楯突きやがった罰だぜ。」と、剛沢がお竜を残酷な目で睨み据えながら冷たく言い放った。

残酷な刑の執行を前にして、お竜が恐怖に震えて、体を悶えさせ、ボール状の猿轡を嵌められた口で言葉にならない悲鳴を上げた。

「何も心配する事は無いんだぜ・・・」

死の恐怖に震えるお竜の姿に、口の端に冷酷な笑みを浮かべながら剛沢が続けた。

「俺は昔山奥の工事現場で発破を何度もやったことがあるから、そこらの資格だけの発破技士よりよっぽど上手いぜ。確実にお前の股座でダイナマイトを爆発させて、バラバラにしてやるからな！」と、可笑しそうに腹を抱えて大笑いをするのであった。

「折角だからお前の持って来たライターで導火線に火を点けてやろう・・・」

お竜の見つめる前で、お竜の持っていたライターを使い、長い導火線の端に火を点けた。

導火線を伝って火が走り始めた事をお竜の目に見せ付けると、

「このライターはお前の形見代わりに貰っていくぜ。」と、スーツのポケットにライターをねじ込んだ。

導火線を伝って、まるでネズミが走るように炎が自分の方に近づくのを見て、全てを諦めたかのように、身悶えが止まり、ガクッと体が崩れた。

剛沢は、絶望感に打ち拉がれたように静かになったお竜の上に覆い被さるように両手を突いて身を屈めると、お竜の唾える唾液に濡れたボール状の猿轡にそっと唇を押し当てた。

恐怖に額にビッショリ冷たい汗を浮かべ、歯がガクガクと細かく震えるのが、硬質のゴムのボールを通して剛沢の唇に伝わって来た。

舌を突き出して、お竜の唾液に濡れたボールから絡め取り、お竜に猿轡越しのキスを送った。

死の恐怖の中でも、剛沢に自分の唾液を吸われる嫌悪感に、お竜が顔を蹙めてイヤイヤする様に首を捻った。

「お前は、俺の事を生かしちゃおかないと言ってたが、先に死ぬのはお前の方だったな。」

黄原がお竜を見下ろしながら冷たく言葉を投げた。

黄原の左手にぶら下がるように抱き付いている銀子が、満面に笑みを浮かべて、バイバイと言うように手を振った。

目高組を滅ぼした裏切り者の黄原や銀子に侮辱されて悔しさに身悶えするお竜であった。

「それじゃ、俺たちは事務所の中で、お前がバラバラになるところをモニターから見ているからな。」

と、一言言い残すと、剛沢達一行はゾロゾロと事務所の方に戻って行った。

銀子や何人もの男達から立て続けに陵辱されて淫靡な悩乱の中にあつた意識も今はすっかりと醒め、真っ暗闇の中で撮影用の照明に煌々と照らされて浮き上がった芝生の庭の真ん中に一人残され、物音一つ聞こえない静寂な夜の闇の中で、導火線を燃して、炎が自分に近づいて来る音だけが、耳にハッキリと聞こえて来る。

首をもたげると、一杯に広げられた股の間から生え出した葛籠つづらに折り曲げられた長い導火線を伝って、まるで鼠花火の様な赤い炎が徐々に自分の方に近づいて来る様子が目に焼き付いた。

このままではダイナマイトに火が移り、膣内に埋め込まれたダイナマイトが炸裂するという恐怖感がパニックとなり襲いかかった。

冷や汗をだらだらと流し、必死に手足を藻掻くが、がっしりと杭に固定された両足の革製の足枷や上体を縛る麻縄は緩むことは無かった。

恐怖感と絶望感で狂ったように体を身悶えさせたが、その努力をあざ笑うかのように速度を増した炎はまっしぐらに自分の方に進み続けていた。

死の恐怖を宿した目に導火線の残りも後わずかになった様子がまざまざと映った。

ダイナマイトの爆発する大音響と共に、血飛沫を上げて、股間を裂いて両脚が天に向かって吹き飛び、引き裂かれた下腹から腸はらわたが宙に舞う壮絶な姿が頭の中に現れた。

絶体絶命の恐怖の中で、夜空を切り裂くような大きな悲鳴を上げると、最期の瞬間に向かって体を硬直させた。

ところが、導火線から炎がダイナマイトに移る所になって、ぶすぶすと音を立てて導火線を伝わって来た炎が消えてしまった。

再び周囲は静寂な夜の闇に包まれた。

何故かダイナマイトは爆発せず、自分がまだ生きている事を知ったお竜は、急にガタガタと震え出し、全身から力が抜け落ちていった。

緊張を失った股の間から、知らない内に、チョロチョロと小水が流れ始めていた。

それは、恐怖の果ての全身脱力により、尿道の閉塞能力が消失してしまった為の失禁であったため、膀胱の収縮を伴う強い圧力の放尿とならず、何時までも力無く流れ続けた。

そして、一端始まった失禁を止める力も気力すらも最早残っておらず、膀胱が空になるまで、股間を生暖かい水が流れ続けた。

その時、事務所の方から男達の笑い声が聞こえて来た。

笑い声は段々と大きくなり、お竜の方に近づいて来るのが判った。

「どうだ、怖かったか？これで大亜門戸会の恐ろしさが骨身に染みて判ったろう？」と、剛沢がお竜の青ざめた顔を見つめながら言った。

お竜の大きく見開かれた目は涙を浮かべ、恐怖の色をたたえていることを確認した。

「これは、粘土を詰めただけの偽物だ！どうだ、良くできているだろう？」と、お流の股間に食い込んだままの偽のダイナマイトに手を伸ばした。

ダイナマイトが、まだ暖かさを留めるお流の小水に濡れている事に気付いて、

「お竜！お前、恐怖のあまり、小便をちびったのか？」と、腹を抱えて大声で笑い始めた。股間や周囲の地面が、お竜の小便で濡れている様子に気付いた男達は、‘壺振りお竜’の名前はやめて、‘小便ちびりのお竜’にしたらどうだとか、いや‘お漏らしお竜’の方がカッコいいとか勝手なことをほざき合いながら、その様子を指差して、互いに肩を叩きながら笑い会った。

子分たちは、偽ダイナマイトを括っていた腰の麻縄を解き、スポッと音をさせて乱暴にお竜の股間から抜き取った。

弛緩した肉洞が開き切ったままになっており、照明に照らされて赤黒い内部をあからさまに覗かせていた。

そして、厳しく口を塞いでいた猿轡も外されたが、自由になった口は死の恐怖の名残で、歯をカチカチ鳴らすばかりで声を出すことも出来なかった。

両手を高手小手に縛り上げていた麻縄も解かれ、両脚を引き裂くように押し広げていた足枷も外されたが、自由になった腕で胸を隠す気力も最早完全に消失したのか、脚にも力が入らず閉じ合わせることも出来ない様子であった。

男勝りの女侠客の役を演じるために、これまで常に身に纏ってきた強い女としての鎧が剛沢の奸計の前に粉々に砕け散り、その硬い鎧の中に隠されていた弱い生身の女の姿がさらけ出された様に感じられた。

剛沢がお竜を立たせようとしたが、全身の力が抜けており、体がグニャグニャとして立つことも出来ない様子であった。

「音に聞こえた、お竜姐さんともあろうものが、これぐらいのことで腰を抜かしたのか？」せせら笑いながら言うと、お竜の手を掴んで引っ張り上げ、腰を屈めて自分の背中に背負い上げた。

「仕方がねえな、俺がおんぶしてやるよ。」

と、お竜を背負って立ち上がった。

敵方の人間に自分の無防備な背を見せることは危険であるが、剛沢には精神的に完全に敗北してしまった今のお竜には最早反撃の気力も残されていないことを見て取っていた。

まるで親が幼い自分の娘をおんぶするように、黒スーツ姿の剛沢の広い背中に、青白いお竜の全裸の体が背負われた姿を見て、「ボス、あまり見られた姿じゃありませんね」と、子分がからかった。

「馬鹿野郎、男と云う者は何時でもこうやって、女に優しくしてやるもんだ」

と、真顔で子分のからかいに切り返した。

剛沢の背でお竜は、まだ恐怖の余韻で体を細かく震わせ、涙を流してしゃくり続けていた。そして、緊張を失ったままの股間からは、まだ僅かずつ小水が滴り続けており、剛沢のスーツの背に黒い染みを広げて行ったが、剛沢は背中から伝わって来る暖かい湿り気を気にする素振りも見せず、お竜を背負って歩き続けた。

こうして、お竜は剛沢に背負われて、更なる虐待の待ち受ける拷問室に向かって連れられるのだった。

東の空が次第に白み始め、その長かった裏切りの夜は、ようやく明けようとしていた。しかし、女達を待ち受ける汚辱と苦痛に満ちた苦難は終わることは無く、昇り始めた灼熱の太陽の様に益々激しく責め苛む事になるのであった・・・

屈服

救援に駆け付けたお竜が逆に剛沢に捕らえられ、着ている物を全て剥ぎ取られて、素っ裸の上から雁字搦めに縄で縛り上げられ、この地下室から連れ去られてから暫く経とうとしていた。

自分達を取り囲みイヤらしい目で母娘の鞭打ちを見ていた男達も全て、お竜と共に居なくなり、地下室には晴江と暁美だけが残されていた。

二人とも猿轡は外されていたが、大の字に鎖で固定されて、股間の飾り毛も剃り上げられて、恥ずかしい箇所を赤ら様にさらけ出したままの姿であった。

さっきまで気丈な姿を見せていた娘ではあったが、時間が経つにつれ段々とその強い意志を

失って、絶望感を覗かせ始めた様子を覗いて、娘を励まそうと声を掛けた。

これまで歯牙にも掛けなかったチンピラヤクザ達から全裸に剥かれて鞭打たれるという怒りと屈辱感に苛まれた後に襲って来た絶望感に涙を目に溜めていた暁美は、母親から声を掛けられ、涙に霞む目でボンヤリと自分の正面に相對するように大の字に固定された母親の方に視線を向けたが、あるべき繁みを剥ぎ取られ、童女のように剥き出しにされてしまった股間に思わず目が行き、見てはいけない物を見てしまったように目を反らした。

少し離れた所には、担架に載せられたままの自分の父親がピクリとも動かさず死んだ様に横たわっていた。

この悲惨な光景に、堪えようとしても目から涙が溢れ、嗚咽を抑える事は出来なかった。

さつきまでは男達の非情な鞭打ちに対して気丈に堪えていたのに、男達から取り残された後、すっかり気弱になった娘の様子に狼狽した様に晴江は、声を振り絞り、気をしっかり持つ様に励ますのであった。

そんな気丈な態度で屈辱を堪えようとする晴江であったが、先程まで加えられた鞭打ちの激痛で水を浴びせられた様に全身に浮かべていた脂汗が今はすっかりと冷えて身体を凍えさせ、尿意がジワジワと込み上げて来るのを感じていた。

チラッと暁美の方を見ると腰をブルッと震わせる様子から娘も尿意を堪えている事が感じられた。

その時、男達の笑いさざめく声が響き、地下室につながる階段を何人もの男がドヤドヤと降りてくる音が聞こえた。

「さて、とんだ邪魔が入って中断したが、続きを始めようか。」

お竜を背負って地下の拷問室に降りてきた剛沢が子分達に声をかけた。

「そして、鞭打ちの刑には、お竜姐さんも飛び入りで加わって貰おうか・・・」

と、背負っていたお竜をコンクリート打ちっ放しにした床に下ろしながら言った。

「目高組の不始末の落とし前として、女房と娘は同罪だと言ったが、妾も同罪だぜ！」

剛沢が、周囲の男達を見回しながら面白そうに宣言したので、お竜の周りを取り巻く男達もこれからお竜も含めて無抵抗な裸の女達を存分に鞭打ち出来ると、好色そうな笑い声を上げた。

すっかり血の気の失せた顔をして、ぐったりとして床にうずくまるお竜の姿を見て、晴江と暁美は驚いて互いの顔を合わせた。

二人とも鎖に繋がれ大の字の立位に宙吊りにされたままであったが、今は猿轡を外されており、声を出すことは出来たが、お竜の変わり果てた姿を目の当たりにした二人は、言葉にして発することも出来なかった。

この地下室に踏み込んで来た時の、颯爽としたお竜の姿は消え失せ、そこには男達に取り囲まれ、膝を抱え込んで小さく身体を丸めて床に座り込み、怯えた目をしてガタガタと身体を震わせる一人のか弱い女がいた。

僅か二時間も経たない内にお竜の身に何が起きたのか？目高組でも組の娼婦にするため、家出少女や不良少女を連れ込んで、組の男達でマワシに掛けたことはあったが、今のお竜の姿は、まるで組の事務所に連れ込まれ、今まさに男達にコマされようとしてブルブルと震える怯えた家出少女の様に晴江達の目に映った。

「後から加わったお竜姐さんは、全身を鞭打たれて傷だらけのお二人さんに早く追いつかなければならない訳だから、多少苦しい格好をして貰おうか」と、壁のスイッチを操作して天井から鎖を下ろしながら剛沢が言った。

晴江や暁美の場合と違って、剛沢は天井から降りて来た鎖に取り付けられた革ベルトで、お竜の手を縛るのでは無く、お竜の足首を縛り付けさせた。

そして再び壁のスイッチを操作すると、鎖が上昇し始め、それに引かれてお竜の脚は大きく広げさせられた状態で、逆さに吊り上げられ始めた。

空中に大きく脚を開いた形で宙づりにされ、両脚に掛かる重さと、ギリギリまで股間を開かされる苦痛に悲鳴が上がった。

お竜が悲鳴を上げるのも構わず吊り上げ続け、お竜の頭が床から数十センチ離れた所で上昇は止められた。そして床に打ち込んだ杭に両手を縛り付けられ、お竜の体は空中に逆大の字となって固定されてしまった。

三人の全裸の女達は互いに正面を向ける形で、大の字に固定されたので、互いの様子をまざまざと見つめ合うことになった。

「どうだ、苦しいか？それに、これ以上無い程股をオッ^{ビロ}拡げさせられて恥ずかしいだろう？」剛沢が、開股逆さ吊りにされ、無理矢理拡げさせられた股に引っ張られて、天井に向けてこれ以上無いほどに広げ切った、お竜の秘裂を指でなぞりながら聞いた。

下の方でお竜がイヤイヤをするように首を振りたてた。その振動が宙につられた下半身まで伝わって来た。

「どうだ、見てみろよ、お竜姐さんのマ^マをよ、ツルツルだろう。これでお前たちと相子

だ」

陰毛を筆り取られ、剥き出しとなったお竜のバックリと開いた股間の恥ずかしい割れ目を指でなぞりながら、お竜の正面に位置する二人に隠す物の無いお竜の陰部を殊更卑猥に示しながら剛沢が言った。

見るとは無しに、目をやってしまったお竜の股間には、さっきまで覆っていた、こんもりとした春草は消え失せ、痛々しく赤く腫れ上がった股間の肉の間から、毒々しいまでに鮮やかな生々しい女の器官を曝け出していた。

「これから、お前達は、お前達に恨みを持つ男達に詫びを入れるため、ここを鞭打たれ、激痛に泣き叫ぶんだぜ・・・」

剛沢が両手の指でお竜の柔らかな褻を摘んで、さつきまで散々筒具を突き立てられ男達に玩弄されていたお竜の秘奥を一杯に開きながら、冷酷な目をして女たちに告げた。

剛沢の陰湿な言葉廻りと、淫靡に動き回る指先により女の源泉を搔き回され、お竜が恐怖に怯えた様に啜り泣きを漏らした。

お竜姐さんの鞭打ちは、ぜひ俺たちにやらせて下さいと、先ほどお竜から手酷い打撃を食らって、のされた大亜門戸会の男達が何人も詰め寄った。

「おい、良い物が在るぜ！さっきお竜姐さんのオ███コの毛を筆り取ったガムテープの残りだ！」

一人の男が手にしたガムテープを高く差し上げた。

「へへ・・・これでよ、オ███コのビラビラを思い切り開いたまま固定して、お豆やその穴を剥き身にして鞭打ちすれば、遮る物が無いからもっと痛みが増すんじゃないか？」

それは良い考えだ！と男達が歓声を上げた。

剛沢も無言のまま、この提案に面白そうに肯いた。

男達が喚き立てる残忍な計画を耳にして、この身に降りかかろうとする恐ろしい責め苦に恐怖して、大の字開脚の逆さ吊りにされたまま、お竜は目に涙を溜めてイヤイヤと首を振った。剛沢の許可を受けた男達が逆さ宙吊りのまま全開にされたお竜の股間に近づくと、笑い声を上げながら、お竜の秘所を柔らかく被っていた肉の褻を指で摘んで左右に大きく引っ張った。男達の手が天井に向けて無防備に開かれた股間の柔肉に触れた時、恐怖に駆られたお竜の身体がビクッと反応した。

そんなお竜の身体の動きに満足した様に陰湿な笑みを浮かべると、何人もの男達の指で陰唇

の襷を摘まれ、一杯に引き延ばされて、その奥に秘められたしっとりとした湿った秘孔が露わにされていった。

それは、ついさっきまで男達から様々な性具を突き立てられ悶えまくった、女しか持たない肉の筒の入り口であった。

血なまぐさい男達の社会の中で、凶暴な男達に伍して、これまで生きて来た自分であったが、今日程自分が女であり、男の力の前で無力であることを思い知らされた事は無かった。

無残にも敗北した惨めな女の象徴を男達の目の前に晒される羞恥に、イヤ、イヤと涙ぐんでき細かい悲鳴を上げ続けた。

「へへ・お竜！お前もちょっとの間に随分可愛い声を出すようになったじゃないか！」

「俺達に触らせまくって、散々ヨガリまくっている間に大人しくなってしまったじゃないか」

陰唇を左右に押し開かれむき出しになった肉芽の包皮を指先で剥き上げながら男が笑い声を上げた。

「さっきまで小便をチビリまくっていたのに、もう出しきったのかい？まだこの辺が湿って小便臭いぜ！」

目に残忍な光を浮かべ、涙ぐんで哀願を繰り返すお竜の様子を楽しそうに眺めながら、手にしたガムテープを大きく引き延ばすとビリリと裂いた。

その長いテープの端をお竜の太股に押し当て、太股に沿って密着させて行くと、もう一人の男が引き延ばして押さえていた、襷の端を上から被うように貼り付けて行った。

今又残忍な男達は自分に新たな責めを科そうとしていると、男達の残虐な意図に怖じ気づいたお竜が、イヤ！助けて！と涙声で悲鳴を上げた。

お竜の悲痛な叫び声を無視して、男達は大きく広げた陰唇をガムテープを使って太股にしっかりと固定してしまった。

「見ろよ、可愛いクリちゃんと、さっきまでヨガリ狂って汐を嘔きまくっていた孔が丸見えだぜ！」

「盛りのついた雌犬の臭いがプンプンとしてくるぜ！」

「そりゃー、雌犬の臭いじゃなくて、ちびった小便の臭いだろうぜ！」

「ハハ！^{チゲー}違いネーヤ！」

こうして、男達によりお竜の女の谷間は無残に大きく左右に捲り上げられ、その奥に秘められた柔らかな花園は外部に向かって隠す物も無く大きくさらけ出れてしまった。

このまま鞭を打たれば、何も遮る物の無いまま、女の命の籠もる箇所に鞭の雨が叩き付ける事は明らかであった。

絶体絶命の状態に追い込まれたお竜が嗚咽しながら恐怖でガタガタと身体を震わせていた。残酷な光を瞳にたたえて、男達が無残な蹂躪を待つだけのお竜の股間を見詰めた。

何人かの男は、お竜に手酷く股間を蹴り上げられたため、陰囊が熱を持って何倍にも腫れ上がって、治療を受けたとは言え、ズボンに擦れるだけでも悲鳴を上げるほどの痛みを未だに持っているため、まともに歩くことも出来ず、股をだらしなく拵げ、フラフラと危なっかしい、がに股の姿勢で歩み寄って来た。

いいだろうと剛沢が許可すると、男達は嬉々として鞭を奪い合った。

男達は鞭を手に三人の大的字に固定された全裸の女達の前に陣取ると、剛沢の合図を待った。剛沢が無言で首を縦に振った。

それを待ちかねていたよう、晴江と暁美の鞭打ちをお預けされていた男達は鞭を振るい上げると、ビュッと鋭く風を切る音を立てて、狙い通り女達の急所を思い切り打ち据えた。

その激しい痛みは股間から脳天まで電気が流れるように女の体内を駆け抜けた。

しかし、晴江も暁美も歯を食いしばり、何とかこの一撃を耐えた。

一方、お竜から股間を蹴り上げられ、未だに股間に激痛が走る植木が、

「お竜！お前に蹴られた金玉が腫れ上がって疼いて仕方ないぞ！この仕返しにお前の股の間のビラビラが腫れ上がって座布団みたいになるまで打ち据えて、このお豆も男の物みたいに大きく腫れ上げさせてやるぞ！覚悟しやがれ！」

と、叫ぶと、思い切り鞭を振り上げたが、股間の激痛にふらつくへっぴり腰姿で、痛くて力を込めることも出来ず、狙いも定められず、ペチャと太股を力なく打つだけだった。

この様に、大亜門戸会の仲間が笑いこけた。

植木は自分の不甲斐ない姿に、悔し涙を流しながら鞭を振るい続けたが、結果は同じであった。

たまりかねた坂本が植木の手から鞭を取り上げた。

「さつきは、よくも無様にのしてくれましたね・・・まだ頭がくらくらしていますよ」と、開股の逆さ吊りにされたお竜を見据えながら、鞭を手に首をゴキゴキ動かして言った。

「お礼にお竜姐さんにも、脳天が痺れるような鞭をお見舞いしますよ・・・」

と、残酷な目の色を浮かべてお竜を睨み据えて、静かに言った。

その冷酷な不気味な目の色にお竜は顔を青くさせて、ブルブルと小刻みに震え出した。
ここに単身殴り込んで来た時の威勢が消え、ただのか弱い女のように青ざめて震えるお竜を舌なめずりして嬉しそうに見詰めながら、

「お竜姐さんにそんなに怖がってもらえて嬉しいですよ・・・」

と、ぼそつと言うと、鞭を高々と振りかぶり、気合い諸共、お竜の開ききった女の中心にあやまたず、鞭を打ち据えた。

繊細な神経を集めた秘所の粘膜に鞭が鋭く食い込む音と共に、股間から脳天に電撃が走るような激痛に一瞬お竜の意識が飛んだ。

激痛に声も上げられず、白目を剥いて、大の字の逆さ吊りになった裸身をビクビクと痙攣させた。

それを合図とする様に、お竜の周囲を取り囲んだ鞭を手にした大亜門戸会の男達が、腹といわず胸といわず太股といわず全身に激しく鞭の嵐をくれた。

何人もの男達から間断無くまるでシャワーの様に鞭を受けて、お竜の白い身体が見る見る赤い鞭跡で染まっていった。

「見ろよ！鞭を受けてビラビラがバタバタと震えているぜ！」

股間に受けた激烈な鞭の衝撃がその中心部から左右の陰唇を通り脂肪を載せた下腹部に向かって波の様に伝播していく様子が在り在りと見られた。

その生々しい様子に居並ぶ男達から歓声が上がった。

一方、元の子分達から鞭打たれる晴江と暁美は、これまで背中や腹を打たれる苦痛には、気丈に耐えてきたが、この次元の違う痛みには、彼女達の強い意思さえも一瞬にして消し飛ばしそうであった。

ビシッ、ビシッと鋭い打撃音をたてて、女芯を続けざまに数度打ち据えられて、ついに女達の口から押し殺した悲鳴が立ち上った。

その悲鳴を耳にした、鞭を振るう男達は、一気に溜飲が下がる思いとなった。

嗜虐の快感に酔う男達は狙いをすまして、無防備な股間に在る女性の急所を打ち据えた。

そして、反動で奥に回った鞭の先端が股間の背後にまわり込み、敏感な菊花の周りの粘膜にも打撃を与えた。

その女体の柔らかい皮膜を打ち据えられる衝撃が、苦痛を超越した刺激となってビリビリと身体を伝わった。

剛沢に命じられてビデオカメラを回していた男達が、女達が降伏するのも間近だと感じてグッと身を乗り出した。

これまで気丈に鞭打ちの苦痛に耐え抜いてきた女達も、今や一打ちされる毎に衝撃のあまり意識が空白となり、強い意志を保ち続けるのが不可能となっていた。

今まで影も踏めない、雲の上の人の様に畏敬の目で見っていた女が、今は自分たちの鞭に苦痛にのたうち回る、ただの弱い女体に過ぎなかったかと思うと、嗜虐の欲望に火を点けられ、更に激しく打ち据え続けるのだった。

股間から責め上がる狂おしい痛みには耐えきれなくなり、最初に激しく悲鳴を上げたのは、すっかり弱々しくなったお竜であった。

そして、その悲鳴は暁美に移つり、ついには晴江も堪え切れず悲鳴を立て始めた。

女達のつんざくような悲鳴は次々と冪し、次第に大きくなっていった。

それに煽られるように、男達の嗜虐の欲望も更に大きくなって行った。

女達は苦痛に喘ぎ、涙を流し、激しく泣き叫んだ。

その女達の涙も男達の同情を誘うことは無く、逆に男達の劣情を激しく掻き上げるだけの様であった。

激しい苦痛に耐えかねて、女達は悲鳴を上げ、泣き叫びながら、鞭打つ男達に哀願し、今まで無礼に扱ったことを詫び、必死の思いで許しを請うた。

しかし、それすらも男達には加虐の快感に陶酔させる官能的な音楽の様に聞こえているようであった。

突然、暁美がヒィと小さく喘ぐと、ガクガクと体を前後に揺すり、そのままガクッと腰が抜けるように前のめりとなった。

それに続いて、暁美の股間から激しい放水が始まった。

鎖に吊り上げられ、空中に大の字の磔となった姿勢で、これ以上広げられない程、股を開いた状態で始まった激しい放尿姿に、周囲を取り巻く男達が激しい笑い声を上げた。

暁美に少し遅れて晴江も、激しく放尿を始めた。

溢れ出す尿が、赤く鞭打たれた傷口を刺激するのか、女たちは排泄しながら激痛に悲鳴を上げ、外聞もなくビクビクと腰を振り続けた。

しかし、一旦始まった放水を最早止めることは出来なかった。

数多くの荒くれ男達を従えていた、かつての女親分の颯爽とした姿はそこには無く、傷口を小水が洗う激痛に大声で泣きわめき、身を振りながら放尿を続ける女達の姿を取り囲む男達

が大声で笑い立てた。

肩から膝まで隈無く刺青に覆われ、唯一白い肌を残す下腹の、飾り毛を失った童女のような股間から黄色い液体をほとぼしらせる姿は、何か滑稽であり、また逆に何か妖しげな色香を立ち上らせていた。

取り巻く男達の哄笑の中で、腹の中に溜まった物を出し終えた女達は、再び意識を失ったようにグッタリと鎖に吊り下げられていた。

これまでの一部始終をビデオに収めていた撮影班も良い絵が撮れたと、機材を片付けに掛かった。

「これでお前達の不始末の落とし前もしっかり付けて貰った。俺の心も癒された。もうお前達には、何の恨みもつらみも無い。」と、剛沢が満足げに告げた。

女達は手と足を縛っていた鎖から解放されていたが、自分達のまき散らした小便に濡れた床の上に、荒い息を吐きながら力なく俯せに倒れ込んだままであった。

男達に鞭打たれ、座布団の様に厚く肥大し、赤く腫れ上がった陰唇は熱を持ち、ズキズキと突き上げるような激痛に、股間を閉じ合わせることも出来ず、大きく脚を開いたまま男達の目に無残に腫れ上がった凄惨な姿をさらけ出していた。

床にくずおれる三人の女を観察するように見下ろしながら、剛沢が女達に話し掛けた。

「もう、お前達に罪は無いが、最後に残ったのはこれだ・・・」

剛沢が担架の上で死んだように横たわる、奈和組長の血に濡れた手を掴み上げて言った。

全身に浮かべた脂汗で肌をテカテカと光らせた体を床に俯したまま、いまだ引くことの無いジンジンと込み上げる激しい疼痛に、腫れ上がった恥ずかしい箇所を閉じることも出来ず、身体を動かす事も出来ない女達は、剛沢が次に何を言うつもりかと、力なく顔を上げて不安げに剛沢の顔を見つめた。

「さて、こいつをどうする？このまま放っておくと死ぬぜ・・・どうだ、助けて欲しいか？」

と、腰を屈めて晴江の目を見つめながら聞いた。

「お願いします！助けて上げて下さい！」

晴江が何かにすぎるように必死に哀願した。

その晴江達三人の女の真剣な目の色を暫し確かめた後、

「いいだろう・・・、おい！誰か和久井先生を呼んで来い！」と、傍に居た子分に命じ、大至

急で呼びに行かせた。

「和久井先生と言うのはな、組の娼婦^{オンナ}が妊娠した時に墮胎させたり、組の男が出入りで怪我をした時に治療させたりしている、いわば大亜門戸会の産業医みたいなもんだ。」と、剛沢が得意げに喋った。

「おい、従業員が50名を超える事業所には産業医を置かなければならないという法律が在るのを知っているか？」と、横にいた子分に問いかけた。

突然変な質問を浴びせられ、どう対応したら良いのか判らず、目をキョトキョトさせる子分を可笑しそうに笑いながら、

「ヤクザといっても法律は守らなくては、いけないからな・・・」と、笑いながら継ぎ足した。

「和久井先はな、金には汚いが、腕は確かな医者だ・・・」

「誰が金に汚いだ！何時も保険も使えないような患者ばかり連れて来おって！これでも良心的に過ぎる位だ！」

いつの間にか剛沢の背後に来ていた和久井医師が剛沢を睨み付け、口を尖らせた。

「へへ・・・聞こえていたのか？ さて、先生に見て貰いたいのはこの男だ・・・」と、和久井医師に担架の上に横たわる奈和組長を示した。

和久井医師は白衣の前ボタンを留めながら、床に膝を付いて瀕死の奈和組長を診察し始めた。大亜門戸会専属の医師として不摂生な生活を送っているのか、顔は酒に焼けたような赤ら顔で、ほお骨の張ったやせ顔の額は禿げ上がり、数本の長い毛をすだれのように横に這わしていた。

晴江達はこんな医者で大丈夫かと不安を感じたが、今はこの男にすぎるしか道は無かった。

「こんな酷い怪我をした人間を見るのは、初めてだ・・・一体全体どうすればこんな傷を負うんだ・・・」と、ぶつぶつ呟きながら深刻そうな表情を浮かべて聴診器を当てたり、脈を取ったり、怪我の深刻さを確認していた。

和久井医師は一通り検診して、そしてホッとため息を吐くと、

「随分ひどい怪我をしているな、助かるかどうか判らないが、治療しようとしたら、ざっと六千万円は掛かるな・・・」と、剛沢に向かって言った。

剛沢は、また和久井医師の強欲が始まったとばかりに笑い出し、

「どうだ、六千万円出せば組長の命は助かるかも知れないさぞ。」

と、床に俯す女達に向かって言った。

「どうだ、全財産を失った、今のお前達に六千万円用意出来るか？」

剛沢の問い掛けに虚しく下を見つめる晴江達であった。

確かに六千万円は大金であるが、目高組が健在である頃は金庫にそれぐらいの現金は在った。しかし幹部達の命乞いのため全財産を剛沢に譲渡してしまっていた事を悔やんだ。今の自分達には一文も無いのだ！

「兎に角、大至急治療に掛からないと、このまま直ぐに死んでしまうぞ！」

和久井がどうするんだ？と、下から剛沢の顔を覗き込みながら言った。

奈和親分が瀕死の状態で在ることは目高組の女達にも理解出来た。

しかし、現在の状態ではどうすることも出来ない悔しさに唇を噛んで下を見詰め続けるしか無かった。

「どうだ、俺がお前達に六千万円貸してやろうか？」

突然の剛沢の申し出に、晴江達の顔がぱっと明るくなった。

「お願いします、お金を貸して下さい！」

混乱する意識の中で、剛沢の陰湿な計画も判らず、晴江が藁にも縋る思いで、憎い敵の親分に哀願するように叫んだ。

「よし、いいだろう・・・お前達三人で、一人一二千万円ずつだ。」

と、三人の合意を確認するように女達を見ながら言った。

「待って下さい！その借金は全て私が負います！」

晴江は、娘やお竜に大金の借金を負わす訳には行かないと、必死の表情を浮かべて剛沢に縋った。

「駄目だな・・・三人が二千万ずつで、相互に連帯保証するという条件でなければ金は貸す訳には行かないな・・・」

剛沢が冷たい目で床に蹲る三人を見下ろしながら言った。

「何しろ無担保で一文無しの女に六千万もの大金を貸そうと言うのだ・・・お前にもしもの事が遭ったら借金を取りっぱぐれてしまうからな・・・晴江が死んだら暁美とお竜で三千万ずつ、二人いなくなれば残った一人が六千万の借金を背負うという事だ・・・こちらリスク分散という奴をしておかないといけないからな・・・」

奈和の命を人質にとって、迫る剛沢の陰湿な物言いに、暁美もお竜も、今は必死の思いとなって、首を縦に振った。

「これで決まりだな・・・」

三人が借金に同意した事に満足そうに笑みを浮かべて、

「おい、貸し金の契約書を用意しろ」

と、横に居た子分に声を掛けた。

その間に、和久井医師は、「今日は忙しくなるな・・・」と、言い残して、奈和組長を担架に乗せたまま子分に担がせ、自分の診療室に消えて行った。

「俺は、お前達の組のような阿漕な利息は取らない。利息は法律上限の29.2パーセントだ。

ヤクザといえど法律は守らなくちゃいけないからな・・・良いな？」

と、届けられた契約書を広げて、女達に書面の説明をすると、それぞれに署名させた。

署名捺印が終わった契約書を満足そうに懐にしまい込みながら、

「所で、この借金をどのようにして返済してくれる？」

と、冷淡な表情で女達に聞いた。

「何でもして、必死に働いてお返しします。」と、晴江が言うのを

「そんな身に付ける物も無くて働ける所がどこに在る？」

と、卑猥な目で三人の裸身をねっとり眺めながら、意地悪そうに問い返した。

「服を少しの間貸して下さい。全国には奈和が世話した恩義のある人達が大勢います。それから金策して来ます。」

「駄目だ！担保も何も持たない無一文のお前達に大金を貸したんだぞ！お前達を外に出してそのままトズラでもされたら目も当てられないからな。」

と、決め付けるように怒鳴った。

「ああ・・・そんな事・・・」

女達が返答出来ず黙って俯き続けるのを見てから、剛沢が目妖しい光を浮かべて続けた。

「裸で働けて、しかも大金が稼げて、借金なんか直ぐ返済できる方法がある・・・例えば、大亜門戸会専属の娼婦オンナになる・・・と言うのはどうだ？」

目高組を滅亡させた憎い大亜門戸会のために体を売れと提案されて、女達の顔色がさっと変わり、憎々しげに剛沢の顔を睨み付けた。

「おいおい、そんな怖い顔をするなよ。さっき、『何でもして、必死に働いて返します』と言ったのはお前達じゃないか？ それじゃ別にどんな方法があると言うのだ？ 素っ裸のお前達では、この屋敷から外に出ることも出来だろう？」

剛沢に抗すことも出来ず女達は黙って下を見つめた。

「決まりだな？これで・・・稼ぎの取り分は七三で七がお前達だ。どうだ？これなら借金

なんて直ぐに返せるだろう？ 労働契約書を作っておこう、おい誰か労働契約書を持って来い！」

女達が返す言葉もなく黙って下を向くのを見つめて嬉しそうに叫んだ。

借金を片とした労働契約など法的には無効であり、売春行為の契約など無論論外であるが、追い込まれた女達には十分効果があることを剛沢は、今までの経験で知っていた。

女達が敗北感に打ち拉がれ、まともな思考も出来ない内に一方的に契約書に署名捺印させた。作成し終わった契約書を女達の手から引ったくするように奪うと、勝ち誇った様に笑いを浮かべた剛沢が契約書の内容を大声で読み上げた。

一方的な条項の説明を聞きながら女達は屈辱感にワナワナと身体を震わせ続けた。

剛沢の廻らした罠に嵌って、とうとう三人の女達が大亜門戸会専属の娼婦に墜ちた事を聞いて、突然、銀子が甲高い声で笑い始めた。

「ホホホ、元目高組の女親分さんとお嬢さんと親分の愛人さんが、借金返済のために大亜門戸会専属の娼婦になるなんて傑作じゃない！私は目高組で壺振りをやる前にソープで働いていたことがあるのよ。目高組に入った節にはお竜姐さんから壺の振り方や賭場での作法など色々親切に教わったけど、これからは私が男を喜ばせる腰の振り方を懇切丁寧にお教えするわ！」

と、嬉々として笑い続けるのであった。